

2013 年 07 月 08 日

## 【チャオプラヤー川に吹く風（1）】はじめまして



「Thai Festival 2013」開会式：タイ日両国の来賓によるテープカット。日本側からは日タイ友好議員連盟会長を務める、塩崎恭久衆議院議員らが出席。（筆者撮影）

先日、東京都渋谷区の代々木公園で「タイ・フェスティバル」（2013 年 5 月 11 日～12 日：タイ王国大使館主催）が開催されました。会場内では、タイ料理や果物、各種物産品などの販売ブースをはじめ、タイの公的機関や NGO/NPO の展示ブースが計 250 以上出店し、イベント広場では伝統舞踊・音楽や現代音楽などが次々と披露されていました。

このフェスティバルは、今年で 14 回目を数え、外国主催の代々木公園でのフェスティバルの草分け的イベントだと聞き及びます。公式ホームページによると、今回は二日間で約 30 万人の来場者があったということです。筆者が訪れた初日は生憎の雨だったにもかかわらず、幅広い年代・国籍の方が場内を埋めており、「タイ」の魅力に関心を寄せている人たちの多さに圧倒される思いでした。

筆者が初めてタイを訪れたのは 1987 年—大学生として日本政府の「東南アジア青年の船」に参加した時です。当時 6 か国だった ASEAN を歴訪しましたが、日本人と 6 か国の若者が同数ずつ乗船し、船内活動・寄港地活動を共にした 2 か月間は、私の「異文化間コミュニケーション」の原体験となりました。

その後、1、2 年の内に「東南アジア青年の船」のタイ人の“船友”二人が、早稲田大学と上智大学に相次いで留学を果たしました。交友を重ねるにつれ、「彼女たちが話すタイ語を私も…」という思いが膨らみ、2 年間タイ語を真剣に勉強。それが留学の志へとつながり、1992 年に国立チュラロンコン大学文学部修士課程（タイ・スタディーズ）に進学しました。

タイで過ごした年月は 4 年あまり。その間暮らしたチュラロンコン大学の学生寮は、寮生のほとんどがタイ人という“小さなタイ社会”でした。そして、大学院ではタイについて歴史、政治経済、言語学など様々な分野の専門家から教えを受けました。本連載では、筆者の経験に新たな取材も交えて、タイ

社会の慣習やタイ人の価値観について掘り下げてまいります。

表題の「チャオプラヤー川」とは、全長約 1200 km、約 16 万 m<sup>2</sup>の流域面積（タイの全国土は 51.4 万 m<sup>2</sup>）を誇る、タイ第 1 の川です。タイ北部の山岳地帯に源流をもつ、“ピン川” “ワン川” “ヨム川” “ナーン川” などの支流がナコンサワンで合流してチャオプラヤー川となり、タイ中部で巨大なデルタを形作ってタイ湾に注いでいます。チェンマイ、スコータイ、アユタヤ、トンブリ、そして現ラタナコーシン王朝も、全て支流を含めたチャオプラヤー川流域で盛衰してきました。

チャオプラヤー川は、日本の地図や地理の教科書では以前「メナム川」と表記されてきましたので、「メナム川」といえば、おわかり下さる方もあるかもしれません。「メナム」とは、タイ語で「川」の意味。したがって“メナム川＝川川”ということになってしまいます。流域の住民が「メナム」と呼んでいたため、固有名詞と誤解されたのではとされています。

この川には、かつてどんな風が吹き、いま、その風はどんな色を帯びているのでしょうか。毎回、皆さまにタイの様々な表情を少しずつご紹介していきたいと思います。

2013 年 08 月 05 日

## 【チャオプラヤー川に吹く風（2）】タイの国土と地理区分



タイの地理区分（筆者作成）：画像をクリックすると地図を拡大することができます。

タイ国観光スポーツ省の過去 10 年のデータによれば、タイを訪れる日本人旅行者の数は、ここ 10 年ほど、ほぼ毎年 100 万人を超えています。観光ツアーでは、バンコク滞在とアユタヤ、チェンマイなどの古都訪問を組み合わせたコースやプーケット島など南部のリゾート地滞在が定番ですが、今号では、この国の全体像をつかんでいただくため、少し俯瞰的に国土の概要と各地方の特性について解説します。

タイの国土は 51 万 4,000 平方キロメートルで、人口は 6,593 万人（2010 年：タイ国勢調査）。日本の約 1.4 倍の国土に、日本の約半分の人口ということになります。首都バンコクには 800 万人を超える人々が居住しており、これは全人口の 12～13%にあたります。

国土は全部で 1 都（バンコク）・76 県から成り、「中部」1 都 25 県、「北部」17 県、「東北部」20 県、「南部」14 県の 4 つの地方に分類するのが一般的です。中部 26 都県の内、東側の 7 県を分けて「東部」と呼んだり、さらに「東部」7 県の内、タイランド湾に面した 4 県のことを「東南部」と呼んだりすることもあります。

### （1） 中部

中部のチャオプラヤー川流域には肥沃な平原が広がっており、タイ最大の穀倉地帯です。米作をはじめとし、野菜や果樹の栽培も多彩に行われています。首都バンコクは、所得が全国平均の約2倍と高く、第三次産業がバンコク都内総生産の約83%を占めるなど、小売業やサービス業が発展しています（出典：JETRO「バンコクスタイル」2013年2月）。歴代の王朝はみなチャオプラヤー川沿いの都市を中心に繁栄したため、中部タイは歴史を通じて政治や文化の中枢であり、往時の都は外国人も渡航・滞在する国際都市でした。（スコータイは、本分類法では北部タイの県と位置づけられます。）

## （2） 北部

北部の中核地、チェンマイは13世紀に建都され、以後チェンマイ、チェンライをはじめとする盆地の諸都市を中心とした「ラーンナー・タイ王国」がラーマ5世の治世（19世紀）まで存続していました。中部タイとは異なる独自の文化や言語を誇りとする意識が今もみられます。また、北部の山岳地帯には多くの少数民族が居住しています。少数民族は伝統的に焼畑耕作（稲、トウモロコシなど）を行い、かつては換金性の高いケシの栽培も盛んでしたが、1980年代後半からタイ王室の支援プロジェクトによってその生活基盤の改善が図られ、ケシに代わる商品作物（コーヒー、野菜、果物、花など）の栽培が推奨されてきました。

## （3） 東北部（イサーン地方）

東北部一帯は海拔200m前後のコーラート高原とほぼ重なり、面積・人口両面でタイ全土の3分の1を占めます。最多の人口（約250万人）を擁するのはナコーンラーチャシーマー県です。東北部は降水量の少なさや土壌の性質ゆえに農業生産性が低く、バンコクへの出稼ぎ者の最大の送り出し地域となっていますが、質の高い絹（タイシルクのトップブランド、ジムトンプソンも東北産の絹を素材にしています）やタイの高級米（香り米・ジャスミンライス）など特筆すべき産品もあります。かつて北方から南下したラーオ族の子孫が現在の東北部の人口の大半を形成しており、文化や言語の領域で、メコン川を挟んで国境を接するラオスと共有される部分が多くあります。また、カンボジアと国境を接する地域にはクメール語の話者が100万人以上存在すると言われます。

## （4） 南部

南部マレー半島では錫が産出され、ゴムの栽培も盛んです。同地は古来インド洋とタイランド湾を結ぶ要衝であり、ナコーンシータマラートは国際商業都市として栄えました。タイの人口はその95%が仏教徒ですが、南部国境4県（パタニー、ヤラー、ナラーティワート、サトゥーン※）ではイスラム教を信仰するマレー人の人口が約7割と高比率です。第二次世界大戦後、隣国マレーシアの独立やタイ中央政府への反発、経済的不平等を背景に、これら南部国境県で「マレー自治国建設運動」や「分離運動」が起きました。政府は無理な同化政策を推し進めず、イスラム文化尊重によって融和の道を探ってきましたが、同地域では、今日に至るまで一部の反政府武装勢力による爆弾テロ事件が断続的に発生しています。（※注：サトゥーン県では大多数のムスリムがタイ語を話し、近年は摩擦がほとんど起こっていないため、2000年頃からは同県を外して「南部国境3県（問題）」と称されるようになりました。）

以上、タイの国土や各地方の概略をご紹介しました。次号では、引き続きタイ国のなりたちについて

…今度はその民族構成の面からお話しします。

2013 年 09 月 02 日

### 【チャオプラヤー川に吹く風（3）】タイの民族構成と「華僑」今昔



『タイからの手紙』（ボータン作／富田竹二郎訳）上下巻（筆者撮影）：1945 年 8 月に中国からタイに移住した華僑の男性が、22 年間に亘り、故郷の母に 100 通の手紙を書き綴る...というスタイルで進行する小説。主人公がタイ社会に定着・同化していく過程が、中タイ両民族の生活習慣の違いや、戦後の生活変遷史とともに描かれている。

タイの総人口（6,500 万人）の約 8 割を占めるのはタイ族です。タイ族の他には、華人系、インド系、マレー系、クメール族、モン族、ベトナム族、山岳少数民族などのエスニックグループが居住していますが、国の根幹が揺らぐような深刻な民族問題にはつながっていません。タイ族の割合が大多数を占めていることや、以下に述べるように、華人系とタイ族が社会的に融合してきたことが、その背景として挙げられます。

華人系は、統計上は総人口の 1 割程度ながら、経済界をはじめ、政界、官界、学界など諸方面での存在感・影響力はその数字以上のものがあります。

タイにおける中国系住民の歴史は近代史以前に遡ることができます。アユタヤ王朝時代のタイには多くの華僑商人が居留していましたが、1630 年に国王による貿易独占制度が敷かれると、彼らは貿易に関わる官吏として登用されました。力をつけた華僑はさらに徴税人や武官などの職も得るようになり、功績に応じて爵位を与えられ、貴族階級に上る者もありました。

時代は下って 19 世紀後半。タイは、英国と結んだ「ボウリング条約」（1855 年）によって王室の貿易独占権を失い、世界貿易システムの中に否応なく組み入れられます。こうした中、華商は米の輸出をは

じめとする貿易業や海運業、金融業などに進出し、タイ経済を実質的に牽引・支配するに至ります。一方で、中国人労働者の移民奨励策（中国人の納税を3年に一度で可とする、1910年までの優遇政策）により、新たな出稼ぎの華僑の流入も急激に進みました。清朝末期の混乱と貧困が“押し出し要因”となっていた状況もあります。彼らの多くは苦力（クーリー）と呼ばれる肉体労働者や商店の下働きなどから身を起し、独立した商人になっていきました。

ところで、東南アジアの華僑は、その出身地により「福建」「潮州」「客家」「広東」「海南」の五大グループに分類され、母語（中国語方言）もそれぞれ異なります。タイの華僑は、その過半数を潮州系が占めており、華人社会内で連帯が生まれ易い土壌がありました。潮州（現在の潮州市）は広東省東北部に位置するも、その言語は広東語とは系統が違う潮州語（隣接する福建省南部の閩南語の一種）です。

さて、1949年の中華人民共和国成立後は（1975年の国交樹立まで）中タイ関係が断絶しました。以後、タイ政府は中国からの移民を禁じたため、タイに流入する新規中国人の波は途絶えます。本国が社会主義国となったことにより、中国籍の在タイ華僑は、共産主義者であると見なされ、規制や弾圧を受けました。しかし、タイ人になる道は制度的に開かれており、タイ国籍を取得した中国系市民は何ら差別されることはありませんでした。（村嶋英治「タイにおける華僑・華人問題」『アジア太平洋討究』2002年3月）結果的にタイに帰化して根を下ろす華僑が増え、華僑とタイ人との社会的融合が加速しました。タイの国籍は“属地主義（出生地主義）”をとっていますので、タイで生まれた華僑の子（僑生）は、全てタイ人になります。華僑・僑生とタイ族との婚姻も進み、宗教上も、華人系の多くがタイの上座部仏教に帰依するようになりました。

日本からの旅行者や赴任者は、バンコクに滞在・駐在することが多いと思いますが、企業やホテルの従業員、商店主などの多くは華人系市民で、バンコクの大学生も8割以上が華人系と言われています。タイ語の名前を持ち、タイ語を話す彼らを、われわれは「タイ人」として認識し、接するわけですが、人口比で1割しかいない華人系市民の多くがバンコクに集中している事実を忘れてはならないでしょう。「自分は公私共にタイ人との付き合いがあり、タイ人をよく知っている」と自認する駐在員が、実は華人系との接点しかないこともよくあります」とは、タイビジネスに精通した元田時男氏（「タイ国経済データベース」主宰）の言です。

タイで「中華色」を感じるのは、毎年春節を前に、赤を基調とした華やかな中華式年賀カードが店頭で並ぶ時、そして、「ギンジェー」の時節です。ギンジェーとは、華人系の菜食期間（旧暦9月1日～9日）のことで、この間、ギンジェーに臨む華人は、肉や魚、卵や乳製品の摂取を断ち、心身を清めます。（ギンは「食べる」という意味のタイ語。ジェーは精進料理を指し、漢字で「齋」と書きます。）市街のそこそこに「齋」と書かれた黄色い旗をはためかせた精進料理の屋台が並び、活況を呈するのですが、バンコクには、かほど華人系市民が多かったのかと驚かされます。

2013 年 09 月 30 日

## 【チャオプラヤー川に吹く風（4）】「タイ」と「シャム」～揺れ動いた国名



チャクリー・マハー・プラサート宮殿（1882 年竣工）。ラーマ 5 世の命により、ラタナコーシン王朝 100 周年を記念して建てられた。英国・ビクトリア様式とタイの建築様式が混在する。（撮影：佐藤惣一）

現在のタイの正式名称は「タイ王国」、英名は“Kingdom of Thailand”です。（※注）今も「シャム猫」という言葉にその名残をとどめていますが、タイがかつて「シャム」と呼ばれていたことをご存知の方も多いのではないかと思います。「タイ」と「シャム」—この新旧二つの国名には、一体どのような背景があるのでしょうか。

端的に述べれば、「タイ」がタイ人による自称（Tai という民族名）であったのに対し、「シャム」は元来、外国や他民族による呼称でした。

「シャム」という言葉はインド起源のサンスクリット語由来で、人間を指す場合は「褐色／浅黒い」、国を指す場合は「黄金」を意味します。（東南アジアの周辺国と比べ）タイ人の皮膚の色がとりわけ黒いとはいえないであろうこと。また、かつてインド人がビルマ南部～マレー半島を「黄金半島」と呼んでいたことから、後者の可能性が高いとされます。

ヨーロッパでは、16 世紀初めに東南アジアへ進出したポルトガル人がまずこの地を“Siao”“Syao”と称し、それが転じて“Siam”となって近世の国際社会で定着したようです。中国では 17 世紀の明代の史書にシャムが「暹羅」と記載されており、日本では江戸時代、この「暹羅」を「しゃむろ」と読んでいました。

近代以降のタイ史をみると、国名が「タイ」と「シャム」の間で揺れ動いたことがわかります。

1826 年【タイ】→1855 年【タイ】→1856 年【シャム】→1939 年【タイ】→1945 年【シャム】→1949 年【タイ】

1826年に英国の東インド会社と結ばれたバーネイ条約では「タイ」と表記されていました。1855年にボウリング条約が調印された際の国名も「タイ」でしたが、翌1856年の批准時の国号は「シャム」になりました。

1932年に起こった立憲革命によって“タイ民族主義”が高まると、ピブーン・ソングラーム政権は、1939年「プラテート・タイ」（英名：Thailand）を正式国名としました。しかし、英仏などのヨーロッパ諸国は第二次世界大戦終結まで従来の「シャム」に固執し、外交文書等での使用を継続しました。大戦中、日本と協調体制にあったタイは、敗戦国には連ならなかったものの、戦後の和平交渉で連合国と対峙せねばならず、譲歩の姿勢を見せるため、1945年末に国号を「シャム」に戻します。

最終的に国名が「タイ」に落ち着いたのは1949年5月のことです。1947年11月のクーデターを経て、1948年4月に再び首相となったピブーン・ソングラームが「タイ」を復活させました。ピブーン思想は「汎タイ主義」ともいわれ、タイが（近隣諸国に居住するタイ族も含めた）タイ系民族の盟主たることを宣するものでした。西洋諸国やアジアの周辺国で呼称される「シャム」をそのまま国号とすることはよしとしなかったのです。

その際、「タイは“自由”を意味する」と、国名としての相応しさが強調されました。しかし、冒頭でも述べたように、「タイ」は民族名の“Tai”に由来するので、「タイ＝自由」という解釈にはピブーン政治的な意図があったと言われます。当時の国民感情としては、「タイ」という国号の定着を受け容れつつ、旧来の「シャム」にも愛着やゆかしさを感じていたのではと想像されます。

その証拠と言っているかわかりませんが、かつて今も、「シャム」を冠した組織名は枚挙にいとまがありません。ちなみに、「シャム」はタイ語で“Sayam”（サヤーム）、英語で“Siam”（サイアム）と発音されますが・・・

タイ最大手のセメント製造業「サイアムセメント」（1913年、ラーマ6世により創設）、タイで最も権威ある学術団体「サイアム協会」（1904年創設）などシャム時代に創立されたものも、日刊紙「サイアム・ラット」（1950年～）、バンコクの商業地区「サイアムスクエア」（1965年～）のように「タイ」改称以降の創設になるものもあります。

身近なところでは、店名に「サイアム」が付くタイ料理レストランが日本にも多いので、この言葉に馴染みのある方もいらっしゃるでしょう。「シャム」と「サイアム」、カタカナにすると結構違って見えますが、タイ語では同じ言葉です。

※注）「タイ」という日本語は、本来“Thai”という形容詞・名詞に対応するものです。国名を表記する際は、正確には「タイランド」または「タイ王国」とすべきですが、日本ではマスコミも含め、一般的に「タイ」と表現しています。

2013 年 10 月 28 日

## 【チャオプラヤー川に吹く風（5）】タイ人の「開放性」と外国人への意識



アユタヤ遺跡外れの公園と池（撮影：佐藤惣一）

タイを訪れる外国人は、タイ人の「開放性」を感じると思います。筆者も、日本人だからと特別視されたり、身構えられた経験はほとんどなく、むしろ、好意的な温かさを感じる場面の方が多くありました。

留学時代、4年間を過ごした大学寮は、住人の9割以上がタイ人学生でした。当初は、ルームメイトのタイ人以外とはあまり話す機会がなかったのですが、ある日、学生3人が少し恥ずかし気に「一緒にご飯を食べに行きませんか？」と誘ってくれたのを機に、芋づる式に人間関係が広がりました。最初に声をかけてくれた3人は、どんな思いであったのか…「外国人への関心」「自室にひきこもらないようにとの思いやり」もあったかもしれませんが、筆者はそこに何よりも、“こだわりなく、外国人を受け容れる心”を感じました。

タイ研究者の河部利夫は、タイ人のホスピタリティについて「よく、仏教による博愛の精神に由来するものと説明されるが、それよりも前に、稲作に生きるタイの村の人びとの満ち足りた生活、豊かな風土に育まれたところによるものととらえるべき」と述べています。（『タイ国理解のキーワード』勁草書房、1989年、p.113）つまり、タイの根幹をなす村落社会は、伝統的に“部外者”を受け容れるだけの余裕のある、開かれた社会であった…ということです。

さはさりながら、タイ人の中に、外国人への心情的な距離感が全くないわけではありません。以下に紹介する二つのタイ語は、タイ人の異民族に対する呼称（俗称）です。外国人をこのように、ある意味主観的に分類し、総称しているところに、タイ人の世界観の断片をみるような気がします。

### ●「ファラン」

タイ語で外国人のことは、「チャーオ・ターンプラテート」（チャーオ＝民族、ターンプラテート＝外

国)と呼びます。この言葉は、日本語の「外国人」同様、一般名詞で特段の含意はありませんが、タイ人は外国人の中でも、白人のことを「ファラン」と呼び分けます。これは、日本語で欧米人を「外人さん」と呼ぶのに似ています。

「ファラン」という言葉について、ティダーラット・ノイスワン氏（タマサート大学文学部、東京工業大学社会工学部大学院卒）に確認したところ、その語源には二説あるとの由。すなわち、（１）ペルシャ語を起源とする説と（２）ポルトガル語（franco）を起源とする説です。（１）のペルシャ語起源説は、中世の十字軍遠征と密接なつながりがあります。「フランス諸侯の軍を中心に構成されていた第１回十字軍（1096～99年）が遠征先で自分たちのことを“franc”と称したため、侵攻を受けた中東地域で“franc”が“西洋から来た白人”を意味する言葉として定着した」「のちに国際都市アユタヤで交易を行っていたペルシャ商人が、西洋から来た白人を同様に“franc”と呼び、それが当時のタイの人々の語彙に加わって、音が“フラン”から“ファラン”に変移したのではないか」…というものです。

タイ人の中には、少なからず白人や西欧文化への憧憬があります。これは、日本にも似たり寄ったりのところがあるでしょうが、日本と若干違うのは、社会的・市民感情的な、国際結婚へのハードルの低さです。前々回の記事で、タイ政府の同化政策により、華人とタイ族との婚姻が進んだことを書きましたが、元々タイ族の「純血志向」は強くないため、タイ人と「ファラン」との結婚もごく自然に受けとめられます。

## ●「ケーキ」

「ケーキ」は中国語の「客」が原義で、タイ語で「客人」を意味します。この言葉が指し示すのは、インドネシア、マレーシア、バングラデシュ、スリランカ、パキスタン、インドなどの国々、そして中近東、北アフリカまでの人々です。お客さんとして遠くから来た人を「ケーキ」と総称しているわけですが、東南アジアにありながら、インドネシアとマレーシアが「ケーキ」なのは、イスラム教を遥か西の国からもたらした人という考え方に拠ります。（河部利夫、前掲書）

前出のティダーラット氏は「西方から来た人々を“ファラン”と“ケーキ”に分類していると考えerとシンプルで分かり易い」と言います。「“ケーキ”自体には、差別的な意味合いはないが、呼ばれる側の人々は、そのことを決して歓迎していない」とも。

「ケーキ」と総称される人々の大半はイスラム教徒なので、仏教徒主体のタイ人との間で融和が進みづらい部分があることは否めません。タイ人が彼らに対して感じる異質性が目に見えない壁となって、ともすれば「ケーキ（客）＝いつまでたっても、なかなかタイ社会に溶け込むことができない」という意味を増幅させてしまうのかもしれません。

さて、タイ人の日本人に対する意識はどうか…それは次号に譲りたいと思います。

2013 年 11 月 25 日

## 【チャオプラヤー川に吹く風（6）】タイ人の日本や日本人への意識



折り紙を習う子供たち。バンコク・トンブリ地区の運河沿いで（筆者撮影）

前号では、タイ人の「開放性」と外国人への意識について取り上げました。今号では、タイ人の日本や日本人に対する意識について考察してみます。タイ国と日本の間には、アユタヤ王朝時代から、交易を中心とした 600 年以上の関係史がありますが、本稿では、現代タイ人の意識や記憶に残る日本・日本人像を考えるため、第二次世界大戦期以降に焦点を当てたいと思います。

1941 年 12 月 8 日未明、真珠湾攻撃と時を同じくして、日本軍はタイ各地に進駐を開始しました。タイを直接侵略、攻撃するためではなく、英領マラヤ、シンガポール、ビルマへの進軍の足掛かりとするためでした。進駐の際、各地でタイ軍との間に戦闘が起きましたが、翌朝、時のピブン首相が日本軍の平和進駐を公式に認めたため、抵抗は収まりました。

タイは日本と攻守同盟を結び、（意に反する形で）米英へ宣戦布告します。結局、1946 年までの 5 年間、約 5 万人の日本軍がタイに駐留。日本軍による強制的な物資の調達によって、経済は破綻し、未曾有のインフレが市民生活を苦しめました。さらに、日本軍は、インド・ビルマ方面を侵攻すべく、1942 年 6 月～1943 年 10 月まで、タイービルマ間約 415 km を結ぶ「泰緬（たいめん）鉄道」を建設。そのために連合軍の捕虜や東南アジアの日本軍占領地域から連行した労働者、地元タイ人など計 40 万人以上を徴用しました。敷設工事は、手つかずのジャングルを切り開く過酷なもので、熱帯特有の風土病に罹患する者も多く、数万人規模（数については諸説あり）の犠牲者を出してしまいます。第二次世界大戦中のタイで、日本はこうした負の歴史を刻みましたが、日本軍が（同盟国人である）タイ人を攻撃しなかった点で、その後の対日感情は、日本が戦時中、侵攻・占領した他の東南アジア地域のそれとは大きく異なるものとなりました。

戦後、タイは積極的に外資導入策をとり、1960 年代には日本企業が急激にタイに進出しました。しかし、二国間の構造的な貿易不均衡が顕著となり、1972 年には、タイ人学生が「日本商品不買運動」を実行。国民全体に反日感情が膨らんでいきました。当時、反日感情は、周辺の国々でも高まりを見せており、1974 年 1 月に田中角栄首相が東南アジア 5 か国（インドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガ

ポール、タイ）を歴訪した際は、各地で抗議行動に遭いました。

タイ・日両国が、貿易不均衡を是正するために努力を重ねた結果、日本企業のタイ進出による摩擦は減少し、1980年代半ばごろから、海外投資先としてタイが積極的に選ばれるようになりました。1997年のアジア通貨危機は日系企業に大きなダメージを与え、その後も、度重なる政権交代や、2011年の洪水など、幾多の出来事を経ています。日本とタイの経済的関係は長期的に安定しているといえるでしょう。

以上が、日本とタイの現代関係史の枠組みですが、現在のタイには、1970年代初頭に表出したような反日感情はありません。

文化面で言えば、日本のサブカルチャーといわれる、漫画やアニメの浸透ぶりはかなりのものです。私の留学時も、「ドラえもん」などの人気アニメが吹き替え版で、タイの子どもたち向けに放映されていました。日本の漫画本の翻訳は、タイの大学の日本語学科の学生のよいアルバイトとなっていると聞いたこともあります。タイの子供たちは、幼いころから、こうしたサブカルチャーを通じて、日本文化に触れ、親しみを感じています。

ところで、タイには、タイ人なら誰もが知っている…という、日本人が主人公の小説があります。1957年に発表されたトムヤンティの作品、『クーカム』（邦題『メナムの残照』：西野順治郎訳）です。主人公は、第二次世界大戦当時、タイに駐留した日本の軍人“小堀”とタイ人女性のアンスマリンで、「クーカム」はタイ語で「運命によって結ばれている二人」を意味します。小堀は創作上の人物ですが、タイ人と親和することに心を砕く、誠実で信義に篤い日本人として描かれています。

この小説は、1970年代から何回もドラマ化、映画化されました。なかでも、タイの国民的歌手、トンチャイ・メーキンタイが小堀役を演じた1990年のドラマは大ヒットしました。筆者が渡タイした1992年は、トンチャイ版『クーカム』の余韻がまだ冷めやらぬ頃だったため、私が日本人とわかると、「コボリを知っているか？」と声をかけられることが度々でした。この『クーカム』は、2013年にもリメイクされ、映画版、ドラマ版両方が上映されたばかりです。日本ではあまり知られていない『クーカム』ですが、タイでは、タイ人と日本人の国境を超えた愛情・友愛を描いたシンボルのような作品です。

2013 年 12 月 24 日

## 【チャオプラヤー川に吹く風（7）】タイ人の日本語学習



日本語を勉強する子供（3 歳）：

最近是小さいうちから日本語を勉強させようとする保護者が増えている。（写真提供：OJSAT）

前号では、タイ人の日本や日本人への意識について取り上げました。今号では、それに関連するテーマとして、タイ国における日本語教育の現状に光を当てたいと思います。

タイで日本語教育が本格的に始まったのは 1960 年代—タイ王国元日本留学生協会附属日本語学校（1964 年）、タマサート大学日本語講座（1965 年）、チュラロンコン大学日本語講座（1966 年）が相次いで開設された時期です。その後、日本語専攻、日本語学科をもつ大学は増加の一途をたどり、現在は、タイ国内の国立・私立大学合わせて 96 の大学で日本語教育が行われています。

（※国際交流基金・バンコク日本文化センターが 2010 年に実施した調査による。）



社会人クラスの授業風景：

右列の最奥が河島久枝さん（写真提供：OJSAT）

1981年から、高校の第二外国語（＝8つの外国語から1つを選択）の選択肢に日本語が正式に加わったことで、中等教育段階でも日本語教育が広まり始めました。2001年には前期中等教育でも日本語講座の開始が可能になったため、学習者数はさらに増加しています。タイの日本語学習者数は、現在世界で7位（1位韓国、2位中国、3位インドネシア、4位オーストラリア、5位台湾、6位米国）、2012年の学習者数は約13万人となっています。（出典：国際交流基金ウェブサイト「学習者数上位10カ国・地域の学習者数及び変化」<http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/result/survey12.html>）

こうしてみると、半世紀に及ぶタイの日本語教育の歴史の中で、大局的には「教育機関の増加に伴う学習者数の拡大」そして「学習開始年齢の早まり」という2つの変化が進行していることがわかります。

日本語教育の現場では実際に、どのような変化が起こっているのでしょうか？—タイで最も古い日本語教育機関である、前出の「タイ王国元日本留学生協会附属日本語学校」（OJSAT）で2000年から日本語教師を務めている、河島久枝さんに話を聞くことができました。

「OJSATに関して申しますと、私が着任した頃は“日系企業に就職したい”という实际的・実利的な動機によって入学してきた生徒がほとんどでした。しかし、現在は“クールジャパン”に惹かれ、日本のゲームやアニメをより楽しむために言葉を学びたいという人たちが増えてきています。具体的には、“ゲームソフトの中で使われている日本語を理解したい”“日本のアニメを、タイ語の字幕に頼らずに観たい”というニーズです。これは、ある意味、学習者たちの環境が以前よりも裕福になってきていることの証でもあります。日本語がビジネス＝生活の手段のために必要なものから、趣味の世界を豊かにするものへと位置づけが大きく変わってきています。」

「ビジネス目的の生徒も従前通りいますし、日本を旅行したいので旅の会話ができればいいという人、文字学習はやらないという人、日本の新聞や漫画が読めるようになりたいという人など…学習者のニーズはほんとうに多岐にわたるようになりました。学校としては、このように細分化したニーズにいかに対応していくかが課題です。」

タイ全体に目を転じれば、日本語学習者のレベルが総体的に上がってきているのが顕著な傾向だそうです。河島さんによると、現在は、大学の日本語学科に入学した時点で、日本語が未学習という学生は少ないとのこと。日本語能力試験（N1～N5：数が若い方が難度が高い）についても、昔は大学で日本語を専攻した後、4年生でN2をとるのが一般的だったのが、現在は高校生の内にN2をとってしまうケースも珍しくないとか。

「N1レベルでは、日本人教師であれ、タイ人教師であれ、日本の文化を熟知し、日本のビジネススタイルにも精通していることが求められます。タイで日本語教育が浸透し、学習者数が増えるにつれ、高いレベルの学生を教えるための方法や教材を充実させていくことが急務になってきています」と今後への展望を述べました。

そして最後に、「日本語が外国語として魅力的であるためには、何よりもタイ人にとって日本が魅力的な国であることが肝心です。どんなニーズであれ、個々の“学びたい”という希望の原点には、やはりその国への思いがあるはず。日本が魅力的であれば、日本語教育の将来も本質的には安泰だと、私は思っています」と言葉に力を込めました。

日本政府により、(2013年7月から)滞在15日以内のタイ人の観光ビザが免除され、タイ人訪日者数のますますの増加が期待されています。「日本が魅力的な国であるかどうか」という本質的な問いは、日本語学習のみならず、両国の交流の様々な場面で、より一層重みを増してくることでしょう。

2014 年 01 月 27 日

## 【チャオプラヤー川に吹く風（8）】王国としてのタイ その1～タイ人と王室



バンコク、ラチャダムヌーン・ノック通りにかかるアーチ。プーミポン国王とシリキット王妃の肖像写真が掲げられている。（筆者撮影）

タイが王国であることは、よく知られていますが、タイ国で実際に暮らしておりますと、王室のプレジエンスの大きさが感じられます。そう感じさせられるのは、何よりもまず、日常生活において王室に関する情報に触れる機会がきわめて多いこと、そして、身近なタイ人が敬愛の念をこめてロイヤルファミリーについて語る場面に何度も出くわしたためでしょう。

タイのテレビニュースには、毎日「本日の王室一家」を紹介する枠があり、王室の方々が、“今日どこでどんな活動をされたか、どのような式典にご臨席になったか”が伝えられます。そうしたニュースで用いられるのは、「ラーチャーサップ」（王族用語）と呼ばれる特別な言葉で、使われる名詞・動詞は一般タイ語とは全く異なります。タイ国民は、学校教育を通じて、ラーチャーサップを学びますが、大人になってからタイ語を学んだ筆者のような外国人には、おいそれとは身につけられるものではありません。タイ国民は、王族とお話する機会がある場合はラーチャーサップを用いるのが原則です。しかし、ラーチャーサップが話せなかったり、間違えたりしたからといって、「不敬」をとがめられることはありません。気さくな現国王は、地方行幸の折などに、地元の人々と接する際には、一般的なタイ語で応じられてきたと聞き及びます。

プーミポン国王（プーミポンアドゥンララデート王：1927 年生まれ、1946 年即位）は、現在、離宮のあるフアヒンで病気療養中ですが、これまでも、現在も、国民から受ける信頼と尊敬は絶大です。絶対的な権威の上に君臨する王としてではなく、国民の幸せに心寄せる慈父のような存在として人々に愛されています。

タイでは、現国王の誕生日（12 月 5 日）を「父の日」、シリキット王妃の誕生日（8 月 12 日）を「母の日」としています。12 月 5 日は「国王誕生日」とすると同時に「建国記念の日」でもあります。建国

記念の日は1938年に定められた際は、タイ国の政体が立憲君主制に変わるきっかけとなった立憲革命の日（1932年6月24日）にちなみ6月24日でしたが、1960年、サリット首相の時代に現国王の誕生日である12月5日に変更されました。

1992年5月17日、「暗黒の5月」と呼ばれる出来事がありました。スチンダー陸軍最高司令官が首相になったのを受けて、反対勢力が開いた集会を軍が弾圧し、学生を含む多数の死傷者を出す惨事となったものです。ご記憶の方もあるでしょうが、この事態を收拾するため、プーミポン国王はスチンダー首相と民主化運動指導者のチャムロン氏を呼び、和解を諭しました。“椅子に腰かけられた国王の足元に跪く両名”…というシーンが報じられたため、王位の絶対性が印象づけられたのではと思いますが、タイでは王族と一般市民が接する場合、同じ目線で対面するということはありませんので、タイ人にとっては特異な光景ではありません。ここで注目すべきは、むしろ、現国王が立憲君主制の下、政治とは距離を置きながら、いかに重要な“バランスャー”であり、国民の求心力となってきたか、という点です。

プーミポン国王による調停は、1992年5月のこの出来事に限らず、タイの多くの政争の場面で逼迫した状況を打開するきっかけとなってきました。タイ人の心理の中には、どこかに「いろいろな対立があっても、最後の最後には王様が計らって下さる」という思いがあるように感じられます。それがために、政争の当事者や国民が、100%自力で事態を収束させ、落とし所を見つけるという訓練を積まずにきてしまった…とも言えるのでしょう。※注)

ところで、タイ人にとって「黄色」は特別な色です。なぜならば、黄色はプーミポン国王の「誕生曜日色」だからです。タイでは生まれた曜日ごとに決まった色があり、「誕生曜日・色占い」もあるほどです。（日曜は赤 / 月曜は黄色 / 火曜は桃色 / 水曜は緑 / 木曜はオレンジ色 / 金曜は青 / 土曜は紫色）

タイ国サッカー・ナショナルチームの歴代ユニフォームは、赤、青、黄色のいずれかの色で作られています。赤と青は国旗（三色旗：赤が国家と国民、白が仏教、青がタイ王室を表す）の構成色で、黄色はプーミポン国王の誕生日色です。また、「赤シャツ派（タクシン派）」「黄シャツ派（反タクシン派）」の攻防も記憶に新しいところですが、「黄シャツ派」の黄色は、やはり国王の誕生日色です。このように、国民生活や政治行動の様々な場面で、目に見える形で、王室とりわけ現国王への畏敬の念が表現されていることは注目に値します。

今号では、現在のタイ人と王室の関係性をみてみましたが、次回から、少し時代を遡ってタイの王朝史・近代史の流れを大づかみにとらえ、タイの歴史が現代タイ人の価値観にどんな影響を及ぼしているのかを探ってみます。

※注) 昨今、政府側・反政府側の対立が強まり、2013年11月以降、政情が混乱、反政府デモ隊が大規模なデモを展開しています。2013年12月5日にフアヒンで開かれた国王誕生日式典では、国王自身が約1年ぶりに演説を行い、政府側と反政府側の和解を促すメッセージを発信されました。（2014年1月15日現在も、騒乱はまだ継続中で、動向が心配されます。）

2014 年 02 月 24 日

## 【チャオプラヤー川に吹く風（9）】王国としてのタイ その2～歴代王朝の推移



ラーマ1世から8世までの像（ナコンパトム県の Thai Human Imaginary Museum にて筆者撮影）

今回は、現在のタイ人と王室の関係性に光を当てましたが、今号では、タイの王朝史の流れを大づかみにとらえてみましょう。

現在タイの国土となっている地域には、古来様々な民族・文明が去来し、複数の王国が割拠した時代もありました。しかし、タイ国の王朝史を語る時、歴史的に現在に繋がる基点とされるのが、スコータイ王朝（1238～1438年）です。スコータイ王朝の特色は、一言でいうならば、王権が絶対的なものではなかったことです。国王は“民衆の父”的存在であり、ゆるやかな統治体制が敷かれていました。

1351年に建国されたアユタヤ王朝は、元々是一个の地方都市でしたが、ヒンドゥー教を核とするインド文化を受容しながら国家形成を進めることで、王権を強固なものにしました。（王をシバ神やビシュヌ神の化身であるとし、神格化しました。）またトライローカナート王（在位1448～1488年）の治世では、「サクディナー制」と呼ばれる統治制度が完成します。サクディナー制とは、国王以外の全ての官僚・民衆を階級化するものですが、それにあたって「ライ」という土地面積を表す量詞が単位となりました。奴隷の5ライから副王の10万ライまでの幅があり、各人はこの幅の中に位置づけられ、社会的身分が確定しました。（赤木攻著『タイの政治文化—剛と柔』勁草書房 pp.50-54）なお、前出のスコータイは、アユタヤ王朝に征服されたのではなく、その一都市として包摂される形で王朝としての歴史を閉じました。

アユタヤ王朝は、16世紀半ばから隣国ビルマから度重なる侵攻を受けます。その背景には、マラッカ海峡の制海権がポルトガルの手落ち、その結果、マレー半島諸港の重要性が増したという国際環境の変化があります。1767年にアユタヤが陥落してもなお侵攻は続き、1824～1826年の第1次英緬戦争でビルマが敗北するまで、タイはビルマ軍の脅威にさらされ続けました。

1767年にアユタヤが壊滅した後、軍を率いて首都を奪還し、自ら王となって、トンブリーに一代限り

の王朝を開いたのがタークシン（潮州華僑・鄭氏とタイ人の母の間に生まれた華人系）です。その 15 年の治世のほとんどは、新王朝の安定のための戦争に明け暮れ、北方のランナー王国を帰属させ、カンボジアやラオスなど近隣諸国への宗主権を回復しました。治世後半には王は自ら出陣するのをやめ、チャオプラヤー・チャクリー将軍とその弟を戦地に派遣します。チャクリー兄弟は各地で戦功を上げますが、彼らがアユタヤ王朝の貴族階級出身だったことから、旧支配層の支持を集め、その政治的地位が急激に高まります。そうした中、タークシン王が自らを“阿羅漢”と称して僧侶に跪拝を命じ、従わなかった者を厳しく罰したことがきっかけとなり、旧貴族層の間に王打倒の気運が起こります。1782 年、ついにチャオプラヤー・チャクリーがタークシン王を逮捕。同王は「乱心した王」として処刑されるに至ります。

チャオプラヤー・チャクリーは、トンブリーの対岸、クルンテープ（注：バンコクは西洋人による通称）に新王朝を創設します。現ラタナコーシン王朝（チャクリー王朝）です。王位についたチャオプラヤー・チャクリー（ラーマ 1 世）は、アユタヤ王朝の理念の回復を目指し、儀礼祭式、宮中作法を復活させるとともに、仏教改革（僧侶の統制を強化）、対外貿易の拡大、労働力や技術者としての中国人移民の受け入れ拡充…といった改革策を積極的に進め、王朝の礎を築きました。現在のプーミポン国王（ラーマ 9 世）まで、ラタナコーシン王朝の歴史は 230 年以上を数えます。

河部利夫氏は、ラタナコーシン王朝以降の国王像について、「国王は実質的に権威の第一の源泉とされた。1932 年の立憲民主クーデターによって出現した憲法でも、たびたびのクーデターによって改訂されてきた憲法においても、また、“主権はタイ国民に発する”とあっても、実質的にはその存在は絶対視され、その地位の絶対性が、時の政治権力の正統性のよりどころ、理由づけの足がかりになっている」— また、「タイ・ナショナリズムの発展は王権を軸として進んできているし、これからもしかりとしてもいいと思う」と述べています。（『タイ国理解のキーワード』勁草書房、pp.72-73）

以上、スコータイ王朝からラタナコーシン王朝に至る流れ、王権の推移を駆け足でみてきました。ラタナコーシン王朝以降のタイについて申し述べるにすれば、“どんな形の政治運動であれ、王権を否定する形でそれが進行することはなかった”という事実、目をとめていただければと思います。

次号では、タイの近代化の過程で王室が果たした役割に注目し、19 世紀から 20 世紀初めを生きた二人の王の足跡を紹介します。

2014 年 03 月 24 日

## 【チャオプラヤー川に吹く風（10）】王国としてのタイ その3～タイの近代化と王室



巨大ショッピングモールの吹き抜けに掲げられたラーマ5世の肖像（バンコクのMBKセンターにて筆者撮影：2013年10月）

創始以来 230 年以上を数えるラタナコーシン王朝では、現国王に至るまで、9 代の君主が王位に就いてきました。今号では、タイの近代化の過程で王室が果たした役割に注目し、19 世紀から 20 世紀初めを生きた二人の王、ラーマ4世とラーマ5世の足跡を紹介します。

### ●ラーマ4世（モンクット王：1804-68年）

ラーマ4世は、即位したのが47歳と、国王としての始動は大変遅いものでした。ラーマ2世の正妃を母にもち、父王の跡を継ぐ立場にありましたが、1824年に出家。同年ラーマ2世が崩御し、王族・貴族らの推戴によって16歳年長の異母兄がラーマ3世となると、そのまま僧籍に留まり、1851年のラーマ3世崩御まで27年間、出家生活を送ったためです。

27年間の出家時代、モンクット王子は学問に勤しみ、タイ古来の学問（サンスクリット語、パーリ語、仏教、文学など）の他にも、西洋の科学、天文学、英語を学び、ヨーロッパの神父やアメリカの宣教師とも積極的に交流して、西洋事情や新知識を吸収しました。西洋列強がインドシナ半島に圧力をかけ始めた時代、仏教界に身を置きながら、（宗教と科学を明確に分け）国の将来に有益な知識を得ようと努めたのでした。

その知識と国際感覚は、即位後の治世にいかんなく発揮されます。当時アジアでは、アヘン戦争（1842年）、第2次英緬戦争による南部ビルマの英国併合（1853年）といった事態が進展していました。ラーマ4世は、西欧列強に対して、貿易の門戸を完全に開放する必要性を痛感し、1855年の英米仏との修好通商条約締結に踏み切りました。これにより、それまでの閉鎖的な王室独占貿易は潰え、シャムの経済体制も大きな転換期を迎えることになるのです。

ラーマ4世は、即位の後、35人の妃との間に82人の子女をもうけますが、シンガポールから英国人教師を招いて、王族や官僚、王子・王女たちに英語と世界の新知識を授けます。

1956年に公開されたアメリカのミュージカル映画『王様と私』は、ラーマ4世と英国人教師アンナとの心の交流を描いたものです。「西欧人の目から見た東洋」という偏見の制約を受けている点や、シャム王室の描かれ方に誇張や事実と即さない面があることから、タイ国では王室の権威を損ねるものとして上映が禁じられています。

ラーマ4世は、1868年、西洋の科学者と共に日蝕の日を算出し、チュラーロンコーン王子を伴って南タイまで観察に出向きます。しかし、そこで王子共々マラリアに罹患し、王はバンコクに帰着した後に病死します。

#### ●ラーマ5世（チュラーロンコーン王：1853-1910年）

ラーマ4世の跡を継いだラーマ5世（チュラーロンコーン王）は、西欧列強に屈せず、近代化にむけて諸改革を推進した英王として、現在もタイ人の敬愛の念を集めています。時代的には、日本の明治天皇（1852-1912年）と同時期を生きた国王です。

即位した時は弱冠15歳であったため、摂政（チュワン・ブンナーク）の補佐を受け、以後も絶大な権力を握るブンナーク一族による門閥政治を排除できませんでした。しかし、ラーマ5世は粘り強く世代交代の時期を待ちながら、王弟たちの育成に努め、優秀な王弟を高級官僚や省庁の大臣に任ずるなどして、自身の権力基盤を固めていきました。

旧勢力が政界を引退した後、ラーマ5世は、「チャクリー改革」と呼ばれる近代化政策に着手します。その内容は、統治改革、教育制度新設、交通網の整備など多岐にわたります。統治改革において、奴隷制度を廃止したことは画期的な出来事であり、植民地主義の脅威から国を守るべく、行政の中央集権化を進めたことも特筆に値します。チャクリー改革によって、タイは「絶対王政」の時代に入り、この体制は1932年の立憲革命まで続きました。

このように、タイの近代化は、ラーマ4世と5世の治世に推進されました。4世が地ならしをし、5世が具体的な改革を行ったといってもよいでしょう。日本では明治維新によって旧幕藩体制が崩壊し、

体制が覆った土壌の上に、明治新政府の手で近代化が進められましたが、当時のシャムにおいては、王朝自体が揺らぐことはなく、国王自らが近代化の先鋒に立ちました。

その過程で、英仏への領土割譲（計6回）を余儀なくされ、30万平方キロの国土を失ったものの（※注）、また、タイが英仏勢力の緩衝地帯になり、植民地化を免れたという幸運があったにせよ、国王のリーダーシップによって、国の主権が守られたという事実は、大きな治績として残りました。タイ人にとって、王室が今日の立憲君主制の下でもなお絶対的な存在であり続けている背景には、こうした史実の重みがあると思われます。

※注）現在のタイ王国の国土は51万4千平方キロメートル

2014 年 04 月 21 日

## 【チャオプラヤー川に吹く風（11）】タイ国のスポーツ事情



タイ国立競技場の正面（バンコクにて筆者撮影）

去る 2014 年 2 月、ソチで行われた冬季オリンピックには、タイ国から二人の選手が参加しました。プロのバイオリニストとしても有名なヴァネッサ・ヴァナコーンさん（女性：35 歳）と旗手を務めたカネート・スチャリッタクンさん（男性：22 歳）。共に、アルペンスキー部門に出場しました。熱帯の国だけに、一般的にタイ人はウィンタースポーツに馴染みがありませんが、タイ選手が冬季オリンピックに初出場を果たしてから、ソチが 3 度目の五輪でした。



国立競技場周辺のスポーツショップ。色とりどりのスポーツウエアが店頭に並ぶ。（筆者撮影）

タイで市民に親しまれているのは、サッカー、セパタクロ、バドミントン、テニス、ダンス、エアロビクス、太極拳、テコンドー、水泳、ジョギングなどです。種目によりけりですが、スポーツクラブなどの有料施設で楽しむ市民もあり、また、同好の士が集まり、公園の一角で身体を動かす風景もよく見られます。

タイ国立シーナカリンウィロート大学・体育学部で教鞭をとるピチャヤヴィ・パヌラッタノン博士によると、タイでは「するスポーツ」としては、サッカーが断トツとのこと。皆が皆チームに入り、サッカーコートでプレイしているわけではありませんが、公園や空き地などで子供や若者がボール回しやミニゲームをしている光景は、筆者も頻繁に目にしました。

「観るスポーツ」としては、“その時々で、フィーバーしている種目”の人気の高まります。（例えば、東南アジア競技大会“SEA Games”で、タイ選手の活躍が伝えられると、その種目に注目が集まるなど。）現在は、バドミントンやバレーボールの観戦熱が高いそうです。

教育課程での「体育」に関しては、小学校では毎日1時限、中学・高校では週2時限、授業が組まれています。体育の授業で扱うのは、サッカー、ハンドボール、バスケットボールなどの球技と体操、伝統的な剣舞、陸上種目などですが、「公立学校では予算の関係上、道具が古く、新品になかなか換えてもらえないという問題もある」と、パヌラッタノン博士。

さらに“公教育における体育教育”が抱える問題について、「体育教師の待遇が不十分で、大半の体育教師が収入を増やすために副業をしている現状がある」と語ります。副業としては、学校外でスポーツを指導したり、スポーツジムのインストラクターをするケースが多いようです。

スポーツの振興は、（1）国民全体がスポーツ・運動に親しむこと（スポーツ人口の広がり）と、（2）トップ選手のレベルアップ・・・という2つの側面から進めていくのが有効ですが、（1）に対しては「体育教育への予算拡充により、教育の質を上げていくこと」が一つの鍵となりましょう。

（2）については、「スポーツ選手の引退後の職業安定を図ることが必要」というのが、パヌラッタノン博士の持論です。（同博士自身も、かつては女子バスケットボール、タイ・ナショナルチームの選手でした。）「引退後の身分が保障され、職業の選択肢が増えれば、選手は安心してスポーツに打ち込み、能力を伸ばすことができる、それがひいてはタイ全体のスポーツ水準の向上につながるはず」とみえています。

さて、本稿の最後に、タイと日本のスポーツを通じた交流として、サッカー界の動向について触れておきましょう。

近年、Jリーガーのタイ・リーグへの移籍が一つの潮流になっており、2014年4月現在、「タイ・プレミアリーグ」（トップリーグ）及びディヴィジョン1（2部リーグ）で、合わせて30人以上の日本人元Jリーガーが活躍しています。今シーズンは、日本代表経験者のタイ移籍が話題になりました。

この潮流の背景には、2012年にJリーグがタイ・プレミアリーグとパートナーシップ協定を締結したことや、それ以降、Jリーグチームがタイのクラブチームと個々に提携を進めている・・・などの環境の整備があります。タイのクラブチームで監督やコーチを務める日本人も出始めています。

Jリーグのレベルが上がり、日本人選手・指導者のスキルや経験がタイで囑望されていることの表れですが、結果として、「規律を重んじ、各々がチームのために働く」という日本の流儀が伝わり、（どちらかというところ「個で動く」）タイ人選手のプレイスタイルに多少なりとも影響を及ぼしているようです。日本のやり方が長期的に浸透していくかは分かりませんが、タイのプロサッカー界が、日タイスポーツ交流の舞台になっていることは注目に値するでしょう。

2014 年 05 月 19 日

## 【チャオプラヤー川に吹く風（12）】タイ社会と仏教 その1～"上座部仏教"とは？



バンコク近郊県の寺院の仏堂（ナコンパトム県 ワット・ドーンワイにて筆者撮影）

タイ国が仏教国であることは、よく知られています。タイ社会に広く浸透している仏教とは、どのような性質のものなのでしょうか。日本の仏教とは、どこが違うのでしょうか。——仏教は、タイ人の精神世界の根幹を成していると言っても過言ではなく、タイ人やタイ社会について知る上で、この国の仏教について一応の理解をしておくことは大変重要です。本連載では、今号から4回にわたって、タイの仏教について取り上げたいと思います。

タイでは、仏教徒の数が圧倒的で、全人口の **95%**を占めると言われます。しかし、仏教は「国教」ではなく、国民には信教の自由が保障されています。マレーシアとの国境沿いの南部4県にイスラム教徒が多く居住することについては、本連載（2）タイの国土と地理区分で述べた通りです。

### ●大乘仏教と上座部仏教



上座部仏教の古い經典。パーリ語で書かれている。(バンコク・トンブリ地区にあるワット・パークナムにて筆者撮影)

タイやラオス、ミャンマー、カンボジア、スリランカで信仰されている仏教は、上座部仏教といい、日本に伝わった大乘仏教とは大きく異なります。

日本の大乘仏教は、インドからチベット・中国を経由して伝来したのですが、東南アジア諸国の上座部仏教は、インドからセイロン（現在のスリランカ）に渡り、そこを拠点として伝播したものです。こうした伝来ルートから、前者を「北伝仏教」、後者を「南伝仏教」と呼び分けることもあります。

大乘仏教（北伝仏教）と上座部仏教（南伝仏教）の根本的な違いは、前者が大衆の救済を重視する「在家仏教」であるのに対し、後者が「出家仏教」である点です。大乘仏教では、信者は家族をもち、通常の経済活動を行いながら仏教に帰依することができますが、上座部仏教は、自力で解脱を目指す出家者のみが悟りに至れるという考え方に立っており、僧侶は完全に俗社会を離れて修行に勤しみます。

上座部仏教は、「小乗仏教」と呼ばれることがよくあります。「大乘」の対になるものとして、こちらの呼称の方が、日本では一般的かもしれません。しかし、「小乗」とは「小さい乗り物＝出家者個人の救済だけを目指すエゴイスティックで卑しい教え」を意味しており、自分たちの仏教がより慈悲深く、優れているとする大乘仏教徒側からの蔑称です。

## ●サンガの構成と戒律

修行者の生活共同体のことを“サンガ”と呼びますが、サンガにはその秩序を守るための律があり、僧侶は「227 の戒律」を守らねばなりません。中でも禁を犯すと最も罪が重いのが、（１）性交 （２）盗み （３）故意の殺人 （４）虚言（仏道修行において、まだ到達していない特別の精神的状態に達したと嘘をつくこと） です。

（１）については、僧侶は結婚することはもちろん、日常生活の中で異性と身体的に接触することも厳しく禁じられています。僧侶がバスなどの公共交通機関を利用する時は、僧侶の隣には必ず男性が座る

よう、そして車内が混み合った場合、女性客が万に一つも僧侶の衣に触れてしまう恐れがないよう、男性客が僧侶の周囲をガードします。在家信者が僧侶に捧げ物をする際も、男性なら両手で僧侶に進物を渡しますが、寄進者が女性であれば、僧侶は“パー・クラブ”という黄色い布を取り出し、女性はその上に進物を載せて、僧侶に受け取っていただく…という間接的な方法がとられます。

破ると、微罪に類される戒も数多くあり、例えば、「故意に生物の生命を奪ってはならない」、「綿入りの布団を用いない」、「正午から翌朝陽が昇るまでは、一切の固形物を食してはならない」などが挙げられます。僧侶は蚊がまとわりついていても決して叩くことはしません。僧坊ではベッドやマットレスを用いず、床の上に布を敷き寝床とします。また、食事に関しては、1日2回、午前中のみ許されますので、在家者が結婚式や葬式などで僧侶を招き、儀式の後で食事を供する時も、正午までには食べ終えていただけるよう、午前11時過ぎには料理を準備します。

上座部仏教で僧侶になるための資格は、男性であること、そして満20歳に達していることです。20歳より前の青少年は、「ネーン」（少年僧）として出家し、その守るべき戒律の数は、227ではなく10戒です。（1.殺生 2.盗み 3.邪淫 4.虚言 5.飲酒 6.定時間外の食事 7.歌舞などの娯楽 8.装身具・香水の使用 9.高く、大きい寝台の使用 10.金銀を受け取ること）

歴史上、上座部仏教の世界に尼僧団は存在していましたが、10世紀頃に消滅したと言われています。持戒式を経て剃髪し、寺院で起居することを許された“メーチャー”という女性修行者がいますが、サンガの正式な構成員ではなく、あくまで在家の修行者という立場です。メーチャーたちは白衣をまとい、8戒（上記のネーンの10戒から、第8項と第10項を除いたもの）を守って暮らしています。

さて、次号では「タイ人とサンガの関係」について、二つの側面に光を当てて考えてみます。

2014 年 06 月 16 日

## 【チャオプラヤー川に吹く風（13）】タイ社会と仏教 その2～タイ人とサンガの関係



寺院の境内で売られている「タンブン」のためのセット（バンコク・トンブリ地区のワットクンチャンにて筆者撮影）

統計によると、2012 年のタイの僧侶の数は約 29 万人、ネーン（少年僧）の数は 6.1 万人です（出典：Statistical Yearbook Thailand 2013）。タイの全人口は 6,500 万人(2010 年)で、男女の人口比では男性が若干少ない（男性：女性≒“49：51”）ので、それを加味して計算すると、約 3,200 万人が男性であり、僧侶の数は全男性人口の 1%弱。僧侶とネーンを合わせると 1%強が出家者…ということになります。

### ●タイにおける男子出家の慣例

227 の戒律に従って出家生活を送る上座部仏教の僧が、世俗の暮らしに再び戻りたいと願った場合、還俗することは自由です。還俗した人が「修行の道からドロップアウトした」というマイナスのイメージで見られることはありません。

タイ社会では、僧籍を経験することが「大人になるための通過儀礼」ともなります。一時的に出家する男性も多く、冒頭で紹介した統計は、そうした一時出家者も含んだ数と思われます。一時出家者は、伝統的に、雨安居（うあんご）という雨季の約 3 カ月間（7 月中旬から 10 月下旬）仏門に入るのが慣例でしたが、現在は 1～2 週間程度の短期出家をする人が多いようです。タイ語には出家経験者を意味する“コン・スック”（熟した人間）、出家経験のない男性を示す“コン・ディップ”（未熟者）という表現があり、僧籍経験の有無によって、人間としての成熟度が測られる一面があります。

さらに言えば、男子が出家することは、両親への、特に（僧になることのできない）母親への何よりの孝行になります。子供が出家し、修行を積むことで、親に功德がもたらされると考えるのです。当然のことながら、たとえ一時的な出家であっても、わが子が得度式を終えた途端、親子の関係は、僧侶と在家者の関係に変わります。親は僧となった息子に対して、跪いてワイ（合掌による挨拶）をし、僧侶

に対する敬語を用います。息子は息子で、俗世で男性が一般的に使う“ボム”（私）という一人称を使わず、“アッタマー”と自称し、僧として超然と両親に接します。

## ●在家者の“タンブン”と“福田”としてのサンガ

上座部仏教では、出家者は日々托鉢に出、読経し、仏教經典を学ぶなどして、修行に励みますが、修行はあくまで、個々の僧が自力での解脱を目指して行うものであり、在家の大衆の救済を願ってのものではありません。

では、タイ国で人口比 95%である仏教徒のほとんどを占める在家者はどのような形で、サンガ（修行者の共同生活体のこと）と関わるのでしょうか。

その答えは“タンブン”です。タンブンとは一言でいえば「功德を積む」こと。具体的には、早朝、托鉢の僧侶に食事を差し上げること、僧院・僧侶に供物を捧げることなどです。僧侶は直接金銭を受け取ることはできませんが、僧侶にお布施を渡すための“バイパワーラナー”という独特の小切手があり、それをデックワット（寺院で僧侶の身の回りの世話をする付き人のこと）に渡し、必要な品物を買ってもらうことができます。僧侶が身につける黄衣や、歯ブラシやせっけんなどを進物として捧げる人もいます。経済力があれば、寺院を建立したり修復したりすることもスケールの大きなタンブンです。また、より個人的なレベルでは、前述のように、男子が出家することは、その親にとってのタンブン行為となります。

タイ人は、現在の自分が置かれた状況は前世の行いの結果であり、現世での行いの総決算は、来世に反映されると考えます。現世で恵まれた環境にある人は、前世でおおいに功德を積んだからであり、現世の自分が恵まれていなくても、熱心にタンブンすることで、よりよい来世が期待できる・・・という思考です。こう書きますと、「現世は前世の行いの結果なのだから、今、苦境にある人は、どうあがいても、現状を変えることができない」という悲観論につながるのでは？と類推したくなりますが、タイ人は、タンブンによって現世をも好転させることができると考えており、功德を積む行為を、現実の自分や家族の暮らしとのつながりの中に位置づけています。

サンガは民衆のタンブン行為によって支えられ、民衆はサンガによって“功德を積ませてもらっている”という互惠的、相互補完的な構図がここに 있습니다。そして、サンガは“功德を生みだす源”であるという意味で「福田」と呼ばれます。

タイで早朝の托鉢風景をご覧になった方はおわかりかと思いますが、鉢の中に食べ物を入れる人々は僧に対し恭しくワイをするものの、僧が御礼にワイを返すことはしません。托鉢は、僧侶たちが日々の糧を得るための行ですが、決して“恵んでもらっている”わけではありません。むしろ“民衆にタンブンの機会を与えている”行為であり、感謝するのはタンブンする側なのです。

本稿の最後に、タイのサンガを扱った、興味深い2冊の書籍をご紹介します。1冊は、後に文化庁長官も務めた文化人類学者、青木保氏による『タイの僧院にて』（初版 昭和51年、中央公論社刊）です。著者が実際にタイの僧院で得度し、還俗するまでの体験をつづったもので、僧侶としての暮らしやタイ上座部仏教の姿が細やかに描かれています。

もう1冊は、ウィモン・サイニムヌアン著（桜田育夫訳、めこん刊）の『蛇』という小説です。中部タイの農村を舞台にしており、貧しい農民たちに「タンブン」を要求し、そのなけなしの財を吸い取ろうとする貪欲な寺院や、黄衣をまといながら大罪を犯す僧侶などが登場します。この小説に書かれた事象が、実際のタイ仏教界に通じるのかはともかく、「サンガ」という聖域の暗部に初めて切り込んだ小説として1984年の出版当時、タイで大変話題になったそうです。

さて、次号では、仏教がタイの教育に果たした役割について取り上げます。

2014 年 07 月 14 日

## 【チャオプラヤー川に吹く風（14）】タイ社会と仏教 その3～仏教が教育に果たした役割



バンコク、ボヴォーンニウェート寺内にあるマハーマクット仏教大学の校舎（1993 年、筆者撮影）

前号では、タイの上座部仏教における“サンガとタイ人”の關係に着目し、（1）タイ人仏教徒の男性は成人するための通過儀礼として出家する慣習があること、（2）在家の信者が寺院や僧侶に寄進する行為を“タンブン”（「功德を積む」の意）と呼ぶこと。タイ人はタンブンによって、より恵まれた来世や、現世の状況の好転を願う…ということを述べました。

サンガとタイ人の關係を考える時に、もうひとつ忘れてはならないのが、仏教がタイの教育に果たしてきた役割です。

### ● “デック・ワット” の存在

タイで初等教育令が公布されたのは 1921 年、実際に義務教育が施行されたのは 1922 年のことです。近代教育の普及以前では、僧侶は村落において民衆に読み書きや道徳を教える役割を担っていました。タイの寺院には「僧侶」「ネーン（少年僧）」の他に、「デック・ワット」（直訳すると“寺の子”）がいます。伝統的農村では、親は息子が 7～8 歳になるとデック・ワットとして寺院に預け、子供は僧侶の身の回りの世話や種々の用事を手伝いながら、文字や経典の指導を受けることができました。

しかしながら、僧侶は女性との身体的接触が禁じられているため、女子が寺院で同様の教育の機会を得ることはできません。女子教育については、近代以降の公教育の充実を待たねばなりませんでした。

石井米雄によると、バンコクの寺院に起居するデック・ワットの属性は、下は小学生から上は大学生、官吏、軍人など各人各様ながら、彼らが地方の出身者であり、就学、就職のため上京した者であるという点が共通しているとのこと。バンコクの学校へ入ろうとする地方の子どもが、同郷の僧侶を頼って上京し、デック・ワットとして寄宿するというパターンはかなり一般化しているようです。（石井米雄著『タ

寺院が、(バンコクに頼れる親類縁者がいない) 地方出身の子どもの受け皿となり、教育や就職の機会を提供しているという一面が見えてきます。

## ●タイの仏教大学

タイには公立の仏教大学が二校あります。「チュラロンコーン仏教大学」と「マハーマクトット仏教大学」——まさに僧侶のための最高学府ですが、石井米雄の上掲書は、この二校の在校生の 65%が貧困地域といわれる東北タイの出身者で占められていること。僧侶となることは、無料で高等教育を受けるための最も手近な方法であることを指摘しています。(上掲書 p.70)

二校は僧侶のための高等教育機関として、19 世紀末にバンコクで(チュラロンコーン仏教大学はマハータート寺内、マハーマクトット仏教大学はボヴォーンニウェート寺内に) 創設されました。初期のカリキュラムは仏教関連に限定されていましたが、時代の要請に応じて学部を拡充し、第二次世界大戦後まもなく、大学に昇格しました。

チュラロンコーン仏教大学には、現在、仏教学部、教育学部、人文学部、社会学部があり、マハーマクトット仏教大学には、人文学部、宗教学部、教育学部、社会学部があります。両大学共に、現在は僧侶以外の一般学生(男性)にも門戸を開き、海外からの留学生も受け入れています。そして、共に大学院(修士課程・博士課程)を併設しています。

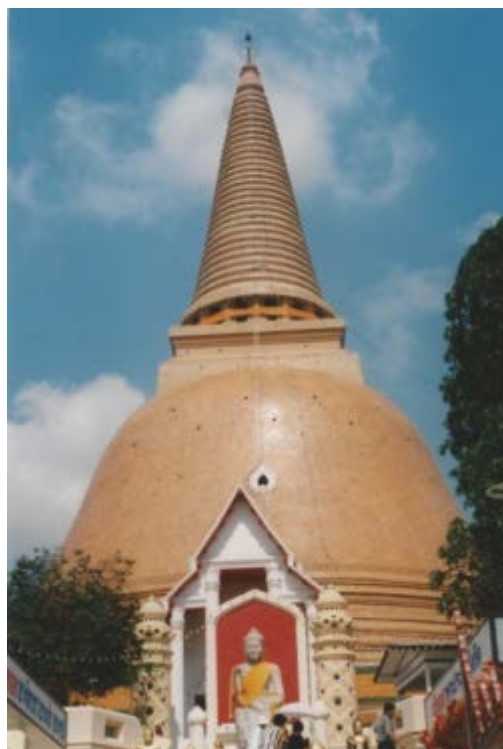
仮に出身家庭が経済的に困窮しており、義務教育より先の教育を受けることができない環境にあっても、男子がネーン・僧侶として出家し、寺院の中で学問を続ければ、最終的には仏教大学への進学之道が開かれます。前号で触れたように、上座部仏教では還俗は自由ですので、大学卒業資格を得てからサンガを去れば、教師、公務員、会社員など、社会人として生きる選択肢がおおいに広がるでしょう。

男子であればという条件付きにはなりますが、家庭環境のために進学を諦めねばならない子供たちに、タイのサンガは「上昇階段」を用意してきたことになります。「サンガ内で学問に精進し、仏教大学に進む」という行為が、“出家者としての修養”の一念に発するのか、将来の還俗を見据えての現実的な思惑に発するのか…という点は問わずに、そうした機会を与えてきたサンガには懐の深さを感じます。

さて、次号では、仏教とタイの王室の関係について取り上げます。

2014 年 08 月 11 日

## 【チャオプラヤー川に吹く風（15）】タイ社会と仏教 その4～サンガと王室の関係



ナコンパトム県にある釣鐘型の「プラ・パトム・チェーディー」。高さ約 120 メートルで世界最大の仏塔。創建は 4 世紀頃と言われており、1853 年にラーマ 4 世（1804-68）が再建工事を開始し、1870 年に現在の姿になった。（撮影：佐藤惣一）

「タイ社会と仏教 その 1」（2014 年 5 月 19 日号）で、仏教はタイの国教ではなく、国民には信教の自由が保障されているということを書きました。しかし、タイ国でただ一人「仏教徒でなければならない」と憲法に規定されている人物がいます。それは国王です。

在家者として最高の地位にある国王が仏教に帰依し、積極的にサンガを支えることは、民衆の手本となると期待されています。前々号（その 2）で、僧侶は民衆からタンブンを受けても、御礼にワイ（合掌による挨拶）を返すことはないと言いましたが、これはタンブンをするのが国王であっても同様です。国王が仏教行事に参列する際、国王は僧侶に対してワイをしますが、僧侶が国王にワイを返すことはしません。

### ●上座部仏教の伝播と王室

さて、ここで、王室とサンガの関係について、歴史的な流れを大まかにみてみましょう。

そもそも、上座部仏教をインドからセイロン（スリランカ）に伝えたのは、インドのアショーカ王の子、マヒンダ長老でした。当時のセイロンを統治していたデーヴァーナンプiyaティッサ王(前 250－210 年)は、マヒンダ長老のために寺院を建立したといわれており、以後、王権の手厚い庇護の下、セイロンは上座部仏教の中心地となっていきました。

その後、セイロンから上座部仏教が東南アジア（ビルマ、タイ、ラオス、カンボジア）に伝播した際も、まず、その国の王室が仏教の支持者となりました。そして上座部仏教は、王権によってその存在基盤を保障された上で、民衆の間に滲み渡っていきました。

上座部仏教の伝播の過程で、いずれの国においても、王室が大きな役割を果たしてきたことがわかります。

## ●仏教改革運動とタイ王室

時代が下って、19 世紀のタイでは、ラーマ 3 世の治世下（在位：1824-51）、仏教改革運動が起こります。そのきっかけは、1830 年前後に西欧諸国（ドイツ、イギリス、アメリカ）からプロテスタントの宣教師が相次いで渡来したことです。タイの宮廷は、進んだ西欧の科学技術を彼らから摂取したいという思いもあり、宣教師たちを友好的に迎え、キリスト教の伝道を制限しませんでした。

当時、モンクット親王（のちのラーマ 4 世）は、ボヴォーンニウェート寺で出家生活を送っていました。親王は、宣教師たちと接する中で、彼らの真意が「“野蛮な” タイ社会を、キリスト教によって啓蒙し、文明を開化させる」という（タイ人を見下した）考え方にあることを見抜きます。そして、キリスト教の圧力に対抗し、国の尊厳を堅持するためには、タイ民衆の精神的支柱である仏教を立て直し、仏教の合理性と存在意義を彼らに知らしめねばならないと思い定めます。そこで着手したのが“タンマユット運動”と呼ばれる仏教改革運動でした。

“タンマユット運動”の目指すところは、一言で言えば「原点回帰」。長い歴史の中で変遷を遂げてきたタイのサンガから不要な部分をそぎ落とし、元来の姿に戻すことでした。そして、そのために重視したのは、「戒律遵守」の徹底と経典の吟味、取捨選択でした。

キリスト教の宗教的挑戦を受けることで、仏教改革の必要性を痛感し、イニシアチブをとったのが、当時僧籍にあったモンクット親王だった——という事実の中に、筆者はサンガと王室の関係の一端を見る思いがします。

歴史上、タイの王室はサンガの庇護者であり続けてきましたが、仏教界に危機迫ると感じた時、内部から変革しようと能動的に働きかけを行ったのもまた、王室ゆかりの僧だったわけです。旧来の伝統を保守することにとらわれず、必要とあれば古いものを変えていくことも躊躇しない姿勢…モンクット親

王個人のリーダーシップに帰するところ大でしょうが、王族出身の僧でなければ、既存の仏教に一石を投じ、改革運動を創始することはもっと難しかったかもしれません。

このタンマユット運動は一過性のものとして終わらず、その後、タイの仏教教団内に、新しく“タンマユット派”という一派が形成されました。そして、在来派は“マハーニカイ派”と呼ばれるようになりました。属する僧侶・寺社の数ではマハーニカイ派が圧倒的多数（95%以上）を占めていますが、タイ仏教界の頂点に立つ“プラサンカラート（サンガの王）”の職位は、代々、主にタンマユット派出身者が務めています。また、タンマユット派は王室とのつながりも強く、現ラーマ9世を含め、歴代の王はタンマユット派の寺院で出家しています。

2014 年 09 月 08 日

## 【チャオプラヤー川に吹く風（16）】タイ社会と仏教 その5～番外編 「仏暦」と「お墓」



バンコク・トンブリ地区の寺院、ワット・クハサワンの塀と門扉。塀の上部に等間隔に並んでいる突起物は納骨場所である。（筆者撮影）

「タイ社会と仏教」シリーズは当初4回の予定で始めましたが、1回延長し、今号までとさせていただきます。その5（番外編）では、タイの上座部仏教に関連して、日本ではあまり知られていないことがらを2点紹介します。

### ●タイの仏暦

タイ国では西暦も併用されていますが、公的機関やメディアで主軸となっているのは「仏暦」です。仏暦はブッダが入滅した年を起点とする暦法で、タイ国に限らず、東南アジアの上座部仏教諸国で用いられています。西暦を仏暦に変換する際は、「西暦+543年」と計算します。（5-4-3 ですから覚え易いですね。）西暦2014年の今年は、タイの仏暦では“2557年”となります。

既に仏暦2500年代に入って久しいため、タイ人は口頭ではよく、千の桁と百の桁を端折り、年号を下二桁の数字だけで表現します。例えば、筆者がチュラロンコン大学大学院に留学したのは“2535年”でしたので、タイ人に聞かれて答える時は、“3-5の年”（ピー・サーム・ハー）と言います。

なお、タイ、カンボジア、ラオスではブッダの没年を“0年”として仏暦を起算するのに対し、ミャンマーやスリランカでは没年を“1年”とするので、1年のズレが生じます。従って、ミャンマーやスリランカでの仏暦は「西暦+544年」と計算します。

### ●お墓を作らないタイの仏教徒

タイの上座部仏教徒は、身内が亡くなると葬儀を行い、荼毘に付しますが、総じてお墓は作りません。この世での人生が終わった後は「無に返る」と考え、故人の魂が離れてしまった遺骨を墓所に納めて祀ることはしないのです。

以前本稿の「タイ社会と仏教 その2」(2014年6月16日号)で、よりよい来世を願ってタンブンする(功德を積む)タイ人の考え方について述べましたが、来世を信じるということは、すなわち、終幕した人生には執着しないということでもあります。お墓をもたない文化の土壌には、こうした価値観も影響していると思われます。

火葬後は川や海に、山間部であれば山に散骨することが多いのですが、お寺へ納骨する場合もあります。(タイのお寺には納骨スペースがあり、通路や納骨堂の壁などに窪みを穿ち、遺骨を安置できるようになっています。窪みに遺骨を納めた後、ふたをして、氏名と生前の写真を貼ります。※写真参照)

遺骨の一部を小さな入れ物に入れ、自宅で保管する遺族もいます。この入れ物のことを、タイ語では“コート”(正式には“コート・バンジュ・アッティ”)と呼びます。コートは普通、鉄や銅や陶器製ですが、裕福な層やロイヤルファミリーは純金で作ることもあります。

タイ国民の中でもキリスト教徒やイスラム教徒、そして(上座部仏教徒でない)華人系住民はお墓を作ります。

バンコクの南東約80キロに位置するチョンブリー県には華人の大型墓地があります。中国人が先祖を供養する清明節(毎年4月5日前後)には華人系住民が大挙してチョンブリーに墓参し、墓地に至る道路が抜き差しならないほどの大渋滞になります。墓地が山裾にあり、先に着いた車が引き返そうにも、次々に到着する車で帰れない事態となるため、政府が「お墓参りは清明節を外すよう」行政指導をするほどです。

ところで、お墓があれば、そこにお参りすることで故人の供養ができますが、お墓をもたないタイ人仏教徒は、一体どのようにして亡くなった人を偲ぶのでしょうか?——包括的、学術的な調査はできておりませんが、筆者のタイ人の知己に聞き取りをしたところ、「家に飾った遺影の前で手を合わせたり、お寺のお堂で仏像の前に座し、その人を想いながら読経するなどして冥福を祈るのが一般的」とのことでした。

2014 年 10 月 06 日

## 【チャオプラヤー川に吹く風（17）】タイの食文化 その1～現代タイ人の食生活・食意識



トムヤムクンスープの鍋（筆者撮影）

タイ国には「水中に魚あり、田に稲あり」という言葉があり、この地が古来豊かな食材に恵まれてきたことを表すのに、しばしば引き合いに出されます。その言葉の通り、タイ各地では米や種類豊富な野菜・果物が栽培され、内陸では淡水魚が、海沿いでは海産物が様々に調理されて食膳にのぼります。

近年、日本でもタイ料理が大変ポピュラーになりましたので、「タイに行ったことはないが、タイ料理は食べたことがある」という方もいらっしゃるでしょう。



魚料理と炒め物（筆者撮影）

「タイ料理」といえば、辛味の効いた「トムヤムクン」スープや、春雨のサラダ「ヤムウンセン」などがよく知られています。料理に添えられる香草「パックチー」（コリアンダー）の強い香りが苦手という日本人は多く、パックチーがタイ料理になじめるかの一つの関門と言われたりもします。

有名な料理をいくつか思い浮かべて、何となく「タイ料理はこんなもの」というイメージを描くことは容易ですが、「天ぷら」や「刺身」だけで日本の食卓が語れないのと同様に、タイの食文化も大変奥が深いものです。個々の料理の解説は旅行ガイドブック等に譲るとして、本稿では、そもそも「タイ料理はどのような歴史を経て、現在の形になったのか?」「各地方の特色はどのようなものなのか?」といったテーマを取り上げたいと思います。

今号では、序章として、現代タイ人の食生活・食意識の一端をご紹介します。

## ●盛んな外食産業

筆者はタイ国留学時代、チュラロンコン大学の大学院生用の寮で4年間を過ごしましたが、寮に自炊用のキッチンはなく、火気器具を使つての調理も禁止されていました。館内には寮食堂もないため、寮生は毎日連れだって、近隣の食堂や市場に繰り出し、皆で複数のおかずやスープを囲んだものです。

当初、寮に食堂もキッチンもないことが不思議でしたが、タイの外食産業の充実ぶりを知るにつれて、その状況が納得できるようになりました。日によって、気分によって行く食堂を毎日変えることができるくらい、選択肢が豊富なのです。もちろん、家庭料理や家庭での落ち着いた食事を恋しく思うことはありましたが、食べるものに関して、「外食だから、いつも同じものばかり」「外食ばかりで栄養が偏る」…という事態には陥りませんでした。

キッチンがないのは、筆者がいた院生寮に限ったことではなく、キャンパスの別の場所にあった学部生用の寮も同じでした。タイの都市部のアパートやマンション一般についても、台所がない設計の物件は珍しくありません。また、たとえ自宅にキッチンがあっても、共働きが多いタイの家庭では、家族で外食する頻度が高く、主婦が仕事帰りに屋台やスーパーで惣菜を買うこともよくあります。

高級レストランから、ショッピングモール内のカジュアルなレストラン、街の庶民的な食堂、はたまた各種屋台まで、タイの外食産業は大変盛んで、個々人が、自分の懐具合や嗜好に沿って食事を楽しみます。

## ●「やっぱりタイ料理が一番」

バンコクをはじめとする都市圏では食の国際化が進み、レストランでイタリア、フランス、日本、韓国、ベトナムなど多国籍の料理が堪能できます。しかしながら、タイ人と接していると、どんなに食の国際化が進んでも「やっぱりタイ料理が一番」と思っているふしがあるように感じます。

筆者が学生時代に参加した日本政府主催の「東南アジア青年の船」では、ASEAN 諸国と日本の若者たちが2か月間共同生活を送りました。船上の三度の食事では、宗教上の禁忌がある人たちにも配慮し、ビュッフェ形式で多種多様な料理が供されていました。通常の食事だけでも、十分満腹するはずでした

が、タイ人の女性たちは「タイ料理は別腹」とばかりに、楽しげにヌードルを茹でたり、簡単なサラダを和えたりして、他の国の仲間も誘って、船室で夜食の会を時々開いていました。食材や調理器具がままならない船内生活でも、何とか母国の味を…というその熱心さに驚かされたことを、今でも思い出します。

日本でも、外国旅行中に和食が恋しくなって日本料理店に入ったとか、海外には必ず梅干しを携帯して行くといった話を聞きますが、タイ人が自国の料理に向ける思いは、日本人以上のものがあるかもしれません。

2014 年 11 月 04 日

## 【チャオプラヤー川に吹く風（18）】タイの食文化 その2～タイ料理の形成と変遷（19世紀初期まで）



ベトナムから渡来した料理「カノム・ブアン・ユアン」（ベトナムでの料理名は「バインセオ」）ターメリック（ウコン）で着色した米粉の生地をパリパリに焼き、豚肉、海老、もやし、玉ねぎなどの具を包んだもの。甘酢のソースをつけて食す。手前は、付け合わせのきゅうりと玉ねぎの輪切り。（筆者撮影）

タイ料理といえば、まず「辛い」というイメージが想起されますが、この地で食されてきた料理は、有史以来現在のような味だったのでしょうか？答えは否。辛さを演出する唐辛子は、16世紀、外国との交易が盛んだったアユタヤに伝来したものです。唐辛子が定着する前のタイ料理の辛味は胡椒が担っていました。時系列で申せば、現在のタイの地には最初に胡椒（インド原産）が入り、その後、大航海時代になってから、南米原産の唐辛子がスペインを経由してもたらされたというわけです。

山田均は、その著書『世界の食文化(5)ータイ』（農文協刊）で、「タイ料理に関して通史的、包括的に書かれた文献はなく、タイ料理がどのように形作られ、どうして今がこうにあるのか…その由来を探るのは大変困難」と述べています。そして、残された断片的な情報や記録から、タイ料理が今日の形になるまでの道筋を辿っています。本稿では、同著を主たる出典として、タイ料理の形成と変遷の流れを追ってみます。

### ●タイ料理の源流

伝統的なタイ料理は、お米と魚が中心のシンプルなものでした。魚（川魚）は、タイ人の祖先たちにとって最も基本的な食材で、川や湖沼から獲った魚を煮たり、干物にしたり、すり身にしたり、地方によっては漬けて発酵させたりしていたと思われます。

### ●アユタヤ王朝時代（1351-1767 年）

アユタヤ王朝時代には、アユタヤを中心とする畿内は国王の直轄地でしたが、それぞれの地方には「ムアン」と呼ばれる大きな町が存在していました。各ムアンの間では交易が行われ、食生活の面でも、様々に影響を与え合いました。その結果、現在のタイ料理につながる地方料理（中部料理、北部料理、東北料理、南部料理など）の伝統が形成されていきました。

国際都市アユタヤには、中国人（アユタヤ人口の1割を占めたと言われます）、モーン人、ベトナム人、カンボジア人、オランダ人、ポルトガル人、マカッサル人、日本人などが居留していました。アユタヤ時代にはムアン間のみならず、これら諸外国との間でも食文化の交流が繰り広げられ、新しい食材や調理法が取り入れられるきっかけになりました。冒頭で触れた「唐辛子」もその一つです。

## ●ラタナコーシン王朝初期

アユタヤ滅亡後は、タークシン王一代（15年）のトンブリー王朝を経て、ラタナコーシン王朝に入ります。ラーマ1世王の時代（在位：1782-1809）には、首都バンコクの建設のためにラオスやカンボジアから労働者が徴用されました。このほかにも、ビルマからはモーン人が数千人単位で移住。政治的理由で、母国から避難してきたカンボジア人、ベトナム人も少なくありませんでした。また、商業や都市建設に従事する中国人も相当数住んでいました。

このように、様々な外国文化がひしめくバンコクでは、食文化の面でもタイに受容された料理が多くあったようです。例えば、現代タイ人に広く親しまれている麺料理「カノムチーン」はモーン人から伝わったものです。また、「生春巻き」などのベトナム料理も、ラタナコーシン王朝の前期にタイ人の食生活に入ってきたものと言われています。

ラーマ2世王（在位：1809-1824）が作った“御座船漕ぎ歌”の歌詞には、当時同王が食していた料理の名前がたくさん登場します。

鶏肉カレー、マッサマンカレー（南方伝来のカレー）、ヤムヤイ（具たくさんの和え物）、ムーネーム（豚肉の発酵ソーセージ）、ケーンクワ（ココナツミルク入りのカレーの一種）等々、現代タイ人にもおなじみの食材・料理のオンパレードです。王宮料理だからといって、特別に凝ったものというわけではなく、当時のバンコクに住む一般人が特別な機会に食べていたご馳走と大差なかったようです。

## ●食材について

グリーンカレーをはじめ、今日の多くのタイ料理に欠かせないココナツミルクがいつ頃タイに定着したかは定かではありません。南方から、マッサマンカレーなどの料理が入ってきた際に、タイの食文化に取り入れられたのではと推測されます。

蛋白源として、牛肉や水牛の肉がバンコクで一般的に少しずつ食されるようになったのは、おそらく

19 世紀後半。したがって、鶏肉以外でラーマ 2 世の食卓に上った肉は、おそらく鹿肉や野豚の肉であったろうと思われます。庶民の暮らしの中では、依然として米と魚を中心とした伝統的な食事を中心でした。

さて、次号では、タイ国の近代化に伴う食生活の変化に注目します。

2014 年 12 月 01 日

## 【チャオプラヤー川に吹く風（19）】タイの食文化 その3～近代化に伴う食生活の変化



市場の風景（ナコンパトム県にて筆者撮影）

前号では、タイ料理の変遷について、19 世紀初期までの流れを追いました。今号では、タイ人の食生活がその後の近代化の過程で、どのように変化していったかを見ていきましょう。（※参考文献：山田均『世界の食文化(5)ータイ』農文協刊）

### ●西洋文化との接触

1855 年のボウリング条約によって、タイではそれまでの王室による独占貿易から自由貿易へと舵を切ります。それ以前も、タイ（当時シャム）は鎖国状態ではなく、アユタヤ時代から西洋人が居留していましたが、ボウリング条約を境に、多くの西洋人が商業活動のために来訪、居住するようになりました。

彼らが集住したバンコクのバーンラック周辺には、西洋人のための短期滞在型ホテルも出現しました。ホテル内にはレストランがあり、常時西洋料理が提供されていました。19 世紀には、一般のタイ人がこうしたホテルのレストランを利用することはなかったため、西洋料理が大衆の食生活に影響を及ぼすことはありませんでした。しかし、王族や官僚、貴族層がホテルのレストランを利用し、西洋料理の伝統に触れたことで、宮廷における食事の作法に変化が生まれました。

ラーマ 4 世王（在位 1851-1868）、5 世王（在位 1868-1910）の時代は、西洋列強による植民地化を避け、国家としての主権を護るため、「近代国家」を建設することが大きな命題でした。そうした文脈の中で、シャムの王室も、自分たちの宮廷文化が西洋諸国のそれに引けをとらないものであると対外的に印象づける必要がありました。そのため、西洋風の食器を用いたり、ご飯を手で握って食す方法を改めてカトラリーを用い始めたり、盛り付けや料理に一工夫加えるなどして、“宮廷食文化の洗練”が目指されたのです。

## ●中華レストラン開店の波と中華料理の「現地化」

ボウリング条約締結以降、タイにおける外国貿易の規模拡大を受け、西洋人のみならず、華僑が流入し、輸出業や製造業に従事するようになりました。このころ、政府は近代国家建設の財源を得るため、国家が独占していた事業の「独占権」を民間に払い下げ、権利を得た民間業者は莫大な富を手中にしました。また、財力のある王族、官僚貴族、中国人資産家は、当時まだ手つかずの土地を国から安く購入し、道路（現在のシーロム通り、スラウォン通り、サートーン通り、ラーマ4世通り等）を建設して、土地の資産価値を高め、巨富を得ました。

彼ら大富豪や中小の富豪が活動拠点としていたヤオワラート（中華街）には、宴席の場とするための高級中華レストランが出現しました。そうした高級レストランに準じた（在来の食堂よりも豪華な）中華レストランも続々と開店。こうした「レストラン文化」は、華人が多い地方の都市部にも広がっていききました。

ヤオワラートの高級中華レストランの料理は、食材も料理人も本場香港からという本格的なものでしたが、中華レストランの裾野が広がるにつれ、地方でも入手し易い食材で、地元出身の華人料理人が調理するスタイルが定着します。・・・となると、次第にタイ料理との境目があいまいになり、そこで供されるものは「中華をベースとしたご馳走料理」「タイ風中華料理」に変わっていききました。現在のタイ料理に、中華料理の系統が多々含まれているのは、こうしたレストラン文化の広がりによって、タイ人が「ご馳走料理」として、その味に親しむようになったからです。なお、バンコクでは華人人口が増えたのを背景に、クィティアオ（米でできた麺）のような庶民的な中国料理も売られるようになりました。

## ●豚肉の消費拡大

1900年にナコンラーチャシーマー（東北地方の玄関口）まで鉄道が敷設されたのを機に、東北タイや、少し遅れて北タイからバンコクに豚が運ばれてくるようになりました。食材としての豚肉の需要が増えた背景には、バンコク内に相当数の華人人口が存在したことや、前項で述べたような、中華料理のタイ人食生活への浸透があります。

しかし、庶民の一般的な家庭料理は、20世紀半ばくらいまで、さほど劇的な変化に見舞われることはありませんでした。中部と南部の人は米を、北部と東北部の人はもち米を主食とし、おかずは、魚、鶏、アヒル、エビ、野菜などからなる、比較的シンプルなものでした。豚肉の家庭での消費はまだ少なく、牛肉の消費は豚肉よりさらに少ないものでした。

## ●カトラリーの使用

1932年の立憲革命により絶対王政が終焉を迎えた後、1939年にピブン政権が打ち出した、「ラッタニヨム」は、近代国家にふさわしい国民の行動を定めています。その中には“手づかみ（注1）での食事

をやめ、フォークとスプーン（注2）を用いるべし”という項目も含まれていました。

上述のように、19世紀半ばには、西洋料理の影響をいち早く受けた上流階層がカトラリーを使う食生活を始めましたが、「ラッタニョム」の普及により、その習慣が庶民にも広がったのが20世紀半ばでした。

さて、次号では、現代タイの食文化について取り上げます。

※注1）タイの伝統的な料理にはスープ系やカレー系はあまりなく、おかずはナムプリック（にんにく、唐辛子、シャロットなどを石臼ですりつぶし、調味したペースト状のもの）に焼き魚、生野菜といった組み合わせだったので、手で食べた方が便利でした。

※注2）タイ料理の具材は、食べやすい大きさに切られているため（あるいはやわらかく煮込まれているため）食卓でナイフを用いることはありません。肉などが大きすぎる場合は、スプーンを使い、皿の上で一口大にカットします。そして、ご飯やおかずは、左手に持ったフォークの背で右手のスプーンに載せ、口へと運びます。

2015 年 01 月 05 日

## 【チャオプラヤー川に吹く風（20）】タイの食文化 その4～現代タイの食文化



バンコクのある家庭の夕餉。食卓のおかず4品の内2品は市場の惣菜店のもので、2品は家で調理された。(筆者撮影)

前号では、タイの食文化が近代化の過程で、どのように変化していったかに注目しました。今号では20世紀後半以降に光を当てます。

### ●「タイ料理レストラン」と「外国料理レストラン」の展開

1960年代以降、タイ国の経済発展に伴って、多くの中・高級ホテルが建設されました。ホテルには複数のレストランをもつものも少なくなく、西洋料理、中華料理に加え、タイ料理レストランも続々と誕生しました。その背景には、「タイ料理を食べてみたい」という外国人居住者や旅行者のニーズと、タイ料理を（日常食を離れた）「ご馳走」として食べたいというタイ人富裕層のニーズがありました。そうしたレストランで出される料理は、食べ手の嗜好に配慮して辛味が抑えられるなど、調味法が本来のタイ料理とは異なるものでした。

外国人旅行客や居住者の増加にともない、インド料理、フランス料理を中心とした、各国料理のレストランが増えたのも1960年代でした。タイ人のための西洋料理店は、1970年代から少しずつでき始め、パンやケーキ、パイなどを供するようになりました。

### ●外国料理の普及

こうした外国料理レストランの中で、庶民的なものは、次第にタイ人が外食をする際の選択肢に加えられるようになりました。山田均は、その背景として、「サリット政権以来の開発路線の中で、バンコクにも地方にも大学や高等教育機関が新設されたことと、経済の好転によって、社会に余裕ができ、学生や若者という新たな消費者層が生まれたこと」を挙げ、その結果として、「新しい繁華街ができ、新しいかたちの食堂が求められた」と述べています。(『世界の食文化(5)－タイ』農文協 p.129)

日本料理については、戦前にも営業している店があり、1970年代以降は、日本人旅行者、出張者、赴任者の増加を反映して、市街地や高級ホテルの中で続々と開業されるようになりました。その後、日本料理はタイの一般市民にも受け容れられるようになり、現在は多くのショッピングモールのレストラン街に和食店が出店しています。

筆者の経験から申せば、和食を初めて食べたタイ人は「淡泊だ」「味が薄い」といった感想をもらすことが多いように思います。しかしながら、元来米食を基本とするタイ人の嗜好に合ったのか、日本料理は、数ある外国料理の中でも、とりわけ市民権を得ているように見受けられます。西洋料理やインド料理は、「たまに珍しいものを食べたい」という感覚で食されるのに対して、日本料理には、ごく日常の外食の機会にも選ばれるような、敷居の低さを感じます。

## ●現代の外食文化

交通網の整備（幹線道路の建設、バス路線の拡大）によって、首都バンコクが拡大すると、1980年代中ごろから、郊外に広大な敷地を擁する大型レストランが登場するようになりました。そこでの中心的メニューはタイ料理でした。

元々、タイ人にとっての外食時のご馳走は中華料理でした。（現在でも着席式の結婚披露宴では、「ト・チーン」と呼ばれる中華のコース料理がよく出ます。）それが、「タイ料理が外食時のご馳走ともなる」という風に大勢が変わってきたのが、この時代です。

なお、タイ人の外食の際のチョイスとして常に上位に来る「タイスキ」は、1960年代以降に登場したもの。上掲書によると、「タイスキは、日本のすき焼きにヒントを得たとも、しゃぶしゃぶをタイ風にアレンジしたものとも言われるが、はっきりしない」（p.136）とのことです。

## ●スーパーマーケットの登場

都市化が進み、バンコクが巨大化することによって、遠距離通勤者も増加しました。職住接近の時代は、仕事帰りに市場に寄り、総菜を買って帰宅することができました。しかし、家が勤め先から遠くなり、交通渋滞の影響を受けるとなれば、市場が開いている時間に帰宅することができません。こうした時代の流れを受けて、古くから存続していた市場が衰退し、閉鎖の憂き目を見るようになりました。

タイでスーパーマーケットが登場したのは1980年代前半です。市場よりも営業時間が長いスーパーは、価格面では市場よりも高くはなりますが、「清潔さ」「便利さ」を売りに、着実に需要を伸ばしてきました。郊外には、自家用車をもつ層が週末のまとめ買いに利用する大型スーパーも存在します。

## ●家庭料理

従来、一般タイ人の家庭の食卓に上ったのは、ご飯と魚、野菜（生野菜かボイル）、果物などの質素な食事でした。農村部の人々は、今でもそういうシンプルな食生活をしており、手の込んだ料理を作るのは、結婚式（式を自宅で行う場合に僧侶や来賓をもてなす食事）や仏教行事（親族の出家式や、“タンブン”の諸儀式で寄進する食事）などの機会に限られます。

結婚式のお祝い料理は、招待客の数にもよりますが、数十人分を用意します。近所の主婦や親類縁者が手伝い、いくつもの大鍋で煮炊きする光景は、それは賑やかなものです。普段の食事が質素なだけに、ご馳走料理を作り、食べることが、より晴れがましく感じられるのです。

一方、都市部（バンコク市内や地方の市街地）では、外食するか、おかずを買ってきて食べる人が多数派です。日常的に家庭で一から調理する人の割合は非常に低いと言ってよいでしょう。

さて、次号では、タイの地方料理の特色について述べたいと思います。

2015 年 02 月 02 日

## 【チャオプラヤー川に吹く風（21）】タイの食文化 その5～地方料理の特色



住宅街の中で停車、営業中の「チャオクワイ（仙草のゼリー）」の屋台（バンコク・トンブリ地区にて筆者撮影）

前号までの4回で、タイの食文化の推移を追いました。今号では地方毎の料理の特色を解説します。「中部」「北部」「東北部」「南部」という分けについては、本シリーズ（2）「タイの国土と地理区分」の地図をご参照ください。

まずここでお伝えしたいのは、今日「タイ料理」と呼ばれているものは、必ずしもタイ国全土で食されている料理の代表ではないということです。これまでの回でも見てきたように、元来タイの農村部では、家庭でご飯と魚、野菜などの質素な食事を作って食べるのが普通でした。現在の「タイ料理」が一般化したのは、タイ国の料理を食べたいという外国人や、レストランで食事をしたい都市のタイ人のニーズが高まり、バンコクを中心に外食産業が興隆するようになってからのことです。

「タイ料理」は、バンコクが属する中部タイの料理を基礎としていますが、バンコク建都以来の華人人口の割合を反映し、少なからず中華料理の要素を包含したものとなっています。

### ●中部の料理

稲作、畑作、果物の栽培が盛んな中部では、豊かな食材をベースに、ケーン（スープ）、ヤム（和え物サラダ）、ナムブリック（にんにく、唐辛子、シャロットなどを石臼ですりつぶし、調味したペースト状のもの）など、様々な種類の料理が作られています。味付けについてひとつ言えるのは、辛味が他地方に比べると控えめ…ということでしょう。例えば東北部の郷土料理で、現在は全土に広まっている「ソムタム」（青いパパイヤのサラダ）は、中部タイでは甘めに調味されます。

主食はうるち米です。「タイ料理には中華料理の要素がある」と上述しましたが、首都圏では炒め物料

理や麺類などが“タイ化した中華料理”の日常食として定着しています。

## ●北部の料理

北部には、かつて「ラーンナー・タイ王国」が存在しました。同王朝時代に源を発するとされる「カントーク・ディナー」（脚のついた丸い膳の上に料理が並ぶ）は、北部を代表する“おもてなし料理”となっています。その他に、郷土の麺料理として「カオソーイ」も有名です。これは卵麺の上にココナツミルク入りのカレースープをかけ、カリカリに揚げた麺をトッピングしているもので、隣国ミャンマーから伝わったと言われています。

北部の主食はもち米。生のスパイスを使う料理が少ないため、他の地域よりもマイルドな食事です。調味には塩が多用され、「トァ・ナオ」という発酵させた塩漬けの納豆がナムプリックの味付けに使われたりもします。なれずし（川でとれた小魚を塩漬けにし、もち米と共に漬け込んで乳酸発酵させたもの）も作られます。（酒井美代子著『おいしいタイランド』東京書籍、p.72-73）

## ●東北部（イサーン地方）の料理

イサーン料理の特徴の一つは、食材の幅の広さにあります。鶏肉、豚肉、牛肉、水牛肉を食べてきた歴史が他の地域に比べて長く、川で獲れる魚やエビも食卓に上ります。蛋白源として、コオロギ、赤蟻、イナゴ、セミなどの昆虫食の伝統もあります。

山田均は「バンコクの一般の人から見ると、（東北部の人たちは）そのようなげてもものを食べなければならぬほど貧しい人々であるという一種の蔑視にもつながってしまう。（中略）しかし、実際の東北タイ料理は、豊かなバラエティを誇るだけでなく、くっきりとした力強い味のつくりといい、辛さと甘さのバランスといい、日本人、とくに関東人の好みにぴったりくるものである」と述べています。（『世界の食文化(5)ータイ』農文協 p.166）

東北部の主食は北部同様もち米で、郷土料理の代表格といえば、カイヤーン（タレに漬け込んだ鶏肉を炭火で焼いたもの）やソムタム、ラープ（肉入りのサラダ）といったところでしょうか。この地方には、ベトナム戦争時に戦禍を避け、タイに流入してきたベトナム移民とその子孫も多く、特にイサーンの北部や中部ではベトナム料理が浸透しています。

タイ国の経済発展の過程で、東北部からは季節労働者が首都や全国各地の都市部に流れましたが、その結果、全国各地にイサーン料理の店や屋台が広がり、今も同郷の人々の食生活を支えています。

## ●南部の料理

南部料理はインド文化やマレー文化、中国文化（特に福建料理）の影響を強く受け、また、海に面し

た地域が多いため、海産物がふんだんに使われます。料理の色はターメリックや唐辛子の影響で黄色や赤いものが多くなっています。生の唐辛子を使う東北料理とは違い、南部では、乾燥させた唐辛子を使うのが一般的です。（前川健一著『タイの日常茶飯』弘文堂、p.26）

インドやマレーの影響は“スパイスの多用”に顕著に見られますが、そのスパイス群の中から味を浮き上がらせるため、味付けが非常に濃くなります。タイ料理の中で最も辛いのが南部タイ料理であり、最も塩辛いのも、酸っぱいのもおそらく南部タイ料理…と専門家は分析します。（『世界の食文化(5)－タイ』農文協 p.175）

主食はうるち米です。南部では料理の辛味を中和するため、付け合わせの野菜をたくさん食べるのが一般的です。南タイ特有の食材に「サトー」（ネジレフサマメ）という大きな豆があります。独特の香りがありますが、さやから出して、料理の付け合わせに生で食べたり、ケーンに入れたり、炒めたりと応用自在です。

## ●おわりに

全5回にわたってタイの食文化を扱い、タイの料理が形成されてきた足跡を追うとともに、今号では駆け足でしたが、各地域の個性に注目しました。タイ農村の伝統的な家庭料理は意外にシンプルだったということ、そして、私たちが「タイ料理」と認識しているものは、（都市化が進み、外国人が流入してくる中で成立した）“ごちそう料理”に由来するということ、地方毎に異なる食文化が存在することなどがわかりいただけたでしょうか。タイ国を訪れる機会がある方には、バンコクで一般的な「タイ料理」を堪能するのと同時に、ぜひ各地で特色ある郷土料理を味わっていただけたらと思います。

2015 年 03 月 02 日

## 【チャオプラヤー川に吹く風（22）】タイ人と家族 その1～伝統的家族関係と現代の状況



水路の風景（バンコク・トンブリ地区にて筆者撮影）

タイ国では、「血族」や「先祖代々」といった概念が日本に比べて薄いような感じを覚えます。父親は一家の柱として家族を慈しみ、守る存在ではありますが、家父長的な父権の強さはありません。また、「家名を途絶えさせないこと」にはあまり重きが置かれません。今号では、タイ人にとっての家族とは、どんな意味合いをもつのかを考えてみましょう。

### ●タイ人と姓

今から約百年前、1913年にラーマ6世の治世下で「姓氏法」が制定され、タイの国民はみな姓をもつようになりました。女性は結婚すると夫方の姓に変わります。しかし、実生活の中では、姓は個人の名前に比べると出番が少なく、一般的に使われるのは専ら名前の方です。最近タイ国の首相を務めた、「アピシット」「インラック」、そして現首相の「プラユット」各氏は名前であり、姓ではありません。今の日本に置き換えるなら「晋三首相」と呼んでいるようなものです。タイでは、同級生の姓を知らない、或いは勤務先で長年一緒に仕事をしている同僚の姓を知らない——というのもよくあることです。

### ●「家族」の意味

タイ語で、「家族」は「クロープクルア」と表現されます。“クルア（かまど）を囲む（クロープ）”という意味です。すなわち、「食事を共にする人間関係＝家族」という観念で成り立つ表現であり、この言葉には、家族の成員が「家」に属するものであるとか、「祖先を同じくする」一族であるといった含意はありません。

タイ社会では、ゆるい「家連合」のような親族は存在するものの、核家族的な要素が強いのが特徴で

す。日本の同族のように、一つの家を中心にして傍系親の家族が本末関係で結ばれるような組織もなく、氏族のような単系的血縁集団ありません。各世代にわたって、兄弟姉妹の家族はそれぞれ独立した存在で、相互に平等な関係にあります。（綾部恒雄/永積昭編『もっと知りたいタイ』 弘文堂、p.185-186）

## ●「屋敷地共住集団」とは？

タイの農村では、一般的に結婚後は男性が妻方に婿入りし、女性が両親の家に残ります。娘が複数いれば、末娘が両親と共に暮らし、農地を受け継ぐのが伝統です。

先に結婚したきょうだい、特に姉妹は、親世帯と同屋敷内、または近隣に世帯を構える傾向があります。親世帯と子世帯の成員は、食事をはじめとする日常生活の多くを共にし、育児や老親のケアなども協力し合っています。こうした形態をもつ大家族のことを「屋敷地共住集団」と呼びます。

大家族の要となってきたのは、母と娘、姉と妹…といった女性親族間の相互扶助の関係です。伝統的社会では、助け合いの内容は家内的なものに限られていましたが、農村から都市に出て就労する女性が増えるようになると、女性親族（母親や姉妹）が孫や甥・姪の養育を引き受けるようになりました。保育サービスなど、労働者のための社会保障制度が十分でないタイにおいて、女性親族のネットワークが、都市での就労を望む人々へのセーフティネットの役割を果たしているのです。

なお、少子高齢化が進み、きょうだいの数が少なくなっている今日では、妻方、夫方にかかわらず、協力できる女性親族が留守中のサポートを引き受けます。また、老親のみが農村に残り、きょうだいがみな離れ離れに暮らすケースも増えてきており、タイ人が従来の大家族のかたちを「古き良きタイの家族の原風景」ととらえることもあるようです。

（木曾恵子「タイの家族—変わりゆくかたち、つながる人々」綾部真雄編著『タイを知るための 72 章』明石書店）

筆者の近いタイ人の友人は、タイ中部県の地方公務員の家庭出身です。彼女は首都の名門大学を受験するため、中学卒業後はバンコク在住の母方の叔母夫婦の家に身を寄せて進学校に通い、国立タマサート大学に入学しました。バンコクで就職し、30代で自分の家を購入すると、今度は郷里にいる別の叔母の娘（彼女にとっては年の若い従妹）を寄宿させて面倒を見、その女の子も今や社会人となりました。こうした例に接すると、「女性親族間の相互扶助の関係」が、（就労に際してのみならず）子女に高い教育を受けさせるための機会充実にもつながっている一面が窺えます。

次号では、タイ人の子育てや親子関係を取り上げます。

2015 年 03 月 30 日

## 【チャオプラヤー川に吹く風（23）】タイ人と家族 その2～タイ人の子育てと親子関係



バンコク、フアマーク駅のプラットフォーム。空港とバンコク中心部を結ぶエアポートレイルリンクが入線（筆者撮影）

前号で書いたように、儒教の影響を受けていないタイ社会では、家庭において父親の権威が特別に強いということはありません。末娘が跡を継ぐしきたりや、母と娘、姉と妹といった女性親族間の相互扶助の関係にみられるように、伝統的にはむしろ女性の存在感が強いといってもよいでしょう。

### ●「男らしさ」「女らしさ」

日本からタイ国に赴任した駐在員が現地社員を評して、「個人レベルでみれば有能な男性スタッフは多いが、全体的な印象として、男性より女性の方が“しっかりしている”と感じる」と言う声をよく聞きます。主観的な判断や断定は避けるべきですが、一般的に女性が「頼もしく」感じられるのは、女性が家庭の要である、タイ社会の成り立ちによるところが大きいのかもしれません。

日本では「男らしく」「女らしく」という教育は前時代的——とする見方が定着していますが、怪我をして痛がっている男児に「泣かない、泣かない。男の子でしょ」と声をかける光景はしばしば見られます。しかし、タイでは昔から、ことさらに「男だから、強くあれ」「女だから、優しくあれ」と教え導くことはありませんでした。

### ●しつけの方針

「子どもに何と言ってしつけるか」・・・家庭での徳育の方針の傾向を知ることは、その社会のあり様をとらえるヒントになるのかもしれません。

筆者の最近の訪タイの折、子どもを育てているタイ人の知人複数に、彼ら自身が言われて育ったこと

や、自分たちが子どもに対してよく口にしていることを尋ねてみたところ、こんな言葉が集まりました。

「大人の言うことをよく聞きなさい」

「年長の親族を敬いなさい」

「いい子でいなさい」

「一生懸命勉強しなさい」

家族という小社会の中で、年長者の教えをよく守って人格形成を図っていくという様相がみてとれます。

翻って、日本ではいかがでしょう。調査に基づくわけではありませんが、「他人に迷惑をかけてはならない」と教えられた記憶をもつ人は少なくないのではと思います。ヒアリングしたタイ人に聞いたところ、「よい人間になれ」と年長者から諭され、結果的に「他人に迷惑をかけない」人に育つことはあるかもしれないが、最初からそう子どもに言い含めることはないとのことでした。彼我の文化土壌の違いを考える上で、興味深いポイントです。

## ●親子の関係

筆者はタイ人との交友を通じて、様々な親子に接してきましたが、共通しているのは親子の関係の近さです。「反抗期はなかった」と言う友人が多いのにも驚きました。

タイ国では、プーミポン現国王の誕生日（12月5日）が「父の日」、シリキット王妃の誕生日（8月12日）が「母の日」となっています。父の日、母の日には、故郷を離れている子どもは出来る限り帰省し、それが叶わなければプレゼントを送ったり、電話で親に感謝の気持ちを伝えたりします。

それ自体は、わが国の父の日、母の日でもよくみられるシーンかもしれませんが、日本であれば、親に感謝し、愛情を表現することに恥ずかしさを感じがちな世代（たとえば思春期～青年期の若者）も、全く照れずに両親に接します。

「親の手を引いて歩く」といえば、60代になった子どもが老親を支えているような姿を想像します。しかし、タイでは、若い息子がまだ健脚の母親と手をつないで歩いたり、道路を渡ったりという姿も珍しくありません。最近、筆者はタイの友人家族とレストランで食事をした際、友人の義兄（50代）が横に座った自分の息子（大学生）を可愛くてしょうがないといった風にハグする場面に遭遇しました。（その父子は久しぶりの再会というわけではなく、毎日同じ屋根の下で暮らしています。）筆者が同席していても、特段気にする様子はありませんでした。

幼少時から、会話によるコミュニケーションやスキンシップが密である上に、「子どもが親や年長者を敬う姿勢」と「親が子供を慈しむ心」双方がかみ合って、多くの家庭で、良好な親子関係が維持されて

いるように見受けられます。

## ●ある日タイの比較研究から

奥村晋・小島賢一・遠藤隆行による「日本とタイ王国における家族に関する調査結果の比較」（『矯正図書館・中央研究所紀要2』1992年）では、「日本の非行少年」「日本の一般少年」「タイの非行少年」を比較し、両国の親子関係を分析しています。

この比較調査によると、日本の非行少年の親子関係は「全般的に不良で、両親も少年にあまり関心を持たず、相互の理解が乏しい。少年は自立性に乏しく、親への依存度が強い一方で、親からの指導に対しては非受容的で、干渉には反発することが多い。」に対するタイの非行少年の親子関係は「全般的に良好で、両親が少年に強い関心を持ち、相互に理解し合っている。少年の自立性は強く、両親に依存しようとはしないが、親子の上下関係は厳格で、親の指導には従順であり、干渉にも反発しない」という結果が出ています。そして、「タイでは、日本のように家族関係の問題から非行に至る者が少なく、経済的要因、社会的要因といった他の諸要因が非行化に重要な役割を果たしているものと推測される」という考察を導いています。

タイ人の親子関係では、コミュニケーションが濃密であっても、子どもの自立心が強い——という結果をみて、しばし考えました。近年タイ人の平均寿命は伸びてきていますが（2012年のWHOデータで75歳）、それでも社会全体でみると、日本よりも若い年代で親と死別することになります。いつまでも親に甘えているわけにはいかず、早い段階で面倒をみる立場が逆転するという側面もあるでしょう。しかし、それ以上に、親を敬い、親の教えを素直に受け止めるという成長過程での関係性が、「子として早く自立し、親を支えられるようになろう」という意識（平たく言えば、「親孝行したい」という意識）に変わるのではないかという気が致します。

次号では、年々高齢化が進む、タイ社会の現状を取り上げます。

2015 年 04 月 27 日

## 【チャオプラヤー川に吹く風（24）】高齢化が進むタイ社会 その1～高齢化をめぐる諸相



国立競技場の外周をジョギングする市民（バンコクにて筆者撮影）

現在、タイ国では急激に高齢化が進行しています。1980 年には 64 歳であった平均寿命が、1990 年代に入る頃に 70 歳を超え、2012 年には約 75 歳（男性 71 歳、女性 79 歳）となりました。

今号から 3 回にわたり、この国の「高齢化」にまつわる様々なテーマを取り上げます。

### ●高齢化と少子化

高齢者（※WHO では 65 歳以上の人を高齢者と定義）の人口が全人口の 7 %を超えた国は「高齢化社会」（aging society）、14%を超えた国は「高齢社会」（aged society）と分類されます。高齢者人口が 20%を超えている日本のような国は「超高齢社会」と呼ばれます。

「高齢化社会」から「高齢社会」に移行する期間、すなわち高齢化率が 7 %から 14%に倍化する年数は、国により異なります。フランスは 115 年、スウェーデンは 85 年の年月を要し、英国は 47 年、ドイツは 40 年で倍化しましたが、それに比して、日本の倍化年数は 24 年——と短いものでした。

タイでは 2001 年に 7 %を超え、2023 年に 14%を超えると予想されています。移行期間は日本の“24 年”よりもさらに短い“22 年”です。（大泉啓一郎著『老いていくアジア—繁栄の構図が変わるとき』中公新書 p.36-37）

高齢化と並行して、少子化も進んでいます。タイで一人の女性が生涯に産む子どもの数（合計特殊出生率）は、1950 年代後半には 6.4 であったのが、70 年代後半には 4.0 へ、90 年代半ばには 2.0 に低下。現在は二人に満たず、バンコクでは 0.8 という数字です。（末廣昭『タイ 中進国の模索』岩波新書 p.120-121）

タイで少子化が進んだ背景として、末廣は上掲書で

- (1) タイ政府による徹底した人口抑制策、特に産児制限政策
  - (2) 女性の社会進出に伴う、晩婚や非婚の増加
  - (3) 教育コストの上昇と両親の教育投資に対する関心の高まり
- の3点を挙げています。

## ●「人口ボーナス」と「中進国の罠」

社会が「多産少死」から「少産少死」に移行する過程で、「生産年齢人口（15～64歳）が従属人口（若年層や老年層）に比して多い」という時期が生じます。この時期のことを「人口ボーナス」と呼びます。労働投入量の増加と国内貯蓄率の上昇が相まって成長が促進されることから、“発展途上国の出生率の低下が、経済成長を高める要因になる”という見方がなされます。

日本では1950～55年から1990～95年までが人口ボーナス期でしたが、その間に先進国としての経済力、技術力を高めることができました。

タイでは人口ボーナスは1960～65年に始まって、2010～2015年に終わりを迎えるとみられています。人口ボーナス期のタイでは、労働集約的産業において、安価で勤勉な労働力を比較優位とし、製品輸出を伸ばすことができました。（大泉啓一郎「東アジアの少子高齢化と持続的経済発展の課題—中国とタイを対象に」『アジア研究』Vol.52, No.2, 2006年 p.71）

現在のタイの一人当たりGDPは約6千ドル。既に中進国の仲間入りはしていますが、少子高齢化が更に進み、人口ボーナス期が終われば、生産年齢人口の減少と、貯蓄率の低下によって、経済成長にブレーキがかかる恐れがあります。

「中進国の罠」という言葉があります。新興国が低賃金の労働力などを背景に経済成長し、中進国の仲間入りを果たしたものの、人件費の上昇や後発新興国の追い上げ、先進国の技術力との格差を前に停滞し、なかなか先進国になれない状況を指します。今まさに「中進国の罠」にはまっているタイが、どのようにその状況を打開していくのが注目されます。

次号では、タイ国の社会保障制度と医療事情を概観します。

2015 年 05 月 25 日

## 【チャオプラヤー川に吹く風（25）】高齢化が進むタイ社会 その2～社会保障制度と医療事情

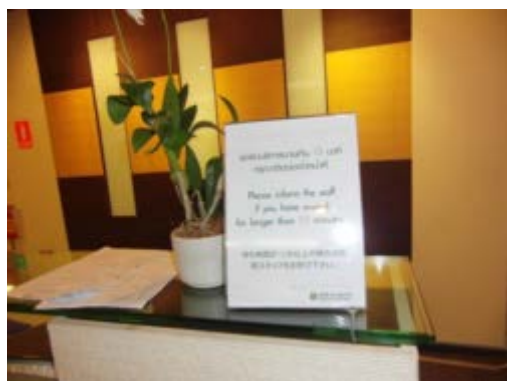


サミティヴェート・シーナカリン病院の子どもフロアー入口。親しみやすい楽しい雰囲気で見守ることができる。  
（撮影：上東野幸男）

前号では、タイ国が少子高齢化の度合いを強め、「人口ボーナス」期が終焉を迎えつつあることについて述べました。今号では、高齢化する人口を下支えするべき社会保障制度と医療がどのような状況にあるかをみていきましょう。

### ●タイ国の社会保障制度 構築の流れ

タイの年金制度は、1950 年代に公的部門、すなわち公務員と軍人向けに始まりました。この制度には、受給者に拠出義務はなく、退職時に一時金が、その後も最終月給に等しい年金が給付されるという手厚い内容でした。



サミティヴェート・スクムビット病院の待合室。「15 分以上お待ちの方はスタッフをお呼びください」と書かれてある。大手私立病院のサービスがわかる。（撮影：上東野幸男）

その後 1997 年の新憲法で社会的弱者の保護が規定されたことを受けて、民間企業の被雇用者にも年金制度が導入されましたが、給付水準は退職後の生活を保障するには十分とはいえないものでした。

2001 年の下院選挙で勝利したタイ愛国党のタクシン政権の下、翌 2002 年には、保健省の主導で、1 回の外来、または 1 回の入院ごとに、30 バーツ（約 100 円）の初診料の支払いでサービスを利用できることができるという「30 バーツ医療」制度が創設されました。

同政権下では、対象を自営業者、農業従事者、漁業・林業従事者に広げた「国民皆年金制度」の構築も目指されましたが、その動きが本格化することはありませんでした。人口を加味したシミュレーションの結果、制度の実現性、継続性に疑問符がついたためでした。（大泉啓一郎著「老いていくアジア繁栄の構図が変わるとき」中公新書 p.165-171）

## ●現在の社会保障制度

現在、タイの社会保障制度は、（１）公務員・軍人（国民全人口の 8％）、（２）企業等の被雇用者（同、16％）、（３）自営業・農業等——の 3 つのカテゴリーにより異なっています。

（１）には医療給付を含む手厚い社会保険・年金制度があります。

（２）と（３）には、（公務員であった者を除く）60 歳以上の高齢者全てを対象とする低水準の老齢給付があります。（月額給付額は 60～69 歳＝600 バーツ、70～79 歳＝700 バーツ、80～89 歳＝800 バーツ、90 歳以上＝1000 バーツ）

（２）には、その他に、政府管掌の社会保険制度（強制加入で、傷病、出産、障害、死亡、児童手当、老齢及び失業の 7 項目が給付対象）が適用されます。

国民人口の約 4 分の 3 に及ぶ（３）のカテゴリーの人々はどうかというところ…社会保険制度への加入は任意で、上記の老齢給付はあるものの、医療については、国民医療保険としての「30 バーツ医療」があるのみです。（※注：「30 バーツ医療」サービスは、2006 年 9 月にスラユット革命政権が無料化しましたが、2012 年 9 月から 30 バーツの負担が復活しています。但し、低所得者は「無料」が継続）。

（厚生労働省「東南アジア地域にみる厚生労働施策の概要と最近の動向（タイ）」

『2013 年海外情勢報告』）

なお、介護保障とはいえば、（１）（２）（３）どのカテゴリーについても、未だ公的な仕組みはありません。介護にかかわる出費は、所得水準に応じて、本人や家族の貯蓄・収入に頼るほかないという現実があります。

## ●医療事情

上述の「30 パーツ医療」を受ける際は、各人は居住地区の決められた病院に行かねばなりません。受付は人であふれかえり、早朝5時に受け付けをしても診察室に呼ばれるのは午後3時過ぎ、しかも医師の診察はわずか1分足らず——という報告もあります。(山下護「タイの高齢者事情と今後の課題」『海外高齢者事情(4) 世界の高齢者、暮らしとその課題』ILC-Japan, 2009年)

「30 パーツ医療」では、制度上患者一人あたりの予算設定が低く設定されているため、十分な治療が行えない(十分な診療報酬が得られない)という病院側の経営上の思惑も働き、30 パーツ制度の契約医療病院は公立病院にほぼ限定されているのが実情です。富裕層は、民間の保険に対応している私立病院にかかるのが一般的です。

公立病院と私立病院では、設備やサービスも大きく異なります。日本では病院の株式会社化は認められていませんが、タイでは私立病院は株式会社であり、独自の営業方針の下、多角的なサービスを展開しています。医療の質もさることながら、入院の場合の病室の居住性、食事内容など、それ以外の部分で患者の満足度を高めるものとなっています。タイでは、こうした私立病院にアクセスできる富裕層と、中下流層との間に医療格差が存在しています。

医療格差は、収入によるばかりでなく、首都と地方、都市部と農村部の格差も顕著です。医療資源はバンコクに集中しており、例えば、2002年時点の人口あたりのベッド数、医師数、看護師数(=何人の人口に対して、ベッドが1床、医師が1人、看護師が1人存在するか)を比較すると、分母となる住民の数は、ベッド数では、全国平均がバンコクの2.3倍、医師数では4.5倍、看護師数では2.5倍となっています。(国際協力銀行編「タイ王国における社会保障制度に関する調査報告書」p.36の表より算出)

2005年時点の65歳以上の高齢人口の比率(括弧内は2020年の予測)は、バンコクの5.7%(9.2%)に対して、東北部は6.4%(12.0%)、北部は8.3%(14.5%)となっています。(末廣昭『タイ 中進国の模索』岩波新書 p.119)つまり、高齢化の動きはバンコク首都圏よりも地方においてより速く進展しているわけで、地方における医療資源が拡充されないことには、その格差がますます広がってしまいます。

タイ政府はタクシン政権以来、国策として医療ツーリズムを推進しており、大都市の大手私立病院が年間250万人の外国人を診察しています。タイ国の医療人材は先進国より少なく、一定人口あたりの医師数、看護師数は全国平均で日本の約6分の1です。こうした状況下で、いわば限られた人的資源の相当数が雇用条件の良い大手私立病院に吸収され、その結果、一般国民の医療環境が犠牲になっている側面も忘れてはなりません。

ところで、タイでは、1970年代以降、マラリア、天然痘、脳炎、デング熱などの旧来の感染症は激減しましたが、近年エイズや鳥インフルエンザなどの「新しい感染症」に悩まされるようになりました。一方、心臓病、癌、糖尿病が増加傾向にあり、さらに高齢化社会に入ることによって「老人性退行症」も増加しています。このようにタイでは、「感染症」「生活習慣病」「老人性退行症」という三つの病気構造が並

存するという、先進国が経験したことのない事態を迎えています。（末廣昭、上掲書 p.122-124）

収入や居住地による医療格差、医療ツーリズムの弊害、そして“一筋縄ではいかない”この国の病気構造——と、タイの医療事情は一朝一夕には解決できない難しさを抱えています。

さて、次号では、タイ国における介護事情について取り上げます。

2015 年 06 月 22 日

## 【チャオプラヤー川に吹く風（26）】高齢化が進むタイ社会 その3～介護事情



クルアイナムタイ第2病院 ナチュラルホーム（撮影：上東野幸男）

前号では、タイ国の社会保障制度と医療事情について取り上げました。今号では、介護をめぐる状況をみていきましょう。

### ●ニーズの拡大

タイには公的な介護保障の仕組みはなく、現時点では、介護保険のような制度を創設することは検討されていません。



高齢者、要介護者対象のセラピーロボット「うなずきかぼちゃん」。家庭への普及も見込まれる。（撮影：上東野幸男）

タイでは高齢者施設に対する社会的イメージが悪く、施設に入ることへの抵抗感も存在するため、可能な限り自宅で介護をする傾向があります。タイの高所得者層の間では、メイドの助けを得て介護する

ケースも多くみられますが、近年は

- 高齢化の進行による、高齢単身者の増加
- メイドでは対応困難な要介護度の高い高齢者の増加
- 世帯構成人数減、共働きの増加
- メイドによる虐待や強盗などの問題

といった点が顕在化し、外部の高齢者向けサービスへのニーズが拡大しています。

### ● 3つの介護サービス

介護の民間サービスとしては、「自宅訪問型」「通所型」「居住型」の3つがありますが、「通所型」は、現状、バンコク市内では交通渋滞が激しく、送迎が困難…という問題があるため、ほとんど機能していません。

「居住型」には、(1) 保健省への届け出が必要な「医療（介護）付き老人ホーム」と(2) 同省への届け出が不要な「医療（介護）なし老人ホーム」の2タイプがあります。(1) の例としては、高齢者対象の「クルアイナムタイ第2病院」のナチュラル・ホームや、院内に高齢者向けフロアを開設した「サミティヴェート病院」、医療付き老人ホームを運営する「シニアヘルスケア」などが挙げられます。しかしながら、超富裕層は自宅での居住を希望するケースが多いため、「居住型」については、中間層からアップーミドル層の間での需要が増しているようです。(2) については、そのほとんどが個人経営の小規模なホームで、許可なしで介護サービスを提供するホームも多いとみられます。

「自宅訪問型」は、住み込みや通いのメイドによるサービスが大部分を占めますが、要介護レベルが高く、支払い能力が高い家庭の高齢者には「住み込み介護士」や医師、看護師を派遣するサービスが日系企業「リエイ」や「クルアイナムタイ第2病院」などの病院や老人ホームにより提供されています。

(みずほ銀行産業調査部「アジアにおける介護関連サービス市場の状況および 日系企業による進出可能性の考察」 Mizuho Industry Focus Vol.159, 2014 年 8 月)

### ● 日本からのサポート

介護に携わる人材の開発は喫緊の課題です。

「タイでは看護師に関しては大学、カレッジなど養成機関が多いものの、介護士についてはまだ養成システムが未整備で、この分野について、日本が国際貢献できる部分は大きいはず」と、日タイ・ビジネスフォーラムの上東野幸男氏は語ります。

上東野氏によれば、日本が介護先進国として、タイ国をサポートできることは「ソフト」（介護事業を運営するシステムやノウハウ）、「人的技能・ホスピタリティ」（直接介護者はじめ介護プラン作成者や管理者などの専門技能とチームワーク）、「先進技術」（センサー、IT、ロボット）——の3領域に広がっています。最近技術が進歩し、応用分野が拡大しているロボットは、“介護する人” “介護される人” 双

方のために開発が進んでいます。前者としては、介助者の腰にかかる負担を軽減する「マッスルスーツ」が開発され、後者としてはアザラシ型の「パロ」や、男の子の姿をした「うなずきかぼちゃん」などのセラピーロボットが製造、販売されています。セラピーロボットは、人間の呼びかけに反応し、人を精神的に癒すことで、認知症高齢者の徘徊や暴言、暴力行為やうつ病などの軽減に効果があると確認されています。

## ●家族関係の中でみた、老親扶養の現状

社会全体の高齢化が進む中、タイ人は老親の扶養にどう臨んでいるのでしょうか。森木美恵「少子高齢化と老親扶養問題——新たなるタイ社会の課題」『タイを知るための 72 章』（明石書店）は、大変興味深い指摘をしています。

従来 of タイ社会では「（誰か一人の）成人した子どもとの同居」は理想的な老後のあり方と考えられ、実際に高齢者の約 80% が子どもと同居しています。また、子どもの側からみると、特に出家によって親のために徳を積むことができない女性にとっては、老親扶養は重要な恩返しの機会と受け止められてきました。

昨今は少子化が進む中で、子どもとの同居率が 2011 年時点の全国平均が 57% 程度（都市部で 59%、非都市部で 55%）にまで低下しているという報告もあり、これまでのように「子どもが同居して親を扶養する」ことが難しくなっている現実があります。

一方、タイ社会では、少子化と並んで「未婚化」も進行しています。2005 年の段階で、40～49 歳の男性の 8%（バンコクでは 16%）、女性の 10%（バンコクでは 22%）が未婚です。また、成人した子どもと同居しているバンコクの高齢者についてみると、その 35% は未婚の子どもであるというデータがあります。少子化により、老親扶養の担い手の数は減っているものの、子どもが未婚のまま親と同居することで、“伝統的な老親扶養形態の崩壊”が押しとどめられているという側面もあるわけです。

しかし、近い将来には“子どもをもたない次世代の未婚高齢者”がまとまった人口集団として出現するわけで、それをどうやって扶養してくのが、社会にとって今後大きな問題になる——と同筆者は締めくくっています。

3 回にわたって高齢化が進むタイの状況を取り上げ、少子高齢化が経済発展のブレーキになる側面、社会保険制度や医療制度が抱える課題や介護事情などについてみてきました。今後も高齢化の影響は様々な形でタイ社会に表出してくることでしょう。制度面での整備がどのようになされていくのか、社会の基底を成す、タイ人の家族観が変わっていくことはあるのか、これからも目を向けていきたいと思っています。

2015 年 07 月 21 日

## 【チャオプラヤー川に吹く風（27）】タイシルク今昔 その1～伝統社会における織物



現代のタイシルク～無地の2色はクッションカバー、柄物の2枚はハンカチ。共に Jim Thompson 製（筆者撮影）

タイ国を代表する伝統的工芸は何か——といえば、筆頭に挙げられるのはタイシルクでしょう。タイシルクは外国人旅行者の土産品として人気があり、ネクタイやスカーフ、ポーチなど、各種製品が売られています。また、シルク生地で洋服を仕立てることもできます。

タイシルク製品は、外国人が求めるばかりでなく、タイ人が国外に持参する手土産としてもよく選ばれます。筆者自身、タイ人の友人からシルク製品をいただいたことが何度もあります。品質、デザイン性の高いタイシルクは、タイ人にとっても、自信をもって贈呈できるアイテムなのです。

このタイシルク——歴史を調べてみると、商業ベースで製品化され始めたのは、比較的最近であることがわかります。本連載では、今号から5回にわたり、タイの生糸生産や絹織物を巡る状況の推移を取り上げます。

### ●伝統社会における織物

タイの農村社会では、伝統的に絹や木綿の生産は女性が担っていました。女性は綿の栽培をし、養蚕用のカイコ蛾を採集し、草木を原料として染料を作り、川泥や植物からの抽出物や粘土を使って糸を媒染しました。

布を織ることは女性らしさにつながると考えられ、機織り技術の巧拙が妻として主婦としての評価にもつながりました。女兒は幼児期から養蚕や糸紡ぎ、織り、染めの過程を観察し、少女になると母親や親戚の女性から機織りを教えられました。そして、結婚するまでに家庭用や儀式用の様々な織物の織り方を会得するのが一般的でした。男性たちは、織機や紡錘車など、織物生産のための道具は作ったものの、織り手にはなりませんでした。

なお、養蚕はモンスーンの雨が桑の若葉の成長を促す時期——ちょうど、田植えが終わった後の農閑期に行われます。

タイ国では、19 世紀に合成の化学薬品が導入されるまで、植物染料と媒染剤にはもっぱら自然の物質が使われていました。合成染料がタイに伝えられた正確な年は定かではありませんが、20 世紀中ごろまでには、人里離れた農村地域を除いて、一般的に合成染料が使われるようになったようです。

(スーザン・コンウェイ著『タイの染織』めこん刊 p.43, p.64-65, p.79)

#### ●日本からの「お雇い技術者」の存在

上述のように、タイの伝統社会に浸透していた養蚕や機織りですが、その技術革新のために、明治期の日本人がタイ国に派遣されたことは、意外に知られていません。

明治末期、1902 年から 10 年間、日本人養蚕技師の一団がタイ国の蚕業顧問として雇われました。吉川利治は「暹羅国蚕業顧問技師——明治期の東南アジア技術援助」(『東南アジア研究 18 巻 3 号, 1980 年 12 月』)で、その際の顛末を明らかにしています。

日本人技師の派遣/受け入れが実現した背景についてみると、タイ・日両国の立場は次のようなものでした。

<タイ側>=綿業や絹業は地方農家の副業として営まれ、ほとんどが自家消費用でした。宮廷を中心に絹の需要が増える中、タイ国の指導者にとっては、外国から多額の生糸や絹布を輸入しなくても済むよう、国内の養蚕業と織物業を育成、発展させることが現実的な課題でした。

<日本側>=1906~10 年頃には、日本の生糸輸出量は、それまで世界最大の生糸輸出国だった中国の輸出量を上回り、世界第 1 位の座を獲得していました。当時東南アジアで唯一の独立国であったタイ国の独立維持を守るために、産業革命を成し得た日本が一役買うことは「東洋における先進国としての天職」であり、間接または直接に我が国の利益になる—という考え方がありました。

技師派遣に先立ち、1900 年末に訪タイした専門家 2 名は、養蚕が盛んな東北タイに赴き、ナコンラーチャーシーマー（通称：コーラート）を中心に調査を行いました。両名から報告を受けたと思われる当時

の稲垣公使が「タイの生糸は品質が悪く、地元でしか用いられていない。しかし、養蚕業は広く行われており、改良を行えば、久しからずタイの生糸は有力な商品となる」旨の報告を、タイの内務大臣であり、ラーマ5世の王弟であるダムロン親王に進言したという記録が残っています。

次号では、日本人養蚕顧問が、タイで実際にどのような足跡を残したかを見てみましょう。

2015 年 08 月 17 日

## 【チャオプラー川に吹く風(28)】タイシルク今昔 その2～日本人養蚕技師の活動(1)



外山亀太郎（1867-1918、写真提供：厚木市郷土資料館）

今号と次号では、タイ国で1902年から10年間活動した日本人養蚕顧問の足跡をたどり、日本人がタイの養蚕事業改良に、どのように関わってきたのかを紹介します。（参考文献：吉川利治「暹羅国蚕業顧問技師——明治期の東南アジア技術援助」『東南アジア研究 18 卷 3 号, 1980 年 12 月』）

### ●外山亀太郎 率いる 養蚕技師たち

日本人最初のタイ政府養蚕顧問は外山亀太郎（写真上）でした。外山は養蚕が盛んだった神奈川県愛甲郡（現在の厚木市）出身で、メンデルの法則をカイコで証明した遺伝学の研究者です。東京帝国大学農科大学助教授となった1902年にタイに招聘されました。

外山は、まず「農事試験場」（実質的には「養蚕試験場」）と「蚕業局」を整備し、人材として技師5人（横田兵之助、三島敏行、高野与祖次郎、細谷善助、中村辰治）と工女2人（国分セイ、平野キク）を呼び寄せました。



永島安太郎（生年不詳・1907、写真提供：厚木市郷土資料館）

このほかに現地バンコクでタイ語が話せる日本人4人を雇い入れました。その中の一人、永島安太郎（写真下）は外山と同郷で、愛甲郡小鮎村の村長も務めた人物です。彼らは当初は通訳としての雇用でしたが、次第に技師を補佐し、助手の役割を果たすようになりました。

技師らの活動の拠点はバンコクのパトゥムワンとタイ国養蚕業の中心地である東北部のナコンラーチャシーマー県（通称：コーラート）、ブリーラム県に置かれました。

日本人技師の中では、風土病で体調を崩す者が相次ぎました。外山自身も病を得て、3年の任期が終わると1905年に帰国。後任には田原休之丞が派遣されました（1907年帰国）。唯一、横田兵之助が最初から最後まで10年間タイの地で養蚕技師を務めました。

現地採用の日本人は、給料は日本から派遣された日本人の半分で、無契約での雇用のため、年1ヵ月の有給休暇ももらえなかったといえます。熱帯の厳しい暑さの中で過労が響いたのか、4人のうち永島を含む2人が1906～07年の間に相次いで病死しています。

#### ●蚕種の品種改良

外山は、「雑種強勢」の現象（＝遠縁の品種同士を掛け合わせると、その子の一代だけは成長速度、大きさ、生存率、生産性が両親の系統よりも勝れている）を養蚕に応用。より短い飼育日数で、より多く

の繭を生産し、生糸の生産効率を上げられるよう研究を行いました。1903年初めからタイ種と日本種の交配実験を重ね、外山の帰国後も田原が引き継いで、蚕種の品種改良に成功します。

## ●タイ人専門家の養成

さらに外山らは、養蚕技術向上のための学校を 1903 年に王宮内に開設し、自らも教壇に立ちました。受講生十数名はみな宮中で暮らす女性たちで、教科目は、桑樹栽培、蚕の飼育法、繭の保存、操糸法などでした。

この学校は翌年廃止となりますが、1905 年には蚕業局の事業拡大のため、王宮外に「養蚕学校」が開設されました。生徒は夜明けから夜 9 時まで蚕の飼育にあたり、さらに教科の授業を受けるという厳しい時間割でした。

教科は養蚕学や農学に加え、代数、幾何、三角法、立体測定法、地理、英語、ドイツ語でした。外国語の学習は、卒業後の留学を想定してのもので、翌 1906 年にはさらに生物学、化学が科目に加えられ、学校名も「農学校」と改称されました。

1908 年には蚕業局の給費学生 7 人が卒業。東北タイの各蚕業試験場の支所長、副支所長となり、契約満了となった日本人技師の業務を引き継ぎました。その後も養蚕学校・農学校の卒業生は（ドイツやアメリカへ留学する者も含め）農務省の幹部になっていきました。

バンコクの蚕業局は 1908 年に農務省の庁舎に統合され、農学校も地図局の学校に合併されました。蚕業局があった土地は翌 1909 年に大蔵省に売却され、バンコクの蚕業局は事実上消滅。コーラート、ブリーラムがその後の主力となりました。

農学校はさらに、運河局の学校とも合併し、「農務省学校」となりましたが、この農務省学校こそが、今日の総合大学「カセートサート大学」の前身です。

（次号につづく）

2015 年 09 月 14 日

## 【チャオプラヤー川に吹く風(29)】タイシルク今昔 その3～日本人養蚕技師の活動(2)



象に曳かれた荷車の横で馬に乗る技師たち（写真提供：厚木市郷土資料館）

前号に続き、タイ国で 1902 年から 10 年間活動した日本人養蚕顧問たちの動向を紹介します。（参考文献：吉川利治「暹羅国蚕業顧問技師——明治期の東南アジア技術援助」(『東南アジア研究 18 巻 3 号, 1980 年 12 月』)

### ●蚕糸技術の普及と織物の改良

前号で述べたように、養蚕顧問の外山亀太郎ら日本人技師は、バンコクと東北のナコンラーチャシーマー県（通称：コーラート）、その隣県のブリーラム県に拠点を置いて活動していました。コーラートでは桑樹が生長し、蚕の大量飼育が可能になったため、外山は、製糸・織物の技術改良を目指すべく「模範製糸場」の建設を起案します。しかし、それをどこに作るかで議論がおこります。

日本人養蚕顧問は、「繭が大量に生産され、水質がきれいで、低賃金の女子労働者を得やすいコーラートに作るべき。彼らの技術向上と所得増にもつながる」と主張したのに対し、タイ政府側は「先行投資の回収、国家の財源確保を考えれば、辺鄙な地方に設置する必要はない」とバンコク設置論を唱えました。結局、専門家である日本人の意見が受け入れられ、1905 年にコーラートに模範製糸場を創設。翌 1906 年にはブリーラムでも実習生を集めて、繭の飼育や繰糸法を教え始めました。

コーラートやブリーラムから、住民に教えられるだけの技能を習得した卒業生が出ると、東北タイの 8 カ所に設置した支所に派遣して、知識の普及を図りました。その際、繭は蚕業局が買い上げ、住民に座繰機械で生糸を作らせました。出来上がった生糸は蚕業局のものとなりますが、習熟した住民には日本製の座繰機械を 1 台ずつ配布する——という方法をとりました。

結果は予想以上の反響で、1906 年に講習を受けにきた住民は、材料の繭を使い切るまでの 3 カ月間で

126 人。その内 61 人が座繰機械の配布を受けました。そして 1910 年までに各支所で配布した座繰機械は 1159 台に上りました。

こうして蚕糸の生産技術が底上げされると、日本人技師らは、次に織物の改良に着手しました。1908 年、織物教師として飯塚亀吉・ハナの父娘が 2 年契約でコーラートに赴任します。（娘のハナは到着して間もなく病死。）その際、日本製の織機 10 台が輸入され、各種絹織物 1700 枚以上が織られました。しかし、織機の値段は座繰機械のように安価ではなく、織り方に習熟するにも数年かかります。織りの改良に関しては、目に見えた成果が出ぬまま、日本人養蚕顧問らが帰国の日を迎えることになります。

#### ●日本人蚕業顧問の帰国

日本人蚕業顧問のよき理解者であり、終始その活動を支えたのは、ラーマ 5 世（チュラロンコン王）の 38 番目の王子、ペンパタナポン親王でした。イギリスで農学を学んだ同親王は、蚕業局創設以来、局長を務めますが 1909 年に 26 歳の若さで病死してしまいます。翌 1910 年にはラーマ 5 世も崩御。悪いことは重なるもので、この年は天候不良のため桑の生育が悪く、蚕病が発生し、住民に配布した蚕種が半分も死んでしまう事態となりました。

こうした中、組織の改組が行われ、養蚕試験場の外国人所長は廃止、他のほとんどの職員は配置換えとなりました。そして地方産業に関する部局は農務省から内務省に移管されました。

1911 年、最後まで残っていた横田技師と織物教師の飯塚がコーラートを去りました。その後、1913 年には「蚕糸業への投資は採算が合わない」という理由で、各地の試験場や支所は廃止されるに至ります。外山らが日本種とタイ種を掛け合わせて品種改良に努めた蚕も、不十分な設備と技術者不足のため、良品種を他種から隔離して増産することができず、1911 年頃には飼育されている蚕は全てタイ種に戻り、日本種は消滅してしまいました。

#### ●日本人蚕業顧問への評価

日本人技師による養蚕開発や蚕糸改良事業には厳しい批判もありました。永年タイ国の農務省顧問を務めた英国人、ウォルター・グラハムは自著で、「実習を受けた娘たちは、家に帰れば、新知識はかなぐり捨て、相変わらずの方法に回帰し、配布された日本製器具は屋根裏に祭り上げられている。日本人専門家の努力にも関わらず、1922 年の絹を巡る状況は、開発に着手する前の 1901 年と同じ」と断じています。

これに対し、日本人技師の教え子で、横田と共に働いたタイ人のプレイヤー・アーハーンボーリラックは「新式の面倒な機械より、先祖伝来の簡便なものが好まれたのも一部事実だが、新式の繰糸器具を使おうとした者も少なからずいた。新式の機械で生産した生糸は良質だったので、住民は自分らで織り上げ、高い値段で買い上げてくれる蚕業局に売却したため、市場に出回らなかったのだ。また、蚕業局が

住民を指導したのはわずか4年であり、この年数で住民の意識を変えられるものではない」と発言しています。

本論文の著者である吉川利治は「タイの独立維持、殖産興業に手を貸そうとした日本人外交官・稲垣の呼びかけに、チュラロンコン王やダムロン親王は、日本側の計画通りに資金を出し、全ての進行を日本人に委ねるという鷹揚さで応じた。その背景には、蚕糸業の発展による日本の『富国強兵』という手本があった。ただ、不幸なことに日本側はタイの気候風土、住民の国家意識、気質を知らず、タイ側は養蚕開発の難しさを知らなかった。資金の乏しいタイ国は、現実的に対処しなければならず、10年かけて採算がとれなければ、打ち切らざるを得なかったのだろう」と分析しています。

## ●考察

日本人養蚕顧問らは、10年間でタイの養蚕開発を飛躍的に前進させることはできませんでしたが、彼らが礎を築いた養蚕学校、農学校の卒業生は農務省幹部となり、その後の養蚕業や農業行政を支えていきました。「お雇い外国人」として20世紀初頭にタイ国に赴任した日本人がいたという事実は、日タイの交流史の中で、もっと思い起こされてよいのではないのでしょうか。

模範製糸場をどこに作るか——の議論では、東北タイのコーラートを推した日本人、「辺鄙な地方に設置する必要はない」としたタイ政府側の思惑の違いが浮き彫りになりました。

そもそも外山らが養蚕事業の現場として選んだ東北タイは、1892年までタイ政府が直接統治する地域ではなかったこともあり、20世紀初頭当時の住民が国家への帰属意識をもっていたとは言えません。タイ中央の人々にとっても、東北タイは心理的に遠い地域であり「辺鄙な地方」という表現からはそんな意識が透けて見えます。

しかし、こと養蚕に関して、タイ全土の中で東北タイは昔も今も、紛れもない中心地。日本人技師らは、土地性を重視して同地で事業を展開しました。その判断の中に、100年以上前に日本人として国際協力の先陣を切った人々の現実主義的、合理的姿勢をみる思いがします。

さて、次号では、時代下って、第二次世界大戦後——「タイシルク王」と呼ばれたある著名なアメリカ人の足跡に光を当てます。

2015 年 10 月 13 日

## 【チャオプラヤー川に吹く風（30）】タイシルク今昔 その4～ジム・トンプソンの功績



ジム・トンプソンが自ら住み、賓客をもてなす場として、1959 年にバンコク・パトゥムワン地区の運河のほとりに建てたタイ伝統様式の家。別々の場所にあったチーク造りの古い 6 軒の家を組み合わせで建設した。タイやラオス、ミャンマー、ベトナム、カンボジアなどの古美術の収集家でもあったトンプソンは、居住当時からコレクションを屋内に展示。現在は「ジム・トンプソンの家 博物館」として一般に公開されている。※写真提供：タイ国政府観光庁(Tourism Authority of Thailand)

前々号、前号では、1902 年に日本からタイ国に渡った養蚕技師らの 10 年間の活動を紹介しました。その後、タイにおける養蚕、生糸生産は家内工業から脱皮せぬまま、さらに年月を重ねることとなりましたが、状況を打破し、現在の絹産業の礎を築いたのは、アメリカ人実業家ジム・トンプソンでした。

### ●タイに至る道

ジム・トンプソン（James Harrison Wilson Thompson）は 1906 年、米国デラウェア州に 6 人きょうだいの 5 人目として生まれました。実家は州の社交界では名の通った家柄でした。トンプソンはペンシルバニア大学で建築を学び、ニューヨーク市で建築設計家として 10 年ほど働きます。住宅以外によく手掛けたのは造園やインテリア装飾で、後年彼のシルク業を支えた色彩のセンスが既にこのころから発揮されていたようです。

人生の転機が訪れたのは 34 歳の時。欧州で第二次世界大戦が始まると、早晩米国も参戦するとみたトンプソンは、それまでの職業を辞め、デラウェア州軍に二等兵として志願したのです。入隊後はフロリダの士官候補生学校を経て少尉となり、1942 年に開設されたばかりの米国諜報機関 OSS（＝戦略作戦局：CIA の前身）に転属します。OSS のメンバーとして、トンプソンは日本と同盟を結んでいたタイ国（注）に潜入する任務を帯びます。1945 年 8 月後半にタイ東北部に飛び、そこからパラシュート降下する予定でしたが、直前に日本の降伏が伝えられたため降下はせず、「元敵軍の動向を探る」というミッションを受けて、バンコクに降り立ちます。

※注）第二次世界大戦中のタイ国は表向きは日本の同盟国でしたが、水面下で「自由タイ運動」を推進

し、連合国側とも気脈を通じていました。

### ●タイ滞在初期のトンプソンと当時のタイ政界

間もなくトンプソンは OSS 支局長の地位につき、臨時の米領事館を開設します。当時のタイ国には、2 人の政治的リーダーがいました。ピブン・ソングラームとプリディ・パノムヨンです。太平洋戦争開戦時、日本と同盟を結んだピブン首相は戦犯となり投獄されるも、やがて釈放されて再起を図ります。一方、「自由タイ運動」のリーダーだったプリディは戦後、1946 年 3 月に首相となります。

しかし、プリディ首相は、同年 6 月に起きたラーマ 8 世王（現ラーマ 9 世王の兄）の王宮内での突然死に関して嫌疑をかけられて失脚し、翌 1947 年に国外へ脱出しました。（以後、シンガポールで 2 年、中国で 21 年、フランスで 13 年間亡命生活を送り、1983 年にパリで亡くなりました。）トンプソンは OSS 支局長時代、プリディに会い、その知性と個人的魅力に強い印象を受けたといいます。

### ●タイシルク産業への船出と挫折

1946 年末、OSS を除隊したトンプソンはタイ国で事業を始める決心をします。最初に取り組んだのは、米空軍の兵舎として接收されていたオリエンタルホテルの再建でした。これは 6 人の合名会社による事業でしたが、その中心人物だったフランス人女性との意見の衝突などもあり、トンプソンはほどなくして事業から撤退。これがシルク産業へと舵を切るきっかけになります。

トンプソンは除隊後も米大使館の非公式な政治顧問を務めており、インドシナ半島の情勢、特にフランスからの独立を画策するベトナムとラオスの民族主義運動に関心を寄せていました。そうした文脈の中で、ラオス人の友人と共にタイ・ラオスの国境地帯を度々訪れ、（ラオスとは、民族、文化、言語など様々な面で地続きの）東北タイに親しむ機会を持ちます。タイシルクが好きで、バンコク着任以来、気に入った柄の生地を収集していたトンプソンでしたが、東北への旅を通じて、この地が伝統的に生糸生産の中心地であった事実や、外国産の廉価な絹織物の登場によって、タイ国の絹産業が危機にひんしている現実を意識したのではないかとみられています。

トンプソンが絹の分野で本格的な一步を踏み出したのは 41 歳の時です。彼はまず、バンコクの「バンクルア地域」に集住していた織工らに働きかけ、多様なパターンの織地を作ってもらい、アメリカで営業活動を行いました。米ファッション誌『ヴォーグ』で取り上げられたことなどで弾みをつけ、1948 年には「株式会社 タイ・シルク商会」を設立します。

しかし、ピブン政権下の 1949 年 2 月、海軍主導で起こったプリディ派のクーデターが鎮圧されると、政治活動に関わっていたトンプソンの知人が濡れ衣と思われる容疑で投獄、処刑されたり、亡命を余儀なくされました。彼の右腕となって東北タイの生糸の生産者との連絡役を務めていたラオス人も身の危険を感じて帰国。こうした政治状況に失望し、一時はアメリカへ戻ることも考えたトンプソンでしたが、

タイに留まる決意を固め、一層シルク事業にまい進していきました。

## ●事業の展開

トンプソンはその優れた色彩感覚と、絹に対する情熱をもって事業に臨みました。彼の功績は、大きく分けて（１）タイシルクの品質改革（特にデザイン革新）と（２）タイシルクの市場拡大——の二つの面に集約できます。具体的には・・・

（１）としては、退色しやすい天然染料を化学染料に変え、より華やかな色味を出すようになったこと。そして、プリント模様のシルクを開発したことが挙げられます。

（２）は、米国人という出自や彼の人脈の広さに助けられた面も大きいのですが、ニューヨークで絹製品のショーを開いたり、米国に自社製品を扱う卸代理店を作るなどして、拡販を進めたことです。

デザイン性に優れたトンプソンのシルクは世界に通用する製品へと育っていき、有名なブロードウェイ・ミュージカル「王様と私」の衣装を受注したことで、海外での名声も高まりました。

## ●謎の失踪

1967年3月26日の昼下がり、5日前に61歳の誕生日を迎えたばかりのトンプソンは、避暑先のマレーシア、キャメロン高原で忽然と姿を消します。周囲をジャングルに覆われた丘陵地帯にある知人の別荘に滞在中、同行者らとピクニックに出かけて戻り、各人が午睡をとるために個室に戻っている間のことでした。

トンプソンが別荘付近を一人で散策することは珍しくなく、しかも、この日は煙草とライター、持病の発作用の薬が自室に残されていたため、みな彼はじきに帰ってくるものと楽観的に考えました。しかし、夜が更けても彼は戻りませんでした。翌日には商談のためシンガポールに向かう予定で、黙って失踪する理由は見当たりません。ジャングルに分け入って遭難したのではないかと、その後しばらくの間、大々的に搜索活動が行われましたが、痕跡らしい痕跡はなく、ついにトンプソンは発見されませんでした。

失踪の年、1967年はラオス内戦やベトナム戦争のさなかで、反共政策を展開する米国がインドシナ半島で活発に諜報活動を行っていた時期です。トンプソンは、かつて自分が所属していたOSSの後身—CIAと繋がりがあったのではという説もあり、他方、米国の諜報活動とは関係のない何らかの政治的理由によって、姿をくらましたか、或いは拉致されたのではという憶測も飛び交いました。

確たる手掛かりがないまま、失踪後7年を経た1974年、彼の死が法的に宣告されました。遭難事故だったのか、それとも連れ去られたのか——真相は今も闇の中ですが、彼が残した「ジム・トンプソン」ブランドは、その後も発展を続け、今やタイシルクの代名詞ともなっています。

トンプソンの足跡と失踪については、『ジム・トンプソン 失踪の謎』（ウィリアム・ウォレン著／吉川勇一訳、Archipelago Press）に詳しく、松本清張が失踪事件を題材に『熱い絹』という長編ミステリー小説を書いています。

2015 年 11 月 09 日

## 【チャオプラヤー川に吹く風（31）】タイシルク今昔 その5～現代のタイシルク事情



この日のために誂えたタイシルクのドレスで結婚式に出席。左端が瀧澤さん。

「タイシルク今昔」シリーズ締めくくりの今号では、現代のタイシルク事情を紹介します。

### ●タイ国有数のシルク産地は？

歴史的にそうであったように、現代においても、タイ国での生糸、絹織物生産の中心地は、東北地方です。

良質な絹織物の産地として全国的に知られているのは、東北タイのコーンケン県・チョンナボット郡です。同郡産出の絹織物は、絹糸が細く、織りが精微で美しいと言われています。

2003 年に APEC（アジア太平洋経済協力）の国際会議がタイで開催された際、時のタクシン・チナワット首相は、東北タイのスリン県・ムアン郡・ターサワン地区で生産されたシルクで服を誂え、会議参加者に記念品として進呈しました。これをきっかけに、同地区は現在では最も有名なタイシルクの産地となりました。



東北タイの伝統的絹織物、マットミー（写真提供：瀧澤明子）

筆者の友人で、自らもコーンケン県出身のティダーラット・ノイスワン氏は、上述の2か所の絹織物を比べ、「織りの繊細さでいえば、どちらの絹も互いに引けをとらない。色味に関しては、コーンケンの絹は無地か、赤と緑の（派手な色目の）取り合わせが多いのに対して、スリンの絹は水色やグレー、淡いピンクなど地味な色目を、鮮やかな赤と組み合わせるなどしており、よりモダンな印象を受ける」と評しています。

#### ●タイシルクを日本に伝えて十数年

東京都豊島区駒込で「タイシルク リムナム」を経営する瀧澤明子さん。瀧澤さんは、1992年から2年間に、チュラロンコン大学経済学部で留学し、その後、バンコクの日系自動車メーカーに勤務して、1999年に帰国しました。タイシルクに惹かれ、タイ滞在中は休日の度に各地方を訪れ、絹織物を集めたといいます。帰国後は、タイシルクに関わる仕事をしようと、タイシルクでオーダーメイドの服を作る事業を立ち上げました。顧客にタイシルクの生地見本を見せて、相談しながらデザインを決定。タイへオーダーのデータを送り、バンコクの縫製業者が仕立てて、それを輸入する——という流れで展開しています。

立ち上げ当初はインターネットも普及していなかったため、やりとりに時間がかかり、また、時間の観念の違いからか、納品期日に大幅に遅れるなどの問題も起きました。仕上がりが発注した通りのデザインでなく、なぜかと問うと「こちらの方が合うと思った」という答えが返ってきて驚かされたことも。判断は自分でせず、必ずこちらに質問する…ということを徹底させ、納品日も遅れそうな時は事前に申し出てやりくりするなどができるようになりました。今では頼もしいビジネスパートナーです。

#### ●タイシルク産業を巡る状況

十数年来、オーダーメイド業を続けている瀧澤さんが、最近とみに感じるのは、タイの絹織物産業から以前のような勢いが失われているという現実です。

要因の一つは原材料不足です。ここ2、3年、「シルクアミノサプリメント」等と称し、「美容や健康にいい」という触れ込みで、シルク繊維をサプリとして摂取する流行が中国を中心として日本でも起こっています。この潮流を受け、アジアの生糸価格が一様に上がって、タイでも原材料の高騰が激しくなっています。

また、従来、旅行でタイを訪れ、滞在中にシルクで服を仕立てる外国人は絹織物産業を支える重要な客層でしたが、ここ数年はタイの情勢を不安視して渡航を控える旅行者も多く、それがオーダーメイドの需要減につながっている面も否めません。

しかしながら、一番の原因は、絹糸や絹織物の生産に関わる熟練工が高齢化と共に引退し、次代を担う人材がなかなか育たないことです。技能を身に付け、一人前になるにはそれなりの鍛錬が必要ですが、かつて熟練工たちが絹産業の職人になった時代に比べると、今日では職業の選択肢が広がっています。「同じ対価をもらえるのであれば、より苦勞の少ない仕事に」と流れるのは人間の常。いきおい、なり手が減ってきているのです。

熟練工の減少は、絹織物の品質低下に直結します。瀧澤さんが年に数度タイに赴き、布地を仕入れる際も、以前なら、反物の巻き終わりの1、2メートルを見れば、その布地の質に確信がもて、安心して数十メートル分購入できました。しかし最近では、反物の端だけ見て長い尺を買ってしまうと、いざ裁断となった時に、織りが均等でなく、糸のひきつれなどのキズ、色が均一に入らないムラなどに気付き、洋服の仕立てには使えないということもあるとか。

「私が長くこの仕事をしてきたのは、美しい絹織物と出会い、その良さを日本で伝えたいと願ってきたから。いい布がなければ、気持ちが続きません。品質の悪い生地が多いため、入手先が限られてしまい、顧客に対してバラエティに富む提案ができないのが最近の悩みです」と瀧澤さん。

さらに、絹織物のデザインについても、「タイのシルク業界には、一過性の流行を追う傾向があり、例えば、ファッションの世界で、どこかのブランドの象徴的な模様が流行ると、すぐにそれをシルク地にプリントするなどして転用しがります。もっとデザインという作業に力を入れて、テキスタイルのデザイナーを使ったり、市場調査をするなどして意匠を洗練させてほしいと思うのですが、一方で“タイらしい素朴さ”も魅力なので、悩ましいところ」と実感を語ります。

タイは、元々テーラー文化が盛んな国柄です。生地店で布地を買い、自分の好きなスタイルで洋服を作るのは決して特別な贅沢ではなく、バンコクや地方の都市部では今でも生地屋や仕立屋を見かけます。しかし、一般にタイ人が気軽に仕立てるのは綿や化繊の服が多く、瀧澤さんによれば「あらたまった機会に着るためにタイシルクのスーツやドレスをオーダーするタイ人は限られている」とのこと。日本人みな和服を着てパーティに出るかといえば、そうでない状況と似ています。しかも、近年は縫製料金の上昇や、多種多様なファッションが手に入るようになったことにより、テーラーメイドをやめて既製服しか着ない層が大半となり、その影響で店じまいする仕立屋も増えています。

そもそも、タイの気候では日常的に絹の服を着るのは難しく、昔も今も、車で行って、車で帰る富裕層のパーティ服に使用が限定されてきました。瀧澤さんは「今後も、日々の暮らしの中で、タイ人がシルクの服を着る機会が身近になるとは考えづらいが、晴れの場に絹を纏う若い人が増えれば、絹織物産業の維持・発展につながるのでは」と期待を寄せています。

ところで、今回、瀧澤さんの話を聞き、筆者も認識を新たにしたことがあります。タイシルクの製品としては、(旅行みやげとして人気のある) スカーフやポーチ、ネクタイなどの小物を思い浮かべがちですが、タイシルクは何よりもまずドレスやスーツを作るための素材です。小物類は元々その余りで作られていたもので、現在も、絹織物の需要の多くを占めるのは、洋服のオーダーメイド市場です。そうした意味においても、タイシルクの未来は、「絹地で服を誂える」文化の存続如何にかかっているといつてよいでしょう。

2015 年 12 月 07 日

## 【チャオプラヤー川に吹く風（32）】タイのお正月



タイの年賀状「ソー・コー・ソー」（筆者撮影）

師走に入り、当連載も年内最終回となりました。今号はタイ国の正月をテーマにお届けします。

### ●タイの3つの正月

「タイには年に3度、正月がある」と言われます。西暦の正月と、華人系が祝う中国正月（春節）、そしてタイの旧正月（4月）です。

西暦の正月は大晦日と元日の2日間が祝日です。歴史をひもとけば、タイで太陽暦が導入されたのは1888年で、それまでは「チャントラカティ」という太陰太陽暦が使われていました。西暦の1月1日が元日となったのは1941年からです。

西暦の正月が終わると、ほどなくして春節がやってきます。春節は旧暦に従って決まるので、日付は固定されません。年により、1月下旬から2月中旬ごろに越年となります。首都バンコクは華人系の人口比が高いため、時期が近づくと、街のそこここで店頭に中国式年賀カードやお年玉袋などが並び、春節到来ムードが高まります。春節はタイ国の公式な祝日ではなく、官庁も企業も平常通りですが、華人系の個人店舗などは休業するところが多いようです。

タイ人が国を挙げて大々的に祝うのが、毎年4月13日～15日にやってくる旧正月「ソンクラーン」（旧チャントラカティ暦の新年）です。この3日間は国の祝日で、ソンクラーンの休みが土日にかかる年は、その分が振替休日になります。その年のカレンダーによりますが、前後の平日や週末もつなげて5日間～最長で15日間程度休むこともあります。就学や就労のため、郷里を離れている人々が一斉に帰省する、年一番の大型連休です。

さて、春節やソンクラーンについては別の機会に譲るとし、今号では西暦の正月を取り上げます。

## ●年賀のプレゼント

タイには、年末から年始にかけて、日頃お世話になっている人に贈り物をする習慣があります。必ず贈らなければ失礼にあたるという慣行ではなく、する人もしない人もいます。

この時期、デパートやスーパーには、様々な品々を入れてラッピングしたバスケットが沢山並びます。「クラチャオ」と呼ばれる年賀ギフトの定番です。バスケットの中身は、主に飲料や缶詰などの詰め合わせで、各種果物の詰め合わせや燕の巣などもあります。

「クラチャオ」は目上の人に渡すギフトなので、友人同士ではやり取りはしません。友人や職場の同僚には、メモ帳やボールペンなど、10～20 バーツ程度のささやかな品を配るのが一般的です。また、家族など大事な人には、相手の顔を思い浮かべながら、特別な品を選んで贈ります。

## ●年賀状（ソー・コー・ソー）

年末年始には、タイ人はグリーティングカード「ソー・コー・ソー」を送り合います。日本の年賀状のように、元日（以降）に届くよう送るという決まりはありません。12 月半ば頃から発送を始めてよく、年明け後も 1 月中旬まででしたら、出して差し支えありません。（それより遅くなると、春節のカードを送る時期と重なってしまいます。）中島マリノ著『タイのしきたり』（めこん刊, p203）によれば、グリーティングカードを出す習慣は、19 世紀後半、西洋文化の影響を受け、ラーマ 4 世が側近や外交関係者らにカードを送ったのが始まりと言われているそうです。

日本の年賀状は葉書タイプですが、タイのソー・コー・ソーは欧米のグリーティングカードのように二つ折りになっており、封筒に入れて送ります。

市販されているカードの絵柄にはどんなものがあるかというと、「ジャスミンの花輪」「ベンジャロン焼（タイの磁器）」「タイの名所旧跡」「ラーマキエン物語（インドの叙事詩「ラーマヤナ」のタイ語版）」など・・・タイの伝統的な文物を描いたものが主流です。国民が敬愛するプミポン現国王の肖像画のカードもあります。

「ソー・コー・ソー」は「ソン／クワーム／スック」（幸せを送る）という 3 つの音節から成る言葉の頭文字をとったものです。カードの冒頭にはまず「サワディ・ピーマイ」と書きます。直訳すると“こんにちは、新しい年”で、日本語の「あけましておめでとう」にあたります。それに続けて、よく書かれるのは「新年にあたり、あなたとあなたのご家族が幸せでありますように、何でも願い事が叶いますように、そして、健康で過ごせますように」といった祝福の言葉です。

友人に書くメッセージと、目上の人宛のものでは、表現に違いがあります。友人であれば、上述のように「新年にあたり、あなたが〜であるよう祝福します」と書けばよいのですが、目上の人宛の場合、自分を主語にして“祝福します”と書くのは不遜で、失礼にあたります。そこで、「三宝（仏陀と仏法とサンガ）の聖なる徳が、あなた様に〜をもたらしてくれるよう、願わせて下さい」といった書き方をします。つまり、自分発ではなく、崇高な「三宝」を引き合いに出して、その高みから、相手の幸福を願うのです。

ところで、1987年からは、元日にプミポン国王から国民へのソー・コー・ソーがテレビや新聞を通じて発信されています。ここ数年は国王が愛犬と共に撮影した写真に、「サワッディ・ピーマイ。幸福と発展を祈ります」とのメッセージが添えられていました。2015年のソー・コー・ソーは写真ではなく、仏陀の前世を描いた仏教説話「ジャータカ物語」の一場面の絵が使われ、「研ぎ澄まされた英知と壮健な身体をもち、真心をもって精励を」と書かれていました。

## ● タイ人の年越し

大晦日には、街に繰り出して「カウントダウン」をする人々がいる一方で、そうした賑やかな過年を好まず、大晦日の夜から元日の朝まで寺院で「年越し読経」に勤しむ人たちもいます。「年越し読経」の歴史は新しく、10年ほど前にバンコク市内のワット・サケット寺院（通称：黄金の丘）で始まったのが端緒で、それが他の寺院にも広まりました。

元日の朝、タイの家庭では、托鉢の僧侶に食事を捧げます。（※本連載（13）「タイ社会と仏教 その2～タイ人とサンガの関係」——で述べた「タンブン」～功德を積む行為～です。）元日には、寺院に向いて「タンブン」する人も少なくありません。とは言え、タイ人は誕生日にも同様に「タンブン」をしますし、敬虔な仏教徒は、習慣的に托鉢僧へ食事を差し上げているので、“正月ならではの徳行”というわけではありません。

タイ人の友人に、年頭に寺院に詣でる時にはどのようなことを念じるのか尋ねてみたところ、（一般的に）「正月には新しい人生が始まると考え、良くないことが往く年と共に去っていくよう、新年には良いことがあるよう祈ります」との答えでした。

なお、正月休みには家族皆で外食をしたり、家でパーティを開いたりしますが、タイには日本のおせちのような、特別な料理はありません。

## ● 彼我の違い

筆者は留学中、タイで年越しをした年もあります。振り返ると、日本に比べて「新年を迎える」という実感が薄かったように思います。それはなぜだろうと改めて考えたのですが・・・

年末年始の日本には「おせち作り」「年越しそば」「紅白歌合戦」「除夜の鐘」「初詣」「書き初め」「七草粥」などイベントや風物詩が多く、「仕事納め」「仕事始め」「笑い初め」「初売り」など、お正月が一年の始まりということを意識させる言葉も沢山あります。そうした環境では「節目」としての正月の重みが際立つのかもしれませんが。

タイでは、街がイルミネーションに彩られるなどし、祝祭ムードはあるものの、休み自体は短く、正月が日常の延長にある感じがしました。

本年も拙文をお読み下さり、ありがとうございました。皆さまにとって明年が佳き年となりますようお祈り申し上げます。

“サワッディ・ピーマイ 仏暦 2559 年／西暦 2016 年”

2016 年 01 月 12 日

## 【チャオプラヤー川に吹く風（33）】「山田長政」考 その1～静岡と長政



「第 30 回 日・タイ友好 長政まつり」の様子（筆者撮影）

2015 年 10 月 11 日、静岡県静岡市内の浅間通り商店街で「第 30 回 日・タイ友好 長政まつり」が開かれました。

同商店街の公式ブログ「夢門前ニュース」によれば、このまつりは 17 世紀初頭、朱印船に乗ってアユタヤに渡った山田長政が浅間通りの出身であることにちなみ、1986 年から開催されています。当初は静岡市の若者有志による「長政まつり」でしたが、その後商店街の主催となり、山田長政を記念顕彰するのみならず、日タイの親睦を推進する「日・タイ友好」事業として、タイ料理やタイ舞踊なども紹介するようになりました。2005 年からは在京タイ王国大使館やタイ国政府観光庁の支援も受けています。

まつり当日の商店街は、屋台で様々なタイ料理を味わう人、特設舞台の前でタイ舞踊や伝統音楽演奏を鑑賞する人などで賑わいました。周辺エリアではタイの 3 輪タクシー「トゥクトゥク」に試乗体験できる催しもありました。

### ●戦艦図絵馬

浅間通りには長政の生家跡があり、通りの先には、昔から地元の人々に「おせんげんさま」と親しまれてきた静岡浅間神社があります。

アユタヤで活躍した長政は 1626 年に己の立身出世の諸願成就報告のため、故郷の浅間神社に「戦艦図絵馬」を奉納しました。（本人が帰国したわけではありません。）絵馬には

奉挂御立願 諸願成就 令満之所 当国主 今天竺暹羅国住居  
寛永三丙寅歳 二月吉日 山田仁左衛門尉長政

(※「暹羅国」は当時のタイの国名「シャム」のこと)

と記され、文字の下には、異国風の軍船が描かれました。

それから約 160 年後の 1788 年、付近の町で起こった火事が神社に飛び火して、長政が奉納した絵馬は焼失してしまいます。しかし、1754 年に駿府城在番の旗本、榊原長俊が絵馬を模写していたため、その絵を基に改めて絵馬が制作され、火事の翌年に奉納されました。この二代目の「戦艦図絵馬」は、榊原長俊による模写絵(※注) 共々、現在も静岡浅間神社が所蔵しています。(※大正時代に静岡県内で所在が判明し、持ち主が同神社に奉納しました。)

例年「日・タイ友好 長政まつり」では、「山田長政戦艦図絵馬奉納行列」と題し、絵馬のレプリカを神輿に載せて担ぎ、商店街を練り歩くパレードも実施されています。

## ●「山田長政」の知名度

ところで、この山田長政という歴史上の人物——現代の日本人にはどのくらい知られているのでしょうか。

筆者がビジネスパーソン向けのタイ研修に出講する際は、日タイの歴史的つながりを紹介する中で山田長政に触れるのですが、20 代～30 代の若手世代では「ヤマダナガマサ」という名前にピンとこない方も時折おられます。

しかし、別の機会に、ある戦中派の方に話を聞いたところ、「子どもの頃は、英雄として漫画や講談本などに大変露出度が高かった。主人公の武士が南国で活躍する様にロマンを感じる」とのコメントで、年代によって山田長政の認知度やイメージが異なっていることに気づかされました。

全国歴史教育研究協議会が編んでいる『日本史用語集』(山川出版社)には、全ての高校日本史教科書に盛り込まれている歴史用語が収蔵され、各用語には簡潔な解説と共に、その言葉が何冊の教科書に出ているかが頻度数として示されています。

1984 年に刊行された版を見ると、山田長政への言及がある教科書数は(全教科書数 15 の内)「11」ですが、最新の『日本史用語集—A・B 共用』(2014 年刊)では(日本史 A,B 合わせた教科書数 15 の内)「6」でした。

これをもって単純に、日本史教育の現場で「山田長政」が教えられる機会が減った——と断ずることはできませんが、少なくとも高等学校の歴史教科書では、この 30 年間で「山田長政」の取り扱い頻度が減っていることがわかります。

読者各位は、山田長政について、どのような印象を抱いていらっしゃるでしょうか。

日本で山田長政のイメージが変遷してきた経緯については、その時代背景と併せて本シリーズ 3 回目で取り上げたいと思います。

まずは、次号で長政の足跡をたどり、当時のアユタヤの日本人町の状況にも目を向けてみましょう。

[<前の記事](#) [一覧に戻る](#) [次の記事>](#)

2016 年 02 月 08 日

## 【チャオプラヤー川に吹く風（34）】「山田長政」考 その2～長政略伝



アユタヤにはかつて「旧日本人街」との簡素な標識があったが、タイ国日本人会と日本政府の援助で 1987 年に新たに日本人町跡の碑が建設された。（筆者撮影）

前号で、静岡市内で毎年開催される「日・タイ友好 長政まつり」を紹介しましたが、長政に関しては、はっきりしないことが沢山あり、出生地についても駿河国のほかに、長崎、伊勢、尾張など諸説あります。現在「長政まつり」が開催されている静岡市葵区の浅間通りは、長政が幼少年期を過ごした場所と伝承されています。今号では、アユタヤの歴史に名を残した長政の足跡をたどってみましょう。

### ●タイに渡るまで

「山田仁左衛門長政」の生年は不詳ですが、おそらく 1590 年ごろと推測されています。タイに渡る前は、駿河国の沼津藩主（三枚橋城・城主）、大久保忠佐の轎夫（駕籠かき）をしていました。1613 年に忠佐が死去した後、跡継ぎがいなかった大久保家は断絶、三枚橋城も翌 1614 年に廃城となります。

長政が朱印船に乗って、アユタヤに渡ったのは 1612 年前後とみられます。渡航の動機や経緯はわかりませんが、主家の断絶とほぼ時期を同じくしており、何らかの因果関係があるのかもしれませんが。



アユタヤ王朝は 1767 年にビルマ軍の攻撃を受けて滅亡。その遺跡群はアユタヤ歴史公園として整備され、1991 年にはユネスコの世界遺産にも登録された。(筆者撮影)

### ●17 世紀前半のアユタヤと日本人町

アユタヤは、417 年（1351～1767 年）の長きにわたり、35 代の王が君臨したアユタヤ王朝の首都です。17～18 世紀の首都アユタヤの人口は約 19 万人、地方国を含めた全領土の人口は 600 万人未満と推定されています。

チャオプラヤー川、ロブブリー川、パーサック川の合流点にある港市アユタヤには、元々、(明朝・清朝皇帝への朝貢の形式をとって行われた) 対中貿易を支える中国人が居住していました。16 世紀以降はオランダ、英国、ポルトガルなど多くの外国人が渡来・居留し、17 世紀にはアジアの国際貿易都市として、世界にその名が知られるようになりました。

16 世紀末～17 世紀初めには日本人町も形成されました。その規模は、昭和初期の調査で、東西約 230 m、南北約 570m であったことが明らかになっています。また、最盛期の日本人町の人口は 1500 人に達したと推定されています。

日本人町の住民は、貿易に携わる商人のほか、日本での迫害を逃れたキリシタン、関ヶ原の戦いや、大坂城落城後に亡命した浪人などでした。日本人居留民は、平時には鹿皮や鮫皮、蘇木（そぼく：漢方薬の原料）などの貿易に従事しつつ、有事には、日本人義勇隊（Krom Asa Yipun）を組織し、対ビルマやカンボジアの戦争に馳せ参じました。国王の近衛隊には 200～800 人の日本人傭兵がいたとみられています。

### ●アユタヤでの長政の活躍

アユタヤ宮廷は、各外国人居留区の頭領にタイの官位を授け、俸給を与えて居留民の監督に当たらせていました。

山田長政は、アユタヤで鹿皮、鮫皮、蘇木の仲買人として頭角を表し、1620 年頃に日本人町の頭領に任命され、日本人義勇隊の隊長も務めました。ソントム王の信任が厚く、「オークヤー・セーナーピムック」と呼ばれる大臣の地位にまで上りました。

長政の成功は「貿易家」と「武将」の二面にわたっています。貿易家としては、1621 年にアユタヤの使節が訪日する際、部下を随行させて、書を江戸幕府の土井利勝、本多正純に送り、交易の斡旋に努めるなどの事績を残しており、武将としても、日本人義勇隊を率い、外征や内乱鎮圧で功を成しました。

## ●王位継承争いとリゴール赴任

さて、長政を厚遇したソントム王が 1628 年に病没すると、宮廷では、王子擁立派と王弟擁立派による後継者争いが勃発します。ソントム王は生前王子による継承を望んでいたため、長政は王子擁立派につき、800 人の日本人義勇隊と 2 万人のタイ人を率いて、反対派を鎮圧しました。

しかし王位を継いだソントム王の子、チェーターティラート王（当時 15 歳）の王座は安定せず、長政と共に擁立に尽力した権力者、オークヤー・カラーホームとの政争に敗れて処刑されてしまいます。その後を継いだチェーターティラート王の 10 歳の弟アーティッタヤウォン王もわずか 1 ヶ月で廃位され、1629 年、オークヤー・カラーホームが自ら王位に就き、プラサートトーン王となりました。

プラサートトーン王の即位と同時期に、長政は南タイのリゴール（六昆：現在のナコンシータマラート）の国主（太守）に任命されています。（※アユタヤとナコンシータマラートの場所はこちらの地図参照）

この任命については、

ー王位継承争いに関与した日本人・山田長政が首都から遠ざけられた。

ープラサートトーン王は、地方の統治者が世襲で権力を強大化するのを排すべく、中央から官吏を送りこむ政策をとっており、その一翼を長政が担った。

ープラサートトーン王は、長政と日本人義勇隊をアユタヤから排除しつつ、軍事的要衝地であるリゴールを（武将としての能力の高い）長政に守らせたかった。

・・・などと、様々に分析されています。リゴール行きが、アユタヤ王朝の王位継承問題に絡んでいるのは間違いありませんが、長政は「王位継承内乱に巻き込まれた」とする見方と「王位継承に干渉した」とする見方があり、評価が分かれるところです。

さて、任地リゴールで、長政は旧主を支持する勢力や、南のパタニー国との闘いに臨み、反乱を治めますが、1630 年に毒殺されてしまいます。（パタニーとの戦闘で脚に傷を負った際、家臣により、そ

の傷に薬と見せかけた毒を塗られ、謀殺されたという説もあります。) 黒幕はプラサートトン王だったのか、パタニー軍だったのか、長政のリゴール統治に対する現地の不満分子であったのか——定かではありません。

## ●山田長政没後の日本人町

長政が亡くなると、同年の内に、アユタヤの日本人町はプラサートトン王の軍隊による焼き打ちを受けます。日本人居留民は難を避けて海外に逃れますが、そのわずか2年後(1632年)には日本人町が再建され、人口も300~400人程度まで回復しました。しかし、徳川幕府が1633、34、35、36、39年に発令した第1次~5次鎖国令(35年に日本人の海外渡航を禁止)により、アユタヤの日本人町は次第に衰退。18世紀初めには自然消滅したようです。

## ●長政は実在したのか？

山田長政に関する史料が乏しいことから、研究者の間にはその存在を疑問視する声もあります。しかし、南禅寺の僧、金地院崇伝がものした『異国日記』(1621年)やオランダ東インド会社職員としてアユタヤに駐在したファン・フリートによる『シャム革命史話』(1640年)など信憑性の高い文献もあり、長政が実在していたのは確実と考えられます。

ただし、昭和10年代以降、日本で盛んに喧伝された「英雄長政」像は、当時の政府の「南進政策」推進に沿うもので、多分に虚構が含まれていました。

(石井米雄による「日本人町」「山田長政」の項、『東南アジアを知るシリーズタイの事典』同朋舎)

次号では、日本における山田長政のイメージの変遷について、各時代の状況と共に解説します。

2016 年 03 月 07 日

【チャオプラヤー川に吹く風（35）】「山田長政」考 その3～日本での山田長政のイメージの変遷 <江戸期～1932 年まで>



静岡市内の浅間通りにある山田長政の銅像。首にはタイ式の花輪がかけられている。(2015 年の「日・タイ友好 長政まつり」当日に、筆者撮影)

今号では、歴史的に、山田長政がどのように書かれ、あるいは教えられてきたのか——その推移を各時代の状況と併せて追ってみましょう。

土屋了子は、山田長政に関する記述を系統的に調査収集し、それらの資料から読み取ることのできる山田長政像の特徴を、日本に関しては次の 5 つの時期に区分して論じています。(土屋了子「山田長政のイメージと日タイ関係」『アジア太平洋討究』第 5 号, 2003 年 3 月, p.97-125, 早稲田大学アジア太平洋研究センター)。

- (1) 長政の死から開国 (1854 年の黒船来航の頃) まで
- (2) 開国から第 1 次世界大戦勃発まで
- (3) 第 1 次世界大戦勃発から 1932 年まで
- (4) 1932 年から第 2 次世界大戦終結まで
- (5) 第 2 次世界大戦終結から現在まで

本稿では、同論文の考察に沿って上記の (1) ～ (3) の時期の、次号では (4) (5) の時期の山田長政のイメージの変遷をたどります。

なお、同論文は 49 冊の本（記事・脚本なども含む）と 15 箇所の教科書の記述を取り上げていますが、当連載では、紙面の関係で代表的なものに絞りました。その選択や解説内容については、見立てと分析を誤ることがないように、この度、論文の著者、土屋氏による確認・監修を経ております。

## （１） 長政の死から開国まで

### ●長政の同時代的資料

長政が 1630 年に没した後、最初に書物に登場するのは約 70 年後です。智原五郎八が『暹羅国風土軍記』『暹羅国山田氏興亡記』を、天竺徳兵衛が 1707 年に『天竺徳兵衛物語』を記しています。この両名は自ら直接山田長政をめぐる事件に遭遇したか、アユタヤからの情報を耳にして執筆に臨んだと思われ、これより後に書かれる様々な長政伝説に材料と原型を提供しました。

### ●江戸後期の長政像の国粹主義的色合い

1794 年に出版された『山田仁左衛門渡唐録』（著者不明、柴山柳陰子の語りを書きとめた本）は、シャムを「外夷」（中華文明の及ばない非文明国）とみなし、日本をそれよりも上のものと位置付けています。また、長政についても「お国のために貢献すべく、シャムと日本の貿易促進を図った」という見地で評価し、長政が静岡浅間神社に奉納した「戦艦図絵馬」にこめた（一神社への）感謝の念を、“日本の神徳への感謝”に置き換えるなど、国粹主義的発想がみられます。

国学者・平田篤胤も 1813 年にその著『気吹おろし』で、国粹主義的な長政像を踏襲し、長政を「大日本魂（＝日本人のみが持ったすぐれた精神）が外国に渡った際の手本」としています。

## （２） 開国～第 1 次世界大戦まで

### ●教科書にみる長政像の推移

開国後、明治維新を経て、日本の教育も大幅に改革され、1872 年には学制発布により義務教育制度が導入されました。第 1 次世界大戦勃発までの間、山田長政は歴史、国語、修身の 3 教科の教科書中に、長期にわたって頻繁に登場しましたが、中でも回数が多かったのが歴史教科書（初出は 3 教科の中で最も早く、1879 年）でした。同論文では、この時期の教科書の影響力の大きさに着目し、年代毎の特徴を次のように述べています。

第 1 期（1879 年、82 年、83 年）の歴史教科書では、「長政はシャムの外寇を防ぎ、国内の反乱を鎮めるなどの功績により国相に上り、リゴールの王に封ぜられた」という記述に留まっています。

第2期（1888年、93年）になると、「長政は（リゴールの王に封ぜられた上に）シャム王の王女を妻とし、シャムの国政を代行した」とのフィクションが付加されるなど、長政の力を誇張する意図がみられます。この時期は、1885年に内閣制度が設けられ、初代文部大臣の森有礼が学制改革を行った時期に重なります。教科書検定が開始され、1890年には教育勅語も発布されるなど、国家至上主義的な教育体制が固められた時代でもありました。また、ナショナリズムを基礎とした「アジア主義」（注1）や「南進論」（注2）が勃興したのもこの時期で、この2つの思想が長政像にも波及したと考えられます。

第3期（1898年、1900年）には、長政像は第1期のそれに復帰し、誇張が削ぎ落とされました。

（注1）「アジア主義」＝アジアの諸民族が連帯することで、西欧列強による植民地支配からの解放を目指す考え方で、「大東亜共栄圏」構想につながっていく。

（注2）「南進論」＝日本の国益のために南洋進出によって対外発展を図ろうとする理論。

## ●一般書について

長政についての最初の記述が一般書に現れるのは1875年（大鳥圭介等著『暹羅紀行』）。この著作の中で、長政が「シャム王」になったとする説が初めて登場し、1887年の森貞次郎著『山田長政暹羅偉蹟』や1992年の関口隆正著『山田長政伝』などでも「長政＝シャム王」説が継承されています。

1898年には『少年世界』という当時の少年向け雑誌に、森島城の短編小説「山田長政」が掲載されましたが、この小説で「海国男子」という、その後長政の形容に長く用いられることになる言葉が初めて使われています。日清戦争（1894-5）と日露戦争（1904-5）の狭間の時期であり、「海軍拡張の時代を反映しているのでは」と、同論文は分析しています。

この時期（開国～第1次世界大戦勃発）の一般書にみられる長政像は、同じ時期の教科書にみられる山田長政とある期間は重なり、ある期間は異なった様相を呈しているようです。一般書には、教科書に存在した第1期はなく、教科書の第2期のような誇張のある長政像が当初から描かれ、教科書の第3期と同じ頃（1898年の森島城の頃）から、歪みの少ない長政像になったと総括しています。

## （3） 第1次世界大戦勃発～1932年

この時期には、山田長政は教科書には全く登場していませんが、一般書には、日本をアジアの盟主と見る「アジア主義的シャム観」が表れています。例えば、1921年に後藤肅堂が記した「山田長政とシャムより奉納せし絵馬について（上）」では、長政を「桃太郎の権化であり、大和男子の意気を海外に輝かせた、誇るべき人物」と紹介しています。

大仏次郎は1930年から31年にかけて『少年倶楽部』に「日本人オイン」という少年少女向けの小説を連載しました（※オインは長政とシャム女性との間に生まれた男の子）。同著は、「日本人町の人たち

は、我慢強く、生き生きと勤勉で、異郷にあってもこつこつと自分の生活を築いていく。シャムの人々に恩義を感じて、彼らと仲良く付き合い、隣国から軍隊が攻めてきた時には、自ら進んで武器を取り、シャム軍に加わった」とし、長政についても「できるだけ早く成功して日本へ引き揚げることだけを考えず、日本人としての良い点を残しながら、シャムの人間になりきろうとした」と記しています。

大仏は、山田長政やアユタヤの日本人町の人々の姿を通し、「理想の植民地の姿」や「海外における理想の日本人像」を描きました。その背景には、失業率が高く、海外植民が奨励され、南太平洋諸島（赤道以北）を委任統治領として実質的に支配していた、当時の日本の状況があったと考えられる——と同論文は指摘しています。

（１）～（３）を振り返ると、山田長政のイメージに起伏が見られたのは、  
—江戸後期に、長政像が国粹主義的な色合いを含んで描かれたこと  
—明治新政府による教育改革と「アジア主義」「南進論」の２つの思想の興隆により、教科書で長政の力が誇張される時期があったこと  
—第１次世界大戦以降 1930 年代の初めにかけて、長政像に日本をアジアの盟主と見る価値観や、海外植民を奨励する考え方、タイ（当時はシャム）に対する“南進論的野心”が投影されたこと・・・などでした。

次号では、残る２つの時代——（４）「1932 年～第２次世界大戦終結まで」と（５）「第２次世界大戦終結～現在まで」の山田長政像に光を当てます。

2016 年 04 月 04 日

## 【チャオプラー川に吹く風（36）】「山田長政」考 その4～日本での山田長政のイメージの変遷 ＜戦中～戦後＞



1970 年代に販売された知育玩具『ゲームで覚える 日本歴史カルタ』（有限会社 林商事[当時]製）の絵札と読み札。日本史上の出来事や人物が（<1>仁徳天皇陵～<48>日清・日露戦争まで）計 48 枚のカルタに描かれ、その内の 1 枚が「山田長政」である。数ある歴史的事象から厳選された 48 枚の中に長政が入っているのは興味深い。（筆者撮影）

前号では、江戸期から 1932 年までの山田長政のイメージの変遷を 3 つの時期に分けて解説しました。今号では、引き続き、土屋了子の論文（「山田長政のイメージと日タイ関係」『アジア太平洋討究』第 5 号, 2003 年 3 月, p.97-125, 早稲田大学アジア太平洋研究センター）に基づき、残る 2 つの時代の山田長政像を追います。

### （4）1932 年から第 2 次世界大戦終結まで

1930 年代に入ると、日本外交は国際協調主義から大きく舵を切り、満州事変（1931 年 9 月）をめぐって列強と対立。国際連盟を脱退（1933 年）するに至ります。日本は「植民地主義からのアジア解放」を謳い、日中戦争、太平洋戦争へと突入していくのですが、その際の基盤にあった「大東亜共栄圏」の思想は、山田長政像にも影響を与えます。

端的に言えば、山田長政は大東亜共栄圏の理想を体現した「南進の英雄」としてのイメージを与えられ、日本人の戦意高揚のために利用されました。この時期、長政について一般書、教科書、研究書など多岐にわたる分野で多数の著作が世に出ました。

### ●小学校教科書の長政像

山田長政は 1900 年の歴史・国語の小学生向け教科書に登場したのを最後に約 40 年間、代表的な小学

校の教科書から姿を消していましたが、太平洋戦争が勃発した 1941 に再登場しました。当時の教師用の分冊には「海外雄飛の精神を鼓舞し、大東亜共栄圏の建設に邁進する心構えを養う」と記されてありました。

この時期の教科書は、長政がアユタヤの宮廷で重用されたことについて、個人としての立身出世や栄達とは描かず、「長く海外にありながら、日本のために尽くした」としています。また、長政と地元市民との関わりについても、日本側の史料には何も記録がないのにもかかわらず「シャムの人々に親しまれ、尊敬を受けた」と断定的に書くなど、長政像にはバイアスがかけられました。

## ●一般書の長政像

1940 年には、角田喜久雄が読売新聞夕刊に『山田長政』を連載し、「長政ブーム」の先駆けになりました。同小説はシャムを巡ってヨーロッパ諸国と日本が対立するという構図をとり、「山田長政が日本に使者を送ってシャムへの援軍を求めたのは、ヨーロッパの勢力に対抗して、(長政の時代に先立つこと 100 年以上前から馴染み深い国であった) シャムに日本の勢力を扶植するためであった」としています。さらに、シャムのソンタム王の妹のルタナ姫が長政に恋をするというロマンスが描かれているのも特徴です。角田が作詞をし、流行歌手、東海林太郎が 1941 年にテイチクレコードから出した「山田長政の唄」にも長政とルタナ姫の恋のエピソードが登場します。

1942 年 8 月に『興亜』に掲載された中田千畝著「山田長政」では、長政は、当時日本社会に浸透していた「大東亜共栄圏」「八紘一宇」(「世界の多くの国々の人々を一家一族のように天皇が支配する」という思想) の実現を目指した人物として描かれています。

同じく 1942 年に出た沢田謙著『山田長政と南進先駆者』では、ソンタム王が、長政の説く「国体の尊厳」と「武士道の精神」に心打たれ、わが子ゼッタ王子の教育を長政に依頼したとし、白井喬二著『山田長政』も、同王が王子の教育を長政に任せ、なおかつ王女を長政の妻にしたとしています。シャム王が(王子や王女を託すほどに)長政から影響を受け、長政の思想(暗に「八紘一宇」等も示すと考えられる)や「日本精神」に感化されたとする筆致です。

## (5) 第 2 次世界大戦終結～現在まで

戦後 10 年間は、長政はマスコミや言論界から姿を消しますが、その後、かつての「南進の英雄」像とは違った姿で再登場し、書物に加え、映画、舞台などで取り上げられるようになりました。

## ●長政が登場する、戦後の作品例

### ー1959 年の大映映画「王者の剣」(長谷川一夫主演)

日タイ合作映画でしたが、日本でもタイでもヒットしませんでした。「日タイ合作映画ゆえ、日本人に

もタイ人にもどちらにも受け入れられる長政像を描こうとした結果ではないか。初めてタイ側の目を意識した山田長政像がここで生まれたと言える」と同論文はコメントしています。

#### —1969 年の山岡荘八の小説『山田長政』

長政がシャムに向かった動機を「限られた国土の中での過剰人口の問題が深刻化していた当時、海外に活路を求めたから」とし、長政の死については「日シャム貿易を妨害しようとしたオランダの陰謀による」としています。

#### —1980 年の林青梧著『山田長政』

長政は英雄ではなく、「浪人、キリシタンなど海外移住を余儀なくされた日本人の生存のために悪戦苦闘せざるを得なかった悲劇の指導者」として描かれています。また、長政が殺されたのは、日本人がシャム人の反感を買ったからで、その背景には

「日本人はシャム人を見下し、彼らの習俗を馬鹿にして受け入れなかった」

「日本人は武威を誇り、シャム人が日本人に畏敬の念を抱いていると思いこみ、平気で彼らの上に君臨してきた」

「日本人はシャム人から搾取し、シャム人はいつまでたっても下積み」

などの原因があったと述べています。

これらは、太平洋戦争中の東南アジア諸国での日本人の行為や姿勢を想起させ、日本企業のタイ進出が進んだ 1970 年代前半に起こった反日運動が批判した日本人像とも一致。林は、山田長政を傲慢な侵略的移民者とみて、戦中・戦後の日本人の行為に対する反省として本書を著したのでは——との同論文の分析です。

#### —1981 年の遠藤周作著『王国への道—山田長政』

遠藤は、長政の死について「日本人がもつ伝統的な 2 つの弱さが原因」としています。すなわち「土地の生活に順応できず、日本的な生活を送っていたこと」「力の法則に徹した合理主義や冷たさをもたず、情に流されることがあった」という 2 点です。

—1993 年の窪田篤人脚本「明治座グランドロマン アユタヤの星」では、アユタヤの日本人たちは祖国へ帰れない無念さを抱いて死んでいったのではない。タイを心から愛し、溶け込むように生き、死んでいった日本人たちも大勢いたのだ——とし、ここに初めて「タイを愛した山田長政像」が登場しました。

「1990 年代は、日本においてアジア諸国の文化への関心が高まった時期であり、これが長政像にも反映したのでは」と同論文は考察しています。

### ●戦後の歴史教科書について

土屋の論文は、「第 2 次世界大戦終結～現在まで」の教科書に関する分析は含みません。「山田長政」に着目して戦後の各時期の初等～中等教育の検定教科書を包括的に比較した研究例は筆者の知る限りな

く、戦後の歴史教育の中で山田長政の扱いがどのように変わってきたか、あるいは変わっていないのか——についてここで検証することはできません。(但し、本連載「その1 (2016年1月12日)」で触れたように、高等学校の歴史教科書に関しては、この30年間で「山田長政」の取り扱い頻度が減っていることが確認できました。)

本稿では、現在使用されている検定教科書から、山田長政についての著述箇所を2例紹介します。

—『詳説日本史B』(高校用) 山川出版社 (2012年3月検定)

■本文「朱印船貿易がさかんになると、海外に移住する日本人も増え、南方の各地に自治制をしいた日本町がつくられた。渡航した日本人の中には山田長政のようにアユタヤ朝(1351-1767)の王室に重く用いられたものもいる。」

■欄外の注「駿府出身の山田長政は、アユタヤ朝(タイ)の首都アユタヤにあった日本町の長で、のちリゴール(六昆)の太守(長官)となったが、政争で毒殺された。」

—『新しい社会 歴史』(中学用) 東京書籍 (2012年3月検定)

■本文「京都や堺(大阪府)、長崎などの商人や西日本の大名の中には、朱印船貿易を行う者が出ました。これにともない、多くの日本人が海外へ移住し、東南アジアの各地には日本町ができました。」

■欄外の注「山田長政(?-1630): 駿河(静岡県)の出身で、アユタヤの日本町の指導者となりました。やがてシャムの役人になりますが、争いに敗れて毒殺されました。」

長政像に「海外雄飛の英雄」といった色づけは全くなく、事跡が淡々と述べられていることがわかります。

さて、次号では視点をタイ国に移し、「タイにおける山田長政のイメージ」について述べます。

2016 年 05 月 02 日

## 【チャオプラヤー川に吹く風（37）】「山田長政」考 その5～タイ国での山田長政のイメージ



ナコンシータマラート市内にある横丁の標識。「PIMOOK」は山田長政の官職名の一部で、横丁名は直訳すると「長政の東屋横丁」となる。同地に伝わる数少ない長政の痕跡の一つ（撮影：土屋了子）

前々号と前号では日本での山田長政像の変遷を追ってきました。連載最後の「その5」では視点をタイ国に移し、山田長政のイメージを考察します。

### ●タイにおける山田長政像の変遷

「その3」「その4」で引用した土屋了子の論文（「山田長政のイメージと日タイ関係」『アジア太平洋討究』第5号, 2003年3月, p.97-125, 早稲田大学アジア太平洋研究センター）は、その終章で、タイ国での山田長政に関する出版物について解題し、各書の時代背景についても分析しています。

タイで最も早く山田長政を紹介したのは1920年に出たサー・アーネスト・サトウの論文“Notes on the intercourse between Japan and Siam in the seventeenth century”です。サトウは山田長政についての一次資料を原文(オランダ語と日本語)から英語に訳して、タイの歴史学界に初めて知らせ、また、オランダ語の『シャム革命史話』中のオークヤー・セーナーピムックが日本の山田長政と同一人物であると比定するなど、以後の山田長政研究に先鞭をつけました。（※注：サトウの論文が出るまでタイで山田長政が無名だったのは、タイ語の歴史資料には「山田長政」という名前が出てこないことが最も大きな理由と考えられます。）

その後、タイの言論界で、実質的に山田長政への言及が始まったのは1935年、ルアン・ウィチット・ワータカーンの著作『オークヤー・セーナーピムックあるいはチャオプラヤー・ナコン（山田長政）の略歴』からです。同書の前書きでは、日シャム協会のプラヤー会長が「外国人とはいえ、山田はシャムで活躍し、官位名を得た。そして、ついには地方の大都市を治めるほど、タイ国王の信頼を受けた」「日本人が日タイの友好について語る時、いつも山田長政に触れるので、タイ側も山田について知っておく

べきである」と記しています。

これについて土屋は、「1930 年代の日本との交流において、タイが日本に気を遣った結果、それまで知られていなかった山田長政への関心が生じた」と解説しています。

1970 年代には、山田長政を批判する著作が出ました。サン・パッタノータイは『プラサート・トーン王』（1973 年）で「山田時代の日本人はシャムの政治に影響力を持ちすぎていた。日本人は好きな人物を王位に据え、国王を殺すこともできた。プラサート・トーン王が日本人のシャム政治への影響力を駆逐したのは王の勝利であった」と述べています。（⇒ソンタム王の死後に起こった王位継承争いでは、山田長政は前王の遺志を酌んで王子擁立派につき、日本人義勇隊とタイ人兵を率いて反対派を鎮圧しました——本連載「その2」参照。しかし、「好きな人物を王位に据え」「国王を殺すこともできた」という解釈には多分に誇張が含まれます。）

また、タンヤー・ポンアーナンは 1975 年に「日本に対する抵抗——山田から田中まで」（※注：「田中」は田中角栄元首相を指す）の中で、「アユタヤ時代には山田がタイの政治に干渉したので、プラサート・トーン王は日本人を追い出した。日本人はその過去を教訓として、どうすべきかを考えてほしい。もし日本人がこのまま自己本位の利益追求を続ければ、タイ人はかつてそうしたように日本人をタイから追い出すかもしれない」と記しています。

土屋は 1970 年代のこうした著述について「アユタヤ時代の日本人のシャム国政への影響力を過大評価し、歴史事実を歪めたもの。1970 年代当時の日本の経済進出に対するタイ側の強い反発——という状況の中で、山田長政像も反日の道具となった」と説明しています。

1970 年代を過ぎると、タイ側の山田長政への関心は急速に冷却化しました。

## ●ナコンシータマラートでの長政

2001 年 8 月、山田長政が没したタイ国ナコンシータマラート県に「山田長政この地に眠る」と刻まれた石碑が建造されました。この出来事は、タイの反日感情を引き起こす引き金になることが懸念され、日本側、タイ側に少なからず波紋を起こしたといえます。

当該論文の著者、土屋了子氏は筆者のインタビューに応じ、「戦前から戦後にかけて、様々な日本人が、日本の側の勝手な思い入れで、タイの地に山田長政の記念碑を建てたり、建てようとした事実があり、それが日タイ関係に影を落としてきたことは否めない。2001 年建造の記念碑についても、残念ながら、すべてのナコンシータマラートの人々が受け入れているわけではないと推定される」と語りました。その根拠としては「1987 年に日タイ交流 100 周年を記念して、同じ場所に同様の記念碑を建てる計画が起こった際、ナコンシータマラート市民が賛成派（市長や商業者）と反対派（歴史家や一般市民）に分かれて激しい論争になり、計画が中止された経緯があった」ことを挙げています。

ところで、同地には古くから伝わる子守唄があり、土屋氏が現地調査した折にも、ナコンシータマラート総合大学南文化センター長のウィチヤン・ナ・ナコン氏など地元の歴史学者たちが「山田長政が領主だった時代に、領地の人々が苦しめられたという内容」と話していたそうです。

この子守唄の歌詞は、岩城雄次郎が小説『暹羅国武士（シャムのくにのものふ）盛衰記——真説ヤマダナガマサ』（1996年）で紹介しています。

「子どもよく聞け、かわいい子ども／アユタヤ下りの日本の殿が／わがもの顔で人の国荒らし／子どもは捕まえ／女子（おなご）も若い衆も／町中さらって／思うがままにするんだよ」

### ●タイにおける山田長政の知名度

山田長政の知名度は、ナコンシータマラートでは比較的高いと推測されますが、タイ人全般についてはどうでしょうか。

「山田長政のタイ国での周知度」を測った調査統計などはなく、データに依拠して論じることができません。筆者のタイ人の友人（ナコンシータマラート以外の出身、日本留学経験者）複数に尋ねてみると、異口同音に「学校の社会科で習った記憶はあるが、どんな偉業を成した人か覚えていない」との答えが返ってきました。日本への留学経験のある、いわば日本通のタイ人ですらこうした認識なのですから、一般的にはあまり知られていないのが実情といつてよいでしょう。

現代のタイの歴史教科書について、山田長政の登場の有無や、登場している場合、どのように著述されているか、刊行年代毎の特徴はあるのか——など、調査研究の価値がありますが、本連載ではそこまでの論究が行えないことをご容赦下さい。

今日、日本では山田長政は“日タイ友好のシンボル”あるいは“架け橋”といった存在になりつつあります。しかし、そうした見方を当然のものとして、一般のタイ人にも期待すれば、肩すかしを食らうかもしれません。タイ人との対話で、山田長政を引き合いに出す日本人は少なくないでしょうが、長政がタイではあまり知られていないということ。知っている場合も、必ずしも好意的なイメージではないかもしれないという可能性を心の隅においておく必要があると思います。

2016 年 05 月 30 日

## 【チャオプラヤー川に吹く風（38）】上下関係の理 その1～タイ語に敬語はあるのか？



筆者の友人女性が経営するベーカリーの店員さん親子（バンコク郊外の市場にて）

今号から3回にわたり、タイ社会の中の上下関係のあり様について書きたいと思います。今号と次号では、丁寧表現や人称代名詞などに着目し、タイ語を切り口に考えてみましょう。

### ●タイ語の丁寧表現

日本語には「尊敬語」「謙譲語」があり、動詞の「行く」がそれぞれ「いらっしゃる」「参る」に、「食べる」が「召し上がる」「いただく」・・・になるなど、動詞そのものの表現が変わります。タイ語では、基本的に動詞の表現は、一つの意味に対してひとつですが、丁寧語が存在するものも若干あります。

たとえば、「食べる」にはよりカジュアルな「ギン」と丁寧な「ターン」という二つの表現があります。「ギン」は日本語の「食う」ほどには砕けておらず、親しい間柄との会話では、男女や世代に関係なく使います。一方の「ターン」は丁寧語であり、尊敬語ではないので、「私は朝ごはんを食べました」という時にも使えます。

### ●タイ語における敬語的用法

タイ語には日本語のような敬語の体系はありませんが、だからといって、言語にタテの人間関係が反映されないのかといえば、そうではありません。

まず、タイ語では、話者が文章の最後に、男性なら「クラップ」、女性なら「カー」という言葉を添えると、丁寧になります。言わば、日本語の「です」「ます」のような言葉です。タイ語の初歩を学ぶ際、男性なら「サワディークラップ」女性なら「サワディーカー」という挨拶表現を習いますが、「サワディー」だけだと、ざっくばらんなトーンになり、目上の人やビジネス相手などに対しては失礼にな

ります。

また、二人称として「あなた」(クン)のほかに「あなた様」(タン)という言葉があります。動詞そのものを尊敬語に換える日本語とは異なり、タイ語では相手を「タン」と呼ぶことで、敬意を表すことができます。この「タン」は三人称の敬称にもなり、その場合は「あのお方」という意味になります。

敬語的な用法として、もう一つ挙げられるのは、何かを質問する時に「～ですか?」と直接聞かない話法です。例えば「あなたはいつ日本に来るのですか?」と尋ねずに「あなた(様)がいつ、日本にいらっしゃるのか存じません」という風に、間接的に質問をすると、より丁寧になります。

### ●相手の呼び方がキー:「ピー」「ノーン」「クン」など

タイ人は、初対面でも相手の年齢を聞くことがあります。それは、相手と自分のどちらが年上かを知り、その上で、今後の付き合いにおいて、適切な呼び方、振る舞い方をしたいという思いがあるからです。

タイ語では、「兄＝ピー・チャイ」「姉＝ピー・サーオ」ですが、実際に兄姉に呼びかける時は、「ピー」のあとにニックネームを付けます。例えば、ニックネームが「ニッド」というお姉さんであれば「ピー・ニッド」と呼びます。血縁関係のある兄姉だけでなく、学校や勤め先でも、自分よりも年長の人は「ピー＋ニックネーム」(または「ピー＋ファーストネーム」)で呼ぶのが一般的です。

一方、タイ語で弟、妹を表す言葉はそれぞれ「ノーン・チャイ」「ノーン・サーオ」ですが、自分の弟妹は、普通ニックネームだけで呼びます。自分より年若い友人や同僚を呼ぶのも、ニックネームだけでOKです。もっとも、「ノーン＋ニックネーム」で呼ぶケースがないわけではありません。「ノーン」を冠して呼ぶと、年長者が年少者を慈しむような感情が表現されます。

この「ピー」「ノーン」という言葉は、それ単体で、見ず知らずの(＝名前を知らない)年長者／年少者に呼びかける時にも、相手の性別に関係なく使えます。例えばレストランでは、自分より若いと思われる店員さんには「ノーン、メニューを下さい」などと依頼します。(相手が自分より年上と思ったら「ノーン」を「ピー」に替えて言います。)

家族の呼称を血縁者以外に用いるのは「ピー」や「ノーン」だけではありません。例えば、「お父さん(ポー)」「お母さん(メー)」は、自分の親のみならず、友人の親を呼ぶ時にも使いますし、血のつながっていない年配者に「おじいさん」「おばあさん」と呼びかける際は、母方の祖父母に対するのと同じ「お祖父さん(ター)」「お祖母さん(ヤーイ)」という言葉を用います。

実は、タイ語の家族の呼称の内、「祖父・祖母」「叔父・叔母」には父方と母方で異なる呼び方があるのですが(「伯父・伯母」は父方・母方共通)、興味深いことに、血縁外に一般化して使われるのは、い

ずれも母方の呼称です。これは、家系が伝統的に女系継承されているタイにおいて、母方の呼称の方が社会に浸透していることの表れと言えます。

筆者のタイ留学中の話ですが、同寮生に、地方の高校を休職してチュラロンコン大学教育学部の修士課程で学ぶ英語教諭がいました。筆者よりも年上でしたので、常日頃から「ピー〇〇」と呼んでいました。その寮生が夏休みで地元に戻っていた時、日本人の留学生仲間と二人で、その地を訪ねたことがあります。その寮生は、自分の高校の教え子たちにも声をかけ、我々を隣県の遺跡見学に連れて行ってくれたのですが、道中、高校生たちは筆者のことを終始「ナー」（母方の叔母と同義）と呼びました。当時筆者は20代だったので、年の差は10歳程度。「ピー」と呼ばれるかと思いきや、まさかの「ナー」で、急に自分が年をとったような気がしたものです。

タイ人は実際の親密さの度合いに関わらず、こうした「疑似家族的」な呼称を使って、周囲との人間関係を構築しています。それらの呼称は「長幼の序」の概念を内包しているため、話者は自ずと対面する相手との上下の関係性を意識することになるのです。

ところで、二人称で「あなた」を意味する「クン」は、その後に相手の名前を呼べば、日本語の「～さん」と同じような敬称になります（「クン・ヌッチャリー」は「ヌッチャリーさん」）。

「クン」はフォーマルで、相手に対して距離を置いている感じがします。ビジネスシーンなどで、タイ人と対等に付き合いたい場合は、向こうが年長でも「ピー」を使わず、あえて「クン」で呼び合うという選択をすることもあるでしょう。通常「クン」の後にはファーストネームが来ますが、日本人ビジネスパーソンは、仕事のし易さや通りの良さを考え、「クン・タナカ」のように名字にクン付けで呼んでもらうことが多いようです。

さて、次号では、ちょっと複雑なタイ語の一人称について紹介し、そこから垣間見えるタテの人間関係について考察します。

2016 年 06 月 27 日

## 【チャオプラヤー川に吹く風（39）】 上下関係の理 その2～タイ語の一人称



バンコクの書店の平積みコーナー。中央に立てかけられている水色の表紙の本のタイトルは「ラーチャーサップ（王族用語）」（筆者撮影）

前号では、タイ語の敬語的表現について解説しました。今号でも、タイ語の側面から、タイ社会における人間関係の「縦糸」に光を当ててみましょう。

### ●七変化する「私」

前号で、タイ語では「ピー」（お兄さん、お姉さん）などの「疑似家族的」な呼称を用いて、相手との人間関係を構築していることを述べました。

疑似家族的な「二人称」を状況に応じて、多様に使い分けるわけですが、タイ語は「一人称」も様々で、英語の“I”のように一つで事足りるわけではありません。

タイ語で「私」という時は、男性なら「ポム」、女性なら「ディチャン」というフォーマルな言い方があります。男性の「ポム」は使用範囲が広く、ビジネス相手などのあらたまった人間関係のみならず、友人との間でも、親に対して自分を呼ぶ時にも用いられます。

しかし、女性の「ディチャン」は、「ポム」以上にかしこまった呼び方で、使えるのは、仕事などの公的な場に限定されます。友だちや親に向かって、女性が自分を「ディチャン」と呼ぶことはまずありません。

では、女性が私的な人間関係で、自分を呼ぶ際はどうしたらよいのかといいますと——友人や親、兄姉、年上の親族に向けては、ニックネームをそのまま一人称として使います。筆者の寮時代のルームメイトのニックネームは「オイ」（「サトウキビ」の意）でしたが、彼女が「私は」と語りたい時は全て「オイは」という言い方をしていました。日本語に置き換えて考えてみると、成人した女性が自分のことを

名前で呼ぶのは、何とも幼い感じがしてしまうのですが、タイの女性は、中高年世代になっても、同じ関係性を維持している相手（友だち、年長の親族など）に対しては、ずっとニックネームを一人称として使うことができます。

大人が幼い子（男女問わず）を呼ぶのに「ヌー」（「ネズミ」の意）という二人称を使うことがあります。例えば、家族経営のレストランや屋台などで、小学生くらいの子どもが親の手伝いをしていることがあり、客が何か注文したくて彼らを呼ぶ際に「ヌー」と言ったりします。「ネズミ」と言って馬鹿にしているわけではなく、「可愛い、小さな存在」である子どもを慈しむ思いが込められている呼称ですが、外国人の身でタイ人の子どもを「ヌー」と呼ぶのは不遜な響きにならないかが心配で、筆者はなかなか使えません。

この「ヌー」は、一人称として口にすれば、へりくだった、謙譲的な表現になります。子どもが親や教師に対して、一人称の「ヌー」を使うことはよくあります。

留学中、40代か50代とおぼしき女性教授が、恩師（70代くらい）の前で自分を「ヌー」と呼ぶのを耳にし、驚いたことがあります。「ヌー」は女性にとっては、子ども時代限定ではなく、尊敬の念を表したい相手には、その関係性が続く限り、何歳になっても使える一人称なのだと理解しました。

女性男性問わず、自分に子や弟妹や甥姪、孫などがいれば、前号で紹介したような「お父さん」「お母さん」「お兄さん」「お姉さん」「おじさん」「おばさん」「お祖父さん」「お祖母さん」などの家族の呼称をそのまま一人称の「私」として使います。

すなわち、タイ社会においては、「話す相手が誰か」によって、一人称を使い分けます。フォーマルな表現である「ポム」「ディチャン」以外には、タテの人間関係が反映されますので、話し手は常に（その相手に対する）自分の立ち位置を念頭におかねばなりません。この点については、汎用性のある「ポム」を使える男性よりも、女性の方が日常的により複雑な「一人称」の使い分けを実践していることになります。

## ●王族用語

タイ語にはラーチャーサップ（王族用語）という別格の表現体系があります。王族用語については、本連載（8）王国としてのタイ その1～タイ人と王室でも触れた通り、使われる単語（名詞・動詞）は一般タイ語とは全く異なるのが特徴です。その起源は、クメール語にあると言われています。

たとえば、一般タイ語では「行く」という動詞は「パイ」、「来る」は「マー」ですが、王族用語では共に「サデット」（お行き遊ばす／お越しになる）と言います。タイのテレビで「本日の王室一家」のニュースを見ていると、王家のどなたかがどこどこに行幸された——といったリポートが多いため、「サデット」はとてもよく耳にします。

王様をご自身を「私」と称される場合、「ボム」ではなく「カープラプッタチャーオ（聖なるブッダのしもべ）」という表現を使います。また、一般の人が王様へ呼びかける時の口上は非常に長く、「あなたのおみ足の下のおホコリのような存在である、私　〇〇は・・・」という風に言上します。

タイ人は、人間の身体的位置に優劣をつけます。頭が最上位で、足が一番位が低いのですが、王様のお身体で一番低い位置にあるおみ足の更に下にある埃にたとえることで、王様との間の（身分上の）距離感を表現しています。

2016年07月25日

## 【チャオプラヤー川に吹く風（40）】上下関係の理 その3～タイ式の挨拶「ワイ」をめぐって



「ワイ」をする二人。向かって左側の女性が年少、右側の女性が年長者（筆者撮影）

前号、前々号では、タイ語の敬語的表現や一人称の用法など、ことばの側面から、タイ社会における「上下関係」のあり様をみてきました。今号では、タイ人の人間関係について、言語以外の所作から考えてみます。

### ●タイ式の挨拶「ワイ」

タイ人同士が、両方の掌を合わせて挨拶している姿をご覧になったことはあるでしょうか。「ワイ」と呼ばれる所作です。タイ旅行をし、ホテルやレストランの入り口などで、スタッフから「ワイ」をされた経験のある方も多いのではないかと思います。

この「ワイ」は、先に年少者が年長者に向かって行い、年長者が後から返す——というのが正しい順序です。

年少者がワイをする時は、お辞儀をするように顔を傾けるので、合わせた掌の指の先が自分の鼻～額のあたりになり、一方、年長者が返すワイは、指の先が顎から胸元あたりまで下がります（添付の写真参照）。

### ●ワイをする順序

ワイを先にするかどうかの判断基準は、「年齢」だけかということ、そう単純なものでもなく、「社会的立場」が反映されることもあります。（何をもって社会的立場の上下を云々するのか——ですが、重要な点を挙げるならば、職業、経済力、組織内でのポジションなどでしょう。）タイ人によれば、「タイ社会

には、年齢に関わらず、無条件で先にワイをされる3つの職業がある。それはすなわち『医師』『教師』『僧侶』とのこと。

たとえば、医者が患者より若くても、診察室で対面したら患者が先にワイをしますし、子どもを学校に通わせる親は、自分より若い、子どもの先生に先にワイをするという次第です。（「対・僧侶」のワイについては、本稿で後述します。）

企業や役所などの組織内ではワイをする時に、「年齢」と「ポジション」どちらが優先されるのか？・・・は、なかなか難しい問題です。明確な規準はなく、個々の判断によるところ大ですが、一般的に、年齢が若い上司と年上の部下の場合はどうなのか——タイ人に聞くと、「年下の上司から年上の部下へワイをすることは必須ではない。しかし、年下からワイを先にした方が人間関係は円満に運ぶのが世の常。まず年下の上司がワイをし、年上の部下が（恐縮な思いを表現しつつ）丁寧にワイを返すのが理想的」と言います。

小さな組織であれば、誰が年上で誰が年下かを皆が互いに把握していますが、大企業になると、顔を知っているだけで、年齢までは分からないことも多いため、タイ人にとっても「どちらが先にワイをすべきか」は悩ましい問題だそうです。

#### ●感謝を示す「ワイ」の流儀

ワイには「挨拶」以外に「感謝を示す動作」の側面があります。

（１）目下の人が目上の人に何かいただいた時／してもらった時：

目下から先に深いワイをします。目上の方は軽めにワイを返したり、（手がふさがっていてワイができない時は）微笑みを返したりします。

（２）目下の人が目上の人に何か進呈する（あるいは手渡す）時：

渡して両手が空いた後で「受け取っていただき、ありがとうございます」という感謝のワイをします。目上の方はワイを返します。

大学では、学生が教授にレポートを出す時なども、こうした所作を行います。

#### ●僧侶と「ワイ」

出家している僧侶は、在家の民衆に対してワイをしません。朝、托鉢の僧侶に食べ物を寄進する人たちは、僧が抱えるお鉢の中におかずやご飯などを入れたら、（もらっていただきありがとうございますと

いう思いを込めて) ワイをしますが、僧侶はワイを返さずに立ち去ります。これは、国王が仏教行事で僧侶に接する時も同じです。サンガ内での位階の高低に関係なく、僧侶が王様にワイをすることはありません。

## ●外国人として「ワイ」とどう付き合うか

タイ国で政治家が、年齢も立場も様々な聴衆に向けて演説をする際など、四方八方に向けてワイをしながら会場に入場するシーンがニュースで報じられることがあります。こうしたシチュエーションのワイは、日本の「会釈」に近いもので、上下関係を反映するものではありません。ワイの作法としては例外的なものといえます。

ワイをする場合、両者の間には原則として「上下関係」が介在します。言い換えるならば、ワイはタイ社会のタテ糸を反映した所作です。

「どちらが先にワイをするのか」「どのくらいの深さでワイをするのか」など、タイ人は幼少時からしつけられ、大人のワイを観察することで、自然に振る舞えるようになります。

「ワイは誰とでも、いつでもできるタイ式挨拶」と考えて、外国人がむやみに手を合わせると、された方が戸惑うのはもちろん、滑稽に映ってしまうことがあります。されたワイに対してワイで返すのは問題ありませんが、自分からワイをする際には、一旦相手との関係を考えて上で行うことが賢明です。

筆者は学生としてタイ社会に暮らしましたので、ごく自然に教授陣や年上の寮生にワイをし、あまり悩むことはありませんでした。しかし、日本からタイ国に赴任しているビジネスパーソンは、「年齢」「立場」「相手との関係」など、考える要素が多く、迷うところが大きいかもしれません。

特に、会社の看板を背負って交渉の場に立つ時など、ワイに付随する「上下の関係性」を持ち込むのは好ましくないこともあります。この連載の「その1」で書いた、年上のタイ人を「クン+名前」で呼ぶか、「ピー+ニックネーム」で呼ぶか——に通じるものがあります。海外生活において「郷に入りては郷に従え」の精神で過ごすのは意味あることですが、「対等性」を意識した言動が求められるビジネスシーンでは、ワイではなく握手をするなど、「タイ式」にとらわれない選択肢もあろうと思います。年長の尊敬するタイ人にワイをしたいのであれば、会議など公的な場所で会った時ではなく、よりプライベートな機会、たとえば一緒にゴルフや食事をした後の別れ際などにすることをお勧めします。

さて、3回完結を予定していた本連載ですが、予定を延長して、あと1回だけ「上下関係の理」をテーマに書かせていただきます。最終回では、タイ人の深層心理の中にある「分際を知る」という意識について説き起こしてみたいと思います。